

目次

序章 流行神研究史/流行現象/本論の視座	1
1、流行神研究史.....	2
1-1、流行神の定義	2
1-2、流行神とされる神仏	4
1-3、これまでの研究者の視点.....	5
2、流行現象.....	7
2-1、流行の定義	8
2-2、流行の特質	9
3、本論文の視座.....	13
第一章 信仰の諸相——『郷土の伝承』から	15
1、『郷土の伝承』について	15
2、信仰の諸相.....	19
2-1、信仰対象	19
2-2、由来	22
2-3、ご利益内容	28
2-4、祈願方法	30
第二章 新たな七福神——「奥州仙臺七福神」	37
1、毘沙門天から七福神へ	37
1-1、毘沙門堂の概略	37
1-2、毘沙門天信仰の変遷	41
2、流行りと巡り——「奥州仙臺七福神」の展開.....	46
2-1、「奥州仙臺七福神」の概略.....	46
2-2、「奥州仙臺七福神」の成立と展開.....	51
2-3、参詣者と巡礼者	54
2-4、マスメディアの報道	55
3、七福神の流行.....	58
3-1、七福神巡りの成立	58
3-2、明治時代の七福神巡り	59
3-3、戦後の七福神ブーム	61

第三章 新名所の形成—貧乏神神社.....	64
1、貧乏神神社とは.....	64
1-1、貧乏神神社の概況.....	64
1-2、参拝方法.....	66
1-3、宗教的思想—「気」と「天の大神」.....	68
2、分社による展開.....	70
3、マスメディア報道の明暗.....	71
4、ご利益分析.....	75
4-1、人数推移と男女比.....	75
4-2、地域分布.....	76
4-3、ご利益内容.....	77
5、旅行関連業者の関わり.....	79
5-1、旅行会社とバス会社の関与.....	81
5-2、ツアー団体.....	83
5-3、ツアーの目的.....	83
第四章 招福キャラクターの新登場—仙台幸子.....	87
1、仙台四郎.....	87
1-1、仙台四郎とは.....	87
1-2、仙台四郎の流行過程.....	90
2、仙台幸子.....	93
2-1、仙台幸子とは.....	93
2-2、実在する仙台幸子.....	95
3、仙台幸子の展開過程.....	96
4、グッズがもたらすご利益体験談.....	98
4-1、ご利益情報数の経年変化.....	100
4-2、購入者の地域分布.....	100
4-3、ご利益の内容.....	102
4-4、伝播方式.....	103
5、仙台幸子と仙台四郎の比較.....	105
第五章 インターネットから流行り出す神—「願いの宮」を事例に.....	108
1、「願いの宮」とは.....	108

1-1、金光教の概略	108
1-2、「願いの宮」の概況	111
2、「願いの宮」の展開過程	115
2-1、戦前までの繁栄期	116
2-2、戦後の停滞期	118
2-3、桃山就任後の復興期	118
3、桃山きよ志の取り組み	119
4、現地とインターネットにおける祈願とおかげ	120
4-1、現地の場合	121
4-2、インターネットの場合	124
5、インターネット時代の流行神	127
第六章 ヴァーチャルな神々——中国の「受験の神」	131
1、中国の受験事情について	131
2、「受験の神」とされる神々——「春哥」、「考神」、「範進」とは	133
3、ブームの展開とマスメディアの報道	134
4、祈願内容分析	141
4-1、「春哥」の場合	141
4-2、「考神」の場合	143
終章	149
1、現代の「流行神」	149
1-1、流行現象としての「流行神」	149
1-2、流行の特質から見る「流行神」	150
1-3、現代の「流行神」の様相	152
2、マスコミの作用	154
2-1、流行らせる・流行らせない	154
2-2、マスコミの取捨選択	154
3、インターネットの活用——通販と祈願	155
4、ツーリズムの働き	156
4-1、宗教の商品化	156
4-2、宗教と娯楽	156
5、現代人の宗教意識	157

引用・参考文献一覧（五十音順）160

序章 流行神研究史/流行現象/本論の視座

筆者はかつて大阪市にある金光教教会「願いの宮」を調査する際、桃山宮司から金光教祖 100 年祭記念作品の DVD をもらった。その映像の名は「おかげは和賀心にあり」といい、教祖赤沢文治の生涯を再現するものであった。安政年間、備中国浅口郡大谷村で一農民であった赤沢文治は、金神のおかげを受けさせることができるということによって、広く名が知られ、遠くからも大勢の人が訪ねてくるようになった。DVD によれば、これを見た近所の人「しよせんどこかの流行神のようなもんでしょう」と冷ややかしたという。その一言が筆者には印象深かった。ここの「流行神」という言葉には、一時的なもので、流行り出した後にすぐ廃れ、消えてしまうという意味合いが込められている。このように、「流行神」という言葉はかつて日常的に使われており、また様々な「流行神」は、近世以降説話や随筆に数多く記述され、人々の熱狂的な信仰を集める身近な存在であった。

しかし、宗教離れと言われる現代社会においては、「流行神」という言葉はますます日常から遠ざかっていき、「流行神」と呼ばれる神仏も姿を消してしまったようである。ところが筆者のみるところに依ると、近世の「流行神」と極めて類似している神仏は、現在においてもその出現は後を絶たないのである。よく知られているものとしては、1998 年に建立された「ハマの大魔神社」や 2009 年から急に人気を集めた明治神宮の境内における「清正井」などが挙げられる。「ハマの大魔神」は横浜ベイスターズの投手佐々木主浩の右手から型取りされたブロンズ像を御神体とし、わずか数ヶ月であったが、全国から参拝者が殺到した。また、「清正井」とは明治神宮の境内における石垣に囲まれた小さな池のことであるが、この清正の井戸は 2009 年テレビで紹介されたことがきっかけに、それを携帯の待受にすれば運勢が上がるということでブームになった。メディアでも頻りに報道され、2010 年 1 月 9 日の『朝日新聞』によると、「4、5 年ほど前から、有名人が紹介したり、芸能人のブログに登場したりして『運気が上がる場所』と話題に上るようになってはいた。昨年末にテレビで紹介されたとたん数時間待ちの行列ができるようになったという」。こ

のような流行現象は、時代と地域を問わずに形を変えて繰り返し発生しており、また信仰の対象となる流行神に多くの研究者が関心を寄せている。

流行神の出現は、多くの場合、新たな宗教の発生を意味する。筆者は、宗教がいかにも生まれ、広がっていくかに関心を持ち、流行神を通して宗教の発生・伝播するメカニズム及び現代人の宗教意識を考察することを研究課題としている。本章においては、流行神と流行現象に関する先行研究を整理した上で、本論文の視座を明らかにすることを目的とする。

1、流行神研究史

1-1、流行神の定義

まず、流行神とは何かいくつかの定義を見ていこう。『日本国語大辞典』の「流行神」の項目にはこのような説明と用例が書かれている。

ある土地で一時的に爆発的な人気を呼び、多くの信者や参詣人をもつ神。

*俳諧・小町踊 [1665] ちらし・春「とし徳や来る春毎のはやり神〈重良〉」

*雑俳・軽口頓作 [1709] 「待てある・わに口の緒のはやり神」

*平民之福音 [1899] 〈山室軍平〉一「又は、『近来（ちかごろ）の流行神（ハヤリガミ）だから』と申して、一向其神仏の由来因縁を尋ねず」

また、『日本大百科全書』の「流行神」の項目にこう記述されている。

突如として出現し、ごく短期間に爆発的に流行して熱狂的な信仰を集める神や仏の総称。

「ある土地で」と「一時的」という言葉は、流行神に地域性と短期性の性格があることを示している。流行神という言葉はよく文学作品に出ており、日常生活においても庶民の身近な存在である。

宗教学と民俗学の分野において、これまでの研究者が与えた定義について、鈴木岩弓の論文に詳細にまとめられている。鈴木はこれまでの研究者の定義を「〈信仰行動のあり方〉に着目した定義」と「〈信仰対象の持つ機能〉に着目した定義」と分け（鈴木 1992a : 4）、前者は宮田登による定義を代表としている。その内容は下記の通りである。

流行神とは突発的に流行し出し、一時期熱狂的な信仰を集め、その後急速に、信仰を消滅させてしまう神や仏である（宮田、1972b）。

宮田のこのような「極端なはやりすたり」を流行神の条件とする視点はほかの研究者にも受け入れられ、例えば、『民間信仰辞典』と『日本宗教事典』には下記のような説明が見られる。

突発的にその存在が注目され、一定期間熱狂的な信仰を集めるが、その後急速に信仰が消滅してしまいかえりみられなくなってしまう神や仏に対する名称（菊地健策 1980）。

突然始まり、一時的に熱狂的な信仰を集めるが、のちに急速に信仰が衰退する神や仏（榎陽介・大嶋善孝 1985）。

これらの定義は用語の違いがあるものの、流行神の突発性と一時性に注目する論述が共通している。流行神研究においては、一般的に採用される定義である。

また、後者を代表とするのは、桜井徳太郎の定義である。桜井は宇和島地方での事例として、「流行病をはやらせる存在がハヤリ神である」と述べている。さらに、伊藤唯真は両方の指摘を取り入れ、流行神を以下の二種類にまとめた。

1. 流行性の病気や禍厄をもちこむ悪神
2. 福神的な性格をもって、突如信仰を集める靈験あらたかな神仏である。はやりすたりが極端であるが、一時期、熱狂的な信仰を集めた靈験あらたかな神仏である（伊藤唯真 1979）

鈴木は宮田を代表とする前者の定義を「より汎用性をもった現実的な定義」（鈴木 1992a : 4）と同意を示した一方、その視点による流行神はすべて流行の完了したものに限定され、現在流行中の流行神を対象とする研究は成立しないと指摘した。鈴木は現代学の立場で流行神をこのように定義した。

ことさら靈威ある存在と観念され、以前よりも、あるいは同時代の他の神仏よりも、熱狂的な多くの人々から信仰対象として選択されている神仏。

また、流行神を判断する指標として、＜参詣者の急激な増加に起因する宗教施設の拡大

を伴っている>ことを提示した。鈴木はこの定義は最新のものであり、流行神研究に新たな視点を示したものである。

1-2、流行神とされる神仏

続いて、流行神とされる神仏はどのような神仏であったかをこれまでいくつかの研究者の指摘を通して見ていきたい。まず、柳田國男は『石神問答』の中で、こう述べている。

近世の流行神鍬神の如きは本源伊勢に在りと申し候へども 其蔓延の極盛時に当りては 鉦鼓雑揉正に九百年前の修多羅神福德神の流行 さては大昔の常世の神の狂態に伯仲せしやうに候 御蔭参りと云ひ御祓の降りたる騒と云ひ 老人今も之を談ずる者少なからず 多数民衆の心理には究竟不可思議の四字を以て答へざる能はざる現象比々として多く候 (柳田 1910)

柳田は流行神の例として、近世の鍬神、九百年前の修多羅神・福德神、大昔の常世の神、御蔭参りを取り上げ、その背後に「究竟不可思議」な多数民衆の心理があると説いている。

また、松岡静雄は天満天神、八幡大菩薩、山王権現や熊野権現を流行神とし、その発展経緯を論述した。そのほか、下記の神仏もその本質が流行神であると述べている。

渡海守護として有名な大三島の和多志大神及讃岐の金毘羅大権現 (印度王舎城の鎮守)、水神の祠といわれる久留米の水天宮、七福神中の大黒天 (梵神)、恵比須 (夷神)、辨財天 (梵神) の如きも、今では其々大山祇、大己貴 (崇徳天皇配祀)、天御中主を祭神とし、或は大國主、事代主、市杵島姫と同一神として居るけれども、其本質が流行神なることはいふ迄もなく、いづれも攘災招福の要望が隆になつてから祭祀せられたもので、決して我民族固有の信仰ではない (松岡 1938 : 73-74)。

また、宮本常一 (1940) は論文の中で、山口県大島郡家室西方村の荒熊神社と牛荒神、愛媛県越智郡大井村の明堂様の三つの事例を取り上げ、それぞれいかに流行するようになったかを報告した。

宮田登 (1972a) は主に近世の諸文献を手がかりとして、江戸の事例を始め数多くの流行神を紹介した。その典型例として太郎稲荷、翁稲荷、五瀬明神、錐大明神や瘡の神などを挙げ、また御霊信仰、和霊信仰、疱瘡神と福神信仰の系譜に分け分析を行った。そのほ

か、弥勒踊りやええじゃないかななどにつながるお陰参り、木食徳本などの入定行者への信仰も考察の射程に入れた。

鈴木岩弓（1992、1995）は一連の論文を通して、昭和 50 年代流行し出した広島県府中市の「首無地藏」、岡山県横樋海岸の「横樋観音」、広島県神石郡豊松村の「幸運仏」や岡山県井原市大江町梶草の「嫁いらず観音」などを事例として取り上げ、現代の流行神の様相を明らかにした。

繁田信一（2011）は平安時代時代中期に平安京の庶民層の住民たちによって主催されたいくつかの大規模な疫神祭祀を流行神現象と見なし、従来あまり言及されていなかった平安時代に触れ、「王朝民俗学の可能性」を指摘したのである。

さらに、村田典生（2010、2011、2012）は近世の山科妙見のほかに、平成に入ってから事例を中心に、例えば京都市東山区の正法寺、中京区の御金神社、東京都千代田区の東京大神宮、台東区の今戸神社、石川県羽咋市の気多神社、京都亀岡市の出雲大神宮などを報告した。

以上、これまで研究者により報告されてきた事例はさまざまであるが、「<信仰行動のあり方>に着目した定義」を踏まえた上での立場は共通している。このように、数多くの流行神が時代と地域を問わずに登場することは、「規模の大小はあるが、流行神の現象は、日本史の流れの中で、通時的に表出してきた」（宮田 2006:160）ことを裏付けると言える。

1-3、これまでの研究者の視点

次に、これまでの研究者はいかなる視点で学術的アプローチをしてきたのかを概観してみたい。

(1)事例の指摘：

柳田國男と宮本常一による早い時期の研究は、すでに流行神と一括される宗教現象に注目していたが、しかしこれらの研究は事例の指摘に留まり、その信仰の仕組みを問うような観点はほとんど見いだせなかったと鈴木が批判している（鈴木 1992a : 1）。松岡静雄と繁田信一の研究もこの類に属している。

(2)流行神の構造と思想：

流行神の事例を多く取り上げ、その構造と背後に潜んでいる思想を考察したのは宮田登の研究である。その主な論究は、以下の四つの部分にまとめられる。

1、流行神の特性：

- ①信仰対象の神仏が雑多である。
- ②信仰に永続性がなく、きわめて流動的である。
- ③靈験が個別的・機能的に説かれる。
- ④その伝播は地域的に制約される。

2、神仏の出現の仕方：

- ①土中出現型
- ②空中飛来型
- ③海上漂着型

そのほかに、寺院の境内仏として特別の靈験を付会して流行神を仕立て上げる例もある。流行神現象を起こさせる場合、必ず神仏の新しい靈験を創作する宗教者が介在していることが認められる。

3、流行神を生み出す社会背景：

近世に入り、個人祈願が盛んになったこと、経済的基盤の不安定な寺院が、境内の持仏や鎮守神に現世利益的な靈験を付け加え、信者を獲得しようとすることや社会的緊張ないし社会不安の存在などが流行神が起こる社会背景となる。

4、流行神現象の背後にある宗教意識・思想：

流行神現象の背後に民衆の持つ終末観、世直し思想、メシアニズムの思想があると予測された。

宮田の論考は主に過去の事例を研究対象とし、歴史民俗学のアプローチをしてきた。氏の研究はほかの研究者にも影響を与え、流行神研究の大きな柱であると言える。

(3)流行神発生のメカニズム：

流行神が発生し、伝播するメカニズムに注目したのは鈴木岩弓の研究である。鈴木は当時流行中の一連の事例を取り上げ、関与している人々を中心に聞き取り調査と文字資料の

分析を実施し、流行神の発生、展開過程を明らかにした。宮田の理論を具体的に検証したと同時に、流行神の発生と伝播にマスコミが果たした役割、宗教者と俗人の関わりなどを明らかにした。

(4)流行神発生の社会的要因：

村田典生も流行神の構造、思想と発生の原因を近世と現代の事例を通して考察を行った。村田は民衆の信仰秩序における流行神の位置づけを論じ、それに対する参拝は不安への払拭が目的だけではなく、遊行の要素が大部分を占めると述べた。また、近年「縁結びのワースポット」として人気を集めたいくつかの神社をめぐりアンケート調査を行い、その現象が生じた社会的要因を分析した。

このように、流行神を対象とする研究は少なくはないが、そのほとんどは流行神と見なす事例が前提として存在しており、それに対する性格の抽出なり、原因の分析なりが行われている。その前に流行神がいかに限定されているかという問題に関しては、鈴木が指摘した「宗教施設の拡大」以外に具体的な判断指標がほとんど示されていなかった。もう一つの問題は、インターネットというヴァーチャルの領域も視野に入れるとすれば、「宗教施設の拡大」が伴わないヴァーチャルな場合に、それが流行神と言えるどうかをいかに判断すればよいのかということである。ここでは、流行現象に関する研究を参考しながら、流行神と流行現象をいかに認識すればよいのかを確認しておきたい。

2、流行現象

「流行神」は名の通り、その登場には必ず流行現象が伴っている。もちろん宗教の域だけではなく、日常生活の中で、様々な流行現象が見られ、特にファッションの領域は代表的であり、絶えず新しい服装やヘアスタイルなどが世に出て、流行するようになる。このような流行現象については、社会学、特に社会心理学の分野で豊富な先行研究が蓄積されてきた。宮田は流行神が「文化現象の流行を文字通り神仏信仰にあてはめたもの」との記述から、流行神はファッションや流行語と同様に流行現象の一種と考えられる。ここでは、まず「流行」の定義と特質から見ていきたい。

2-1、流行の定義

流行現象に関する学説が数多く残っており、多岐にわたっている。ここで諸学説の具体的な内容を省き、日本の研究者により規定されたいくつかの定義だけを紹介しよう。

流行とは、ある社会集団のなかで、一定数の人たちが一定の期間、ある意図のもとに始められた同様の集団行動をとるように心理的に誘われることである（南 1957 : 418）。

流行とは、ある一定の短い期間内に、一定の社会内の相当範囲の人々が、その趣味・嗜好、思考判断、行為動作などの様式を比較的自由に選択し、採用し、廃棄することによって生じ、かつ力動的に変化消長するかなり広範囲な社会的同調行動の現象である（斎藤 1959 : 184）。

流行は単にあるアイディアなり、行動様式なりが社会の中に浸透して行く過程にとどまらず、この浸透の過程を通して、流行に参加して行く人間が拡大することによって、絶えず大衆の目による判断が定義し直されて行く過程を含んでいるのである。流行はそれに参加するすべての人間によって、一時的につくりあげられる「集合的な創造の所産」である（藤竹 1969 : 104）。

これらの定義はいずれも流行そのものの性格と実態を説明したもので、流行現象を判断する基準を示すものではなかった。しかも、「実際には流行現象はそれほど明確なものではなく、その決定的な定義はまだないといってよい。今世紀初頭以来、数多くの定義が提出されてきているが、それらの意味するところは広狭さまざまであって、必ずしも一致しているとはいいがたい」（鈴木裕久 1977 : 122）と鈴木裕久が決定的な定義がないことを指摘した。

だが、研究者の立場上の違いはあるものの、流行現象はかならず「一定の期間」や「一時的」なものであるという認識は共通している。このように社会学の立場から規定された流行は「いずれすたる」という意味合いが込められ、宮田登により規定された流行神の「はやりすたり」の構造と共通性を示している。また、表現は異なるが、「集団行動」、「社会的同調行動」、「集合的な創造の所産」という言葉に共通の内容が含まれており、流行現象の

本質は一定の人々により行われる集団行動である。流行神現象に反映すれば、神仏に対する参詣行動、また、ヴァーチャルな場合は、インターネット上の祈願やグッズの購入などの集団行動が流行現象の表象となると考えられる。

2-2、流行の特質

(1) 池内一——流行と普及

上記の定義と異なる視点で、池内一は流行と普及過程との相違から流行を定義した。池内はこのように述べている。

ある社会の中に、これまでとは違った行動様式が導入され、一般化してゆく過程を、通例普及過程 (diffusion process) という。流行はその特殊な類型とってよいであろう。他の一般的な普及現象と同様に、流行は、社会の多数成員の一定の行動様式を (少なくとも直接には) 各自の自発的意志に従って採用する結果として生ずるものであるが、ただそれは、(1)なんらかの意味で目新しい、ときとしては奇異な行動様式が、(2)短期間の間に急速に広まり、(3)しかも、それがたちまちにして飽きられ、捨てられ、姿をけしてゆくというめまぐるしい浮動性を示すことが多いといった特徴を持っている (池内 1968 : 317)。

池内が流行を普及過程の特殊な類型として取り扱い、その違いは①新しさ、②急速な広がり、③浮動性の三点に要約した。流行を普及過程の特殊な類型として取り扱う池内の見方は、ほかの研究者にも見られた。流行神に当てはめて言えば、新たに生まれ普及して行く神仏の中、その一部の特殊な神仏が流行神と見なされる。しかし、池内は流行を限定する基準を示さず、「その区別にたいした意味はない」と以下のように語った。

しかし、実際には、同じく流行といっても、<静かなブーム>から<爆発的な流行>までさまざまな型があつて、流行とそれ以外の普及過程の間に明確な一線を引くことは困難である。両者を概念的に区別することは可能でも、その区別にたいした意味はない。むしろ流行を一般的普及過程の一部として取り扱ってゆくほうが、その本質を理解する上でより適切であろう (池内 1968 : 317)。

(2) 鈴木裕久——流行の特質①

鈴木裕久は池内のこの指摘が正しいと支持を示した上で、流行現象はほかの一般的な普及過程には見られない特徴として、以下の「新奇性 (novelty)、効用 (utility) からの独立、短命性 (transitoriness)、瑣末性 (triviality)、機能的選択肢 (functional alternatives) の存在、周期性 (cycle)」(その中「周期性」は不可欠な条件ではない) を指摘した (鈴木裕久 1977 : 122-125)。

新奇性	一般に普及現象はすべて、その初期の段階では当然“新しい”。しかし、ある普及現象がとくに流行現象と称される場合には、その新奇性の印象の度合がかなり強いことが多い。
効用からの独立	流行とよばれる普及または変化が、その事物あるいは思考や行動パターンが本来もっている客観的ないし物理的効用から独立である。
短命性	流行はきわめて速やかに移り変わりやすいという特徴をもつ。多くの人々に受け入れられることが流行成立の条件であるが、広く普及すると同時にそれは新奇性という重要な特性を失うことによって消滅へ向かう。
瑣末性	人間生活の本質的な部分とほとんど関係せず、非合理性が害にならない外部や表層に関するものである。
機能的選択肢の存在	ある選択肢群のなかから特定のもののみが選択される。
周期性	“反復する”現象。これは必ずしも不可欠な条件ではない。

(鈴木裕久の記述を元に、筆者作成)

鈴木裕久は、ある普及現象が流行現象であるか否かは、これらの特徴を備えているかどうかによって決まるといってよいと指摘し、特に関与する人々の心理に依拠して判断することを強調した。

流行は普及現象のなかに含まれるとしてもきわめてユニークなものであって、つねに人びとの心理や主観的判断に依拠して存在しているものであるといわざるをえない。つまり、ある普及現象が流行現象であるか否かは、その現象の外見的・物理的特

徴のみによって決まるものではなく、それに関与する人びとがそれと心理的にいかに
関わり合っているかということにも依存するのである。こうした心理的な関わりの有
無を無視して、外見的形態からある現象が流行現象であるかどうかを決めることは不
可能である（鈴木裕久 1977：125-126）。

鈴木裕久が指摘した流行現象の特徴については、「効用からの独立」と「機能的選択肢の
存在」をどう捉えるかを課題として残し、小田島建己は流行現象の特徴と流行神の性格と
のいくつかの共通点を論究した（小田島 2013：29-30）。鈴木の説明によれば、「効用か
らの独立」とは「事物あるいは思考や行動パターンが本来もっている客観的ないし物理的
効用から独立」することを意味し、流行神の場合は、「鰯の頭も信心から」という言葉が示
すように、本来神仏信仰と関係のないものが、突然特別な靈験が付与され信仰対象となっ
た例は甚だ多いが、しかし、すべての流行現象はこの特質を備えるかいなかを個別に考察
する必要があると考えられる。また、「機能的選択肢の存在」とは「ある選択肢群のなかか
ら特定のもののみが選択される」ということであり、つまり強制的に選択させられること
ではなく、自由選択できることが流行を生み出す必要な条件である。神仏信仰の場合、数
多くの神仏の中からある特定の神仏が選択されることにより、流行神が流行することに至
るのである。

「新奇性」と「短命性」は文字通り、流行は常に新しいものでり、普及すると同時にそ
の「新奇性」を失った時にもはや流行ではなくなる。そのため、流行は「短命性」のもの
となる。鈴木裕久は「流行はかならずある期間内に消滅しなければならない。広く普及し
たまま定着してしまったのは、通常、もはや流行とは呼ばない。流行を“習慣”（custom）
から区別する現象的特徴の1つは、この短命性である」と述べた（鈴木裕久 1977：123）。
つまり、流行は「新奇性」を失った時にもはや流行ではなく、死滅してしまい、あるいは
習慣として定着してしまう。「瑣末性」とは、本質的な部分とほとんど関係せず、外部や表
層に関することを意味し、『流行神』と伝統的宗教が並行して信仰されるような場合と似
ている」（小田島 2013：29）。

このように、「効用からの独立」という点は、個別な事例の場合具体的に考察する必要が

残っているが、ほかの「新奇性」、「短命性」、「瑣末性」や「機能的選択肢の存在」といった特徴は把握しやすく、流行神を限定する際の指標になりうると考えられる。

(3) 川本勝—流行の特質②

後に川本勝は流行を「社会の許容する範囲内で、社会生活を営む個々人の新しい社会的行為が他者との間において影響しながら、新しい行動様式、思考様式として社会や集団のメンバーに普及していく過程であり、その結果、一定の規模となった一時的な集合現象である」(川本 1981:20)と定義し、流行現象の特質を以下の「最新のもの、一時性、社会的・文化的背景を反映する、瑣末性、一定の規模を持つ」にまとめた(川本 1981:38-52)。

最新のもの	流行は、ある集団や社会の中で、従来から存在している行動様式や思考様式とは異なった新しい様式、あるいは、なんらかの点でそれに変化が生じたものとして、集団や社会のメンバーに新奇性が知覚される必要がある。そして、新しい行動や考え方として知覚された新しい様式が、メンバーの間に普及していくことを流行と呼ぶのであった。
-------	--

一時性	流行は一定の期間社会の中に生じているものである。それは、一般的には短い期間のうちに普及し消滅していく。しかも、われわれが通常流行というのは、その普及過程の初期を指している。なぜならば、長期間にわたって普及した場合には、もはや流行の第一の特質だった最近のものであるという点が失われるからである。
-----	--

社会的・文化的背景を反映する	流行は、商品として作り出されているという側面も手伝ってたとえ一時的ではかないものであっても、「歌は世につれ、世は歌につれ」という言葉が示すように、それを流行せしめた時代の社会的・文化的背景と密接に関連しているのである。
----------------	---

瑣末性	一般的には、その基本的様式までは変化していない場合が多い。流行は行動様式であれ思考様式であれ、基本的な様式において生ずるよりも、その枠の中で基本的様式に変化を与える個別的な派生的様式にお
-----	---

いて生じている。言いかえると、流行は、「ささいなこと」をめぐって生起し消滅している点に特徴がある。

一定の規模を持つ 流行の規模は、それを採用している人数で決まる。もちろん、ある新しい様式を実際に採用し実践できるかできないかは、個人の持つ社会的属性などによって制約されることが多い。

(川本勝の記述を元に、筆者作成)

これは流行現象の性格と実態を表すものであり、流行現象を規定するものではないが、ここで川本が示した流行現象の特質は流行神現象にも当てはまる。例えば、「社会的・文化的背景を反映する」について、宮田が指摘した江戸時代の流行神の隆盛と、幕府の宗教政策が深く関連することが（宮田 1972a）、その点を証している。「一定の規模を持つ」ことは、流行神の地域性に通じており、また、鈴木岩弓が論文において首無地蔵の参詣者数を統計し（鈴木岩弓 1995）、「一定の規模を持つ」ことを実証したと同時に、その規模の大小を具体化した。ほかに、「最新のもの」、「一時性」、「瑣末性」は鈴木裕久が指摘した「新奇性」、「短命性」、「瑣末性」と共通している。

3、本論文の視座

以上、流行神と流行現象に関する先行研究を概観してきた。要するに、流行神現象は流行現象の一つとして、その本質は一種の集合行動である。流行項目が実在の神仏である場合はそれに対する参詣行動、またヴァーチャルな場合は信仰対象に対してインターネット上の祈願やグッズの購入などの集団行動が流行神現象の表象となる。鈴木岩弓の定義は特にこの流行神現象の表象に注目したものであると言えよう。

また、流行項目としての流行神は、いくつかの特質を備えている。鈴木裕久などの理論の最大公約数的なところをまとめれば、「新奇性」、「短命性」、「瑣末性」が挙げられる。つまり、流行神は伝統的宗教と並行し、その新奇性が極めて顕著であり、しかも普及していく過程の中で、新奇性を失い、消滅してしまうか形式的な習慣となってしまう。宮田などの定義においては、とりわけこの内の「短命性」が強調されていると思われる。

本論文においては、鈴木岩弓による流行神の定義を踏まえた上で、インターネットというヴァーチャルの領域も視野に入れることにする。「参拝者か祈願者、あるいはそれに相当するご利益体験者が急増すること」を、流行神を限定する指標として、「奥州仙台七福神」、貧乏神、仙台幸子や仙台四郎などのいくつかの事例を現代の流行神と見なし、その発生と展開過程を明らかにした上で、流行現象の特質と対照しながら、その新たな特徴やメディア、インターネット、ツーリズムとの関連およびその背後にある宗教的志向などの問題点を分析しまとめていくことにしたい。

第一章 信仰の諸相——『郷土の伝承』から

流行神と称される神仏は、江戸時代の随筆、紀行文や神仏の案内書などに数多く記録されている。「朝観音に夕葉師」という言葉が示す通り、日本人の信仰生活においては、数えきれないほどの神仏が矛盾なく共存している。その内、流行神が時間と空間を問わずに通時的に登場し、流行現象を巻き起こした後、消滅してしまうか習慣となってしまう。このような流行現象が繰り返し発生していることにより、現在の信仰体系に大きな影響を与えたと考えられる。そのため、流行神は宗教の発生と伝播、及び民衆の信仰、意識や思想を究明するには非常によい手がかりとなる。本章においては、個別な事例考察に入る前に、まず 1930 年代に編纂された『郷土の伝承』に見られる庶民の信仰を集める事例を分析することを通して、流行神の生ずる土台を考察し、信仰の諸相を明らかにしたい。

1、『郷土の伝承』について

『郷土の伝承』とは第二次世界大戦以前における宮城県の民俗採取資料の集録である。全巻は三輯からなっている。第一輯は宮城県教育会の機関誌『宮城教育』の特集号（388号）として 1931 年(昭和 6)に刊行され、第二輯は 1933 年（昭和 8）、第三輯（刊行年代不詳）も『宮城教育』の別集の形で刊行された。当時、郷土研究が勃興していることを背景に、宮城県においては、『郷土の伝承』に先立ち、『郷土人物傳』（1929）、『宮城縣名勝地誌』（1931）が次々と宮城県教育会により編纂された。更に、1926 年（大正 15）から 1937 年（昭和 12）にかけて、柳田國男が数回にわたって仙台を来訪し、民俗学の講義を行った。1927 年（昭和 2 年）の講演「教育と民間伝承」の筆記は『郷土の伝承』第一輯の巻頭に載せられ、「本會は本書の刊行を企て此が資料を蒐集せんとしたのは實は數年前の大會に於ける柳田先生の講演が其の素地を為したといふてもよい」との注記が付いている。柳田國男の講演は『郷土の伝承』の編集を促したと言える。

本書各輯は伝説・信仰・昔話・習俗・年中行事・歌謡などの項目に分類されている。これらの伝承は、宮城県教育会が県下各小学校の教職員に呼びかけて、募集した各地の伝承

を集録したものである。全部合わせると 636 件に上り（表 1-1-1）、当時の県下一市十六郡に亘っている。

表 1-1-1 『郷土の伝承』の構成

項目 件数	伝説	信仰	昔話	習俗	年中 行事	歌謡	その他	合計
第一輯	196	8	22	25	2	17	2	272
第二輯	148	5	24	14	2	4	2	199
第三輯	103	17	17	11	1	4	12	165
合計	447	30	63	50	5	25	16	636

『郷土の伝承』より筆者作成

また当書に、神仏の伝承を始め、信仰対象となるものの由来、ご利益や人の祈願の仕方など庶民の信仰を示す記録が数多く残っている。その内、流行神と考えられるものの例がいくつか見られる。一例を挙げれば、「白藤観世音」という項目には下記の記述が記された。

白藤観世音は宮城郡根白石村小角區字上在家にある。拝殿間口六間奥行二間を有し、奥殿は九尺四面のものであり、近年五間に三間程の別當所も建られ立派なものになったが以前は奥殿と聊な拝殿が在ったのみであるが、この観音の縁起を尋ねるに往古田村將軍東征の時太白號なる駿馬があつたが、一夜毒草を食みて此の地に死んでしまった。將軍いたく惜しみ永く祀らうと里人の助けを得て馬体を三分し、その一なる首部を根白石村の東の山なる太白山の地に葬つて、後日馬頭観世音を祠らしめ太白號の名を取つて太白山観世音と稱した観音堂がある。現に蒼全堂（字の正誤詳ならず）と稱し六月十八日を以て祭を行つてゐる。郡誌に依れば之の観音を以て田村將軍の馬を祭つたと有るも口傳に依るとそうではない。そこでこの場合口傳を主としてゆく。

或は其の内に史料を得らるゝやも許り堅し、次に胴を根白石區堂所の堂宮権限の地に祭る（字の正誤詳ならず堂は胴にあらざるにや）次に腰部以下を小角區の此の地に祭

る。之と何時にこの地に將軍の持ち來つた筈は記念にと立つるに其の後、根が生じ芽がのびて、のち白藤なることを知る。里人この馬墓上に馬頭觀世音を祭る、いつの時代であつたか、墓上に馬頭觀音の坐像を立てゝ祭るやうになつた。未だこの坐像の向を變變するを許さずとの言ひ傳えである。堂宇の建立もいつ頃の時代なるやも知る事はできない。堂中に觀音の像を安置する。毎年四月八日に祭典を行ふ。特に腰部以下の病に利益があるとて近郷のみならず速くより團を作つて參拜多く、祭日以外の日と言へども隊を成せる參拜者を見ること不思議ではない、折つて歸るに必らず借物をなし、又は藤皮を得て歸る。昔日白藤の大樹あつたが參拜の信徒に藤皮を望まれて追々枯死せるも近年新に何處からか移植して堂前に飾る。郡誌の録する所に依れば白藤の枝芽細根を競ひ需めて呪咀の實驗に供ふとあるも藤皮異子白藤皮の薬用にして利のある事を知らない者の様である（宮城県教育会 1981：第一輯 37-38）。

この白藤觀世音は、田村將軍が愛馬の腰部以下をこの地に祭ることに由来し、腰部以下の病に利益があると伝えられる。「近郷のみならず速くより團を作つて參拜多く、祭日以外の日と言へども隊を成せる參拜者を見ること不思議ではない」との記述から当時かなりの盛況であつたことが窺える。地誌の『宮城縣根白石村史』には、白藤觀世音について、

「別に一定の信徒はないが川西の家々では大てい參拜し、各地から親類などが集まつて來て賑やかである。境内に白藤の木があり、その木を削つて飲むと婦人病に妙驗があると云い、一時流行神のようになり、祭日には何千人もの人が參拜した。現在はそれほど盛んでない」（根白石史編纂委員會 1957：158）

と書かれ、白藤觀世音に対する信仰は一時的な流行として、その後すたれてしまったことが示された。

さらに一例を挙げれば、平澤安産達磨大師堂も興味深い事例である。

平澤の町を西へ／＼と進むと右手に百年位経たと思はれる杉の大木の林があるそこが有名な安産達磨大師である。白い軽藻土の乾燥小屋を右にみつゝだら／＼坂を登ってゆくと古いお堂一つ淋しさうに安座ましましてある。石の名ばかりの階段を登ってお堂のうしろの所謂神の本体に額づけば、正面平たい石に穴一つあいてある小さいつかが横はつてある。之が信仰の人々の多い実体なのである。

お祭になると多くさんの婦人、いづれも腹の大きい連中がおまわりに来る。この参拝者たちは神の本体にうやうやしく安産を祈るのである。この達磨大師に額づき神の本体を信仰せばたしかに安産するとか、不思議なものである。秋のお祭りも近づいて来ました又たくさんさんの参拝者がやつてくるでせう（宮城県教育会 1981：第三輯 7）。

この記述から「淋しさうに」安座している達磨大師堂と裏腹に、お堂のうしろにある石が「神の本体」とされ、それに対して多くの妊婦さんが「うやうやしく安産を祈る」ことが垣間見える。『蔵王町史』によれば、この達磨堂の参拝講が結成され、一時期流行っていたようである¹⁾。

町内大字平沢のだるま堂の参拝講で、祭礼の日の三月十五日・八月十五日に行われた。安産を祈願する女子の講で、江戸時代末からの記録がある。妊婦が参詣すると安産するといわれ、近在はもとより県南と、福島県北部の広い地域に講が作られていて、往時は代参の人達で隆盛をきわめた。（中略）明治から昭和の中頃までだるま講は町内全域につくられていて、祭礼は大いに賑わったが、いまでは一部の地域に残っているだけとなった（蔵王町史編さん委員会編 1993：503）。

この参拝講はかつて広い地域に行き渡っているが、今ごく一部の地域に残ってしまい、そのはやりすたりが明らかである。

『郷土の伝承』には人々の身近な信仰対象が数多く集録され、その内流行神と言えるものが多々ある。これまで宮城県における流行神は先行研究においてあまり言及されていない

いため、大いに研究する余地があると考えられる。ここでは、流行神の個別の事例研究に入る前の基礎的な作業として、まず信仰対象とされるものの事例を統合的に見ることにする。

2、信仰の諸相

附表には「人の信仰を集め」、「参拝者が多い」（かつて参拝者が多かったのも含め）事例をまとめた（全 59 件）。これから、信仰対象、由来譚、ご利益内容、祈願方法という四つの側面から考察を行なっていきたい。

2-1、信仰対象

「鯛の頭も信心から」という諺があるように、人の信仰対象となるものは、実に多種多様である。附表にまとめた事例は、大別して以下の三種類に分けられる。

①**宗教施設、あるいは神仏像の形で定着する神仏**（45 件）。特定の神仏を信仰対象とする事例が全体の七割以上を占め、その種類と件数は表 1-2-1 にまとめた。その内、半分近くを占めているのは神社・祠であるが、それは必ずしも神道の神を祀っているものではない。例えば、例 34 の「榮存神社」が挙げられる。

榮存法印入寂後五十年大赦のあつた時、石巻松巖寺住職主唱となり湊町各寺院の住職連名して藩に請ひ、榮存法印の罪を赦され靈を牧山にうつし、大法會を修めて榮存神社として齋き祀つたのである。その後明治十七年全國神社調査の際公認神社と祀られたのである。江の島榮存神社は何時頃より神社と奉祀したかは記録を存しないので明瞭でないが、夙くより神として祀り尊崇し、靈驗顯著であるので信仰厚かつたものと思はれる（宮城県教育会 1981：第二輯42）。

この場合、名僧栄存法印が死後神として栄存神社に祀られるようになり、霊験顕著なため信仰を集めていたのである。神社・祠で祀られたのは神話伝説中の神だったり、実在した人だったり、動物だったりして様々である。また、表 2 が示しているように、神社・祠の次に地蔵の事例数が多く、仏の中でも地蔵がより親しまれると考えられる。

②墓・石碑の類（8件）。墓、石碑、木像などが祈りを捧げる対象とされる事例も確認ができた。人の墓が7件、動物の墓が1件、名僧の木像が1件をこの枠に入れる。前述した「栄存神社」とは違い、宗教施設や神仏像が併存しない場合があり、また併存する場合でも、墓や木像そのものが信仰対象とされることが分かる。事例 25 の「嘉治平法印の墓」は典型的な一例である。

仙台市東九番下光壽院に「嘉治平法印」と稱する有名な墓がある。百日咳（セリヒキ）、實扶控利巫（バヒフウ）に効顯あらたなりとあつて昔から信心者の參詣が絶えない。又墓石を煎じて飲めば効目が早いといふ信念から昔は四角な墓石も今は多角形をなしてゐる（宮城県教育会 1981：第二輯 1-2）。

仙台市光寿院にあるこの跡部嘉治平の墓は、現在東京回向院にある江戸時代の盜賊「ねずみ小僧次郎吉」²の墓と極めて類似している部分があり、「ねずみ小僧次郎吉」の墓も昔から墓石を削り、かけらや粉を持ち帰ってお守りにする習わしがある。また、上記の記述から、「嘉治平法印の墓」は相当人気があったと察せられる。

表 1-2-1 宗教施設・神仏像の種類

宗教施設・神仏像	件数
神社・祠	18
地蔵	13
観音	4
薬師	4
馬頭観音	2
毘沙門天	1
権現	1
不動尊	1
聖徳太子	1

③**自然物** (6件)。ほかに、自然物が信仰対象とされる事例も見られた。その内石が4件、植物が2件あり、前述した「平澤安産達磨大師堂」の例はこれに当たるが、例20の「彌勒石」も興味深い一例である。

色麻村宿區の中央尾張降秀の古館内に曹洞宗彌勒寺なる古刹がある。客殿佛壇の背後に高さ一尺三寸横一尺程中央に凹所ある奇石がある。名づけて彌勒石と言つてゐる。もと同寺は北目の西鳴瀬川の沿岸なる沼河原なる西川岸圍にあつたと言はれてゐる。開山正茂和尚の逝去したのは寛正二年で今より凡そ四百六十年前。彌勒石は時代が明かでないけれども洪水のため彌勒堂の表土があらはれ河原となつた際出でたものであるといふ。當時この石の凹所の水溜りはくさがさ(濕疹)に卓効ありと稱し遠近より詣ずるもの當時より今に至るも尚絶えない。

客殿内に安置されし只今は水溜りが無いから凹所を紙でこすりこれにてくさがさを撫し河に流すを例としてゐる。忽ち癒すると稱されている(宮城県教育会 1981: 第一輯117-118)。

この「彌勒石」は洪水の際土の中から出てきたものであり、その出現の仕方は「土中出現方」の類である。石の凹所に溜まった水は湿疹に卓効があるとされ、参詣者を惹きつけた。このように自然物が信仰対象とされる場合は、大体それが珍奇なものであるという特徴が共通し、石は由緒のある石、大石や奇石であり、植物は普通の植物と異なるとの説明が見られる。

総じて言えば、人は祈願のため出向いたのは宗教施設や神仏像だけではなく、石碑といった人工物から石や植物のような自然物まで様々である。しかし、上記の事例が示すように、参拝者に注目されるものもあれば、やがて背を向けられるものもあり、そのような信仰の温度差と流動性は、前述した「ハマの大魔神社」や「清正井」といった事例によっても表され、時代を問わずに普遍性を有する現象と言える。

2-2、由来

次に、これらの信仰対象とされるものの由来はいかに語られるかを見ておこう。言うまでもなく、神仏などの由来に関しては、怪異で不可思議な要素が常々入っており、また現実と伝説が混じりあい、どこまでが現実であるかなかなか検証しにくい。だが、これらの由来譚は、人が神仏などに対するありのままの感覚や観念を考察するに示唆が与えられる。ここでは、その由来が記される 47 例を主に以下の四つのタイプに振り分け、それぞれの特徴を考察していきたい。

①**神話・伝説型** (8 件)。まず、神仏、貴族や妖怪をめぐる神話や伝説が信仰対象の定着する根拠とされる信仰対象を神話・伝説型とする。例を挙げれば、例 2 の「薬師様」の話がある。

此の白山様とお薬師様とは同一境内にあるので是には次の様な傳承がある。翌四日は薬師寺のお祭であるがさて、元は薬師寺の建てゝある土地は白山様の屋敷であつたと云ふ。お薬師様が住み込むに就いて白山様と地所の貸借関係を濟し十年間の約束が出来上つた。そしてお薬師様が立派に建てられ、信心深い人々は足繁く參詣した。そしてお薬師様は一年増に繁昌して行つた。さて約束の十年になつたので、白山様は約束だから、この土地を去つて貰ひ度い事を申し入れた。處がその約束の十年の字の上にノの字が加筆されて居つた。誰がしたものやら分からない。白山様は實に吃驚した。十年が千年になつたわけである。然し最初の約束は約束であるので、白山様では參詣人に依頼して「お薬師様お立ちなされ」と云つて薬師堂の周圍を巡つて歩かせた（宮城県教育会 1981：第一輯 26）。

この話には、薬師様が白山様の屋敷を借り、十年間この地に住む約束をした。ところが、だれかが約束の十年の文字を千年に改竄したため、薬師様がこの地に住み着いたという。更に、もう一例を挙げれば、例 4 の「乳神様」には、神社の由来について以下のように記述されている。

昔橘豊日の命東奥鎮撫の爲め御下降遊ばされた時、玉世姫と申すお方を御同伴なされた。偶々此の隘路にさしかゝるや姫は産氣を催して止まない、命御思案の末路傍の巨石の上に下紐を解かしめ安産させ給はしめた。永の御旅に疲れ切つてお産なれば姫は兎角にお乳の出が悪く、王子の發育思はしくないので御愁念の折柄一夜神託を受けられた「此の奥に靈泉あり乳白色にしてさがすこと易し急ぎ汲み來つて與ふべし」と。命畏みて打ちよろこび小草を分け林を縫つて行く程に果して其の通りの泉があつた。直ちに汲んで來て姫に飲ましめ給ふと乳が俄に豊かになつて王子は健かに育つものといふことである（宮城県教育会 1981：第一輯 28）。

橘豊日の命と玉世姫がこの地に通りかかった時、玉世姫は産氣を催し安産をした。しかし、乳の出が悪く、そこで神託を受けて、乳白色の泉を飲んだら、乳が豊になったという。これらの例が示すように、信仰対象とされるものの由来は、神仏、貴族や妖怪の物語を通して語られているが、いつ、だれが、何をきっかけに信仰し始めたかという史実的な内容にはほとんど及ばない。それは、時が過ぎていくにつれて忘却され、物語のみ残されたのだろうと考えられるが、神仏などの由来を語る際よく見られるパターンである。

②**勸請・移動型**（9件）。次に、信仰対象が神仏の分身、分靈を受け、また既存の信仰対象を移すことにより生ずるタイプを勸請・移動型とする。信仰者や宗教者が積極的に宗教の伝播に関わることが一つの特徴と考えられ、中に奇異な靈驗譚は信仰が確立された契機となる場合もある。例えば、例 23 の「皇太神宮の御分靈様」は一つ典型例と言える。

昔々この神明草の或家に一人の子守が居た。その子守は誠に信心深い子で、常々「伊勢參宮がしたい\／」といつてゐた。或時その子守が「私はこの子をおぶつて伊勢參宮してくるからね」といつたので、その家の人々は「なにに子供にはおちこ（乳）も呑ませなければならぬんだに」といつて止めて置いた。すると何時の間にかその子守は姿をかくしてしまつた。が其の後その家の子供は何んとも知れぬ思い病氣にか

つゝて死んでしまった。家の人々は泣く／＼埋葬したがそれから丁度三年目の或日前にゐなくなつた子守が「私參宮して來ました」といつて歸つて來た。見れば不思議や先年死んだ筈の子供をおんぶしてゐるではありませんか。さて／＼世にも稀なる事よと皆んなが墓場に行つて死体を發掘して見た。處が更に不思議なる事には其處からは金のよたれ（御幣）が現れたがそれと同時に子供の姿が見えなくなつた。これは二人共にお伊勢様にうけられ申したので誠に尊い極みだとの事でお宮を建立して厚く祠つた（宮城県教育会 1981：第二輯 157-158）。

このお宮は伊勢の皇太神宮の御分靈様として崇敬され、子守は巫女として神に仕えた。後に、「お宮を七間四面に御改築して上げて年と共にお繁昌した。殊に南部の人々は伊勢參宮がなか／＼出來ないからといふので此の御分靈様にお詣して參宮に代へたといふ位で中々盛であつた」というふうに信仰が広がっていった。同じく有名な神仏を勧請する事例はほかにも4件が見られた。

また、例 32 の「代搔地藏」と例 52 の「瀧の観音」のように、自分の氏神や守り本尊を移住地に持ってくることにより、地元の信仰対象として展開されていく型もある。さらに、宗教者から神聖な神仏像などを授けることで新たな信仰対象が生まれるのは例 16 の「円光大師の木像」と例 26 の「濡れ薬師」がそれに当てはまる。これらの事例から、神仏などは受容したり、受容されたりすることにより、信仰が流動し伝播していくことが窺える。

③鎮魂・祭祀型（22 件）。そして、死者や動物が祀られたり、祟りを解消させたりすることにより確立された信仰対象を鎮魂・祭祀型とする。このタイプは全体の半分近くを占めており、一番多く見られる。その内、死者の祟りが鎮められた後ご利益を与える神仏と変身した事例が7件ある。例えば、例 22 の「首塚」が挙げられる。ここで長文のため原文を省き、その大筋は以下の通りである。寛文年間、津谷東禅寺住職木陽という僧は無実の罪で打首に処せられる。僧は打首の前に、もし無実の罪であれば首が地に落ちないと言ひ残した。結局刎ねられた首はどこかに飛んでいき、村にも怪異が現れ始めた。その後供養してもらいたいと僧の靈に頼まれた日山という托鉢僧は、僧の首を見つけその靈を慰め

供養をしたら怪異が消えてしまった。その地の人々は供養碑を立てその霊を祀り、頭部の病気に霊験あらたかというので祈願者が多く集まったという（宮城県教育会 1981：第一輯 131-132）。宮田による霊神の分類に従えば、これは「崇り克服型」であり、御霊から和霊へと変化する系譜に属する（宮田 1972a：89）。そして、例 14 の「胎賢の碑」と例 47 の「米谷守屋地蔵」に登場した易者や和尚といった宗教者は、崇りが生じる際、霊と人をつなぐパイプとして、崇りを鎮める際に重要な役割を果たしている。人が得体の知れない怪異に面する際、ほかでもなく、よくこれらの宗教者に助けを求めることも見られる。

ほかに、崇りが見られない場合は、生前敬愛されていた人や不憫に思われる人が死後祀られ信仰対象とされる例がしばしばある。前者の例としては、例 15 の「ひつちがひばんさま」を見よう。

今より百五十年程前、寛政年間、たけといふ老婆があつた。特に引違ひ（脱臼）せし人の、痛み患ふる箇所を揉みなどして多くの人を癒して喜び、其の報酬を貪らず恵深く自家に集る小兒をめぐこがつて（可愛がること）みた。

治療をうけた人々は御禮にとて婆さんのな嗜きな煙草や菓子などを持つて來たのを、煙草は吸ふ人に菓子は小兒に分け與へて喜ぶのを常とした。死に臨んで「われを神に祭らば心願者に必らず快を與へん、供へしお錢や菓子は小兒の自由に委し決してしかることのなき様に」と遺言をした。其の後たけ婆さんの宅地内に石御堂を建てて祭つた。現在は豪農鈴木正人氏の持地となり、この病で患ふ人の參詣するものが引きも切らぬ有様である。御賽錢、菓子、煙草などは老婆の言の如く自由にさせてゐる。生前の面影躍如たるものがある。明治中年頃地方の新色より婆々嶽大明神と謚られたと言つてゐる（括弧、下線原文のまま）（宮城県教育会 1981：第一輯 70-71）。

このたけという婆さんが生前引違い（脱臼）を癒し、子供を可愛がるため、死後神として祀られたことと似ているように、例 42 の「田中元珍の碑」には、田中元珍という医者が生前百日咳を直し、しかも薬代の代わりに酒を納めさせたというので、死後その碑の前に

酒を献ずれば百日咳が治るといふ。後者の例を挙げれば、例 49 の「小森御前祠」には、義経の臣鈴木三郎の妻が夫を案じて姥を連れて本吉地方に来たが、戦況により夫に面会することができず、この地で自死した。里人がそれを埋め祀ったが、女人の祈願者が多いとの様子である。即ち、神仏として祀られた人は必ずしも著名な人や身分の高い人ではなく、身近にいる人が死後神仏とされ、願かけの対象になることも多く存在している。

また、動物を祀った事例は、馬 3 件、鶏 1 件、狼 1 件が確認できた。馬に関する事例については、いずれも死んでしまった愛馬を祀ったが、馬頭観音の像を建て祀る場合もあれば（例 9 の「白藤観世音」と例 19 の「馬頭観音」）、神社を建て祀る場合もあり（例 12 の「馬上嶋崎神社」）、人を祀る場合にも通じるが、その祀り方は必ずしも一致しているわけではない。これらの動物も人と同じように祀られることにより、信仰対象とされたのである。

④**神示・出現型**（8 件）。最後に、②の信仰者や宗教者が積極的に宗教の伝播に関わることと対照的に、神仏のお告げや信仰対象となるものの突然の顕現などが要因となり、人がそれを受動的に受け入れた上で、信仰が生じたり、深まったりするタイプを神示・出現型とする。神示を特徴とする事例は例えば例 5 の「庄吉観音」がある。その由来は以下の通りである。明治維新前後、宮城県伊具郡丸森町に大銀杏樹があり、その付近に宍戸庄吉という百姓が住んでいた。長病に患っている庄吉は夢の中で、住居の近くの地蔵さんに大銀杏樹のほとりに聖観音像が埋められているから、それを掘起して祀ればお前の病気は立ちどころに平癒すると教えられた。お告げ通り聖観音像を掘り出し枕辺に置いたところ、庄吉の病気がケロリと平癒した。そこで庄吉は早速観音堂を作ってに安置したという（宮城県教育会 1981：第一輯 31-32）。例 10 の「台ヶ森鉦泉」、例 38 の「石神」と例 44 の「登米成田不動尊」もこれと同様に、本人が神仏から夢のお告げを受け、指示通りにした後、自分の病気が治ったり、村の疫病が消えたりするなどご利益が即効的であり、それで本人は信心を深め、時に祭祀の仕掛け人にもなる。また、夢のお告げではなく、例 11 の「夜泣地蔵」は、夜に赤子の泣き声がするため、よく探したら地蔵を発見した。その夜から泣き声が止んだという話のように、音声は神仏の導きとなる場合もある。これらの事例の特

徴とえば、夢にしる、声にしる、個人の宗教的な体験により、神仏の権威が確認され、結果として新たな信仰対象の誕生に結びつくことになったことである。

また、信仰対象となるものが突然現れる事例が 3 件あり、その内仏像が 2 件、奇石が 1 件である。例 3 の「毘沙門天」には、仏像が出現する経緯を示している。伊達政宗が栗野大膳を攻撃する際、毘沙門天の保護によりなかなか陥ることができなかった。政宗がその毘沙門天に願掛けをしたところ、大膳の城を落城させることが出来た。すると政宗はその毘沙門天に感謝してお堂を建てるつもりで担いで帰城の途についたが、その毘沙門天が容易に人の願いを聞き届けるので、次に自分も栗野と同じハメになるかもしれないと思い、辺りの溝に投げ捨てた。その後、付近の子供たちがその毘沙門天を拾い上げ、地元の人により奉られた。興味深いのは、「そこで毘沙門天は危い處を子供等に救はれた御禮心に此の後子供等の願は何んでも御聞きとどけ下さつて御利益を御興へ下さることになったといふことである」(宮城県教育会 1981：第一輯 28)。つまり、毘沙門天はこの出来事により、別のご利益を持つように生まれ変わった。そして、例 7 の「塩薬師」では、仮宿圀の東部に建てられた塩薬師如来堂が火災にあい、御神体が山上の松の枝に飛んできた。そこで、村人は堂を建立して祀った。この二つの事例はいずれも仏像が発見される前に、どこかで祀られている。例 20 の奇石の場合は、洪水のため弥勒堂の表土が現れ河原となった際弥勒石が出てきて、後に願掛けの対象とされた。

以上、信仰対象とされるものの由来譚を概観してきたが、全体的に非常にバリエーションに富んでいる。簡潔にまとめれば、人を神仏として祀る事例が一番多く見られ、祟りを解消するため祀らざるをえない場合もあれば、生前善行を積んだ人や哀れな死に方をした人、また、突然現れた奇異なものに対して主動的に祀る場合もある。さらに、個人の宗教的な体験に基づき、神仏から受けた神示により直接信仰対象の出現に導くこともある。その際、宗教者がよく神と人を結ぶ役割を果たし、新たな信仰対象の発生に力添えをしていることは看過できない。さらに、外部の信仰対象を受け入れ、自分の信仰対象を外部に発信することで、信仰の流動と伝播が現れ、その時、宗教者がよく布教者としての役目を持っている。このように、新たな信仰対象が生じる一方、既存の信仰対象が忘れられたり背

を向けられたりするようになっていく様子も見られる。

2-3、ご利益内容

次にご利益内容について分析を行う。一つの信仰対象が複数のご利益を持つ場合もあり、それを全て表 1-2-2 にまとめた。病気平癒のご利益が一番多く、全体の 5 割以上を占めている。また、その内明記された病名を表 1-2-3 にまとめた。これらの表から、当時病気治癒は信仰者にとって一番の関心であったことが窺える。特に、百日咳のような主として幼児に起きる伝染病は大きな恐怖であり、それを治してもらうために奔走する信仰者の姿が浮き彫りにされた。信仰対象のご利益をめぐる伝承は一種の生活知識としても共有されていたと考えられる。

表 1-2-2 ご利益内容と件数

ご利益内容	件数
病気平癒	27
子育て	6
安産	4
農業	4
所願成就	3
縁結び	2
勝負訴訟	2
家内安全	1
延命長寿	1
幸福	1

表 1-2-3 病名と件数

病名	件数
百日咳	5
耳だれ	2
ジフテリア	2
腰下の病気	1
起り	1
引違い	1
くさがさ	1
頭部の病気	1
流行病	1
耳の病気	1
みつえぼ ³	1
脱腸	1

これら信仰対象とされるものがいかに特定のご利益に結ばれるかについて、ここで考察を試みたい。ご利益が確立する経緯は、はっきり示されず、あるいはすでに不明になっている場合が多いが、特定のご利益を持つ信仰対象として定着している事例も多く見られる。例えば、ニワタリ、ニワトリ、またケツトリと呼ばれる鶏明神は東北地方に広く分布し、百日咳を治療するとされる。「鶏がクックっと鳴くのを、子供がせいて苦しむのを連想してのことといわれている」（岩崎 1982 : 371）との説があるが、いかに根付いてきたのかは分からない。また、地蔵がよく子供関係のご利益を持つとされるが、それは「死んだ子のために地蔵を信仰するのは、子供の守り仏として仏教の教えだろうが、現実の社会においても地蔵は子供のよい遊び相手であった」（岩崎 1982 : 378）との説明がある。このような信仰対象と特定のご利益との関係は比較的安定し、普遍的である。

また、由来譚がご利益の根拠を示す場合もある。例えば、前述した例4の「乳神様」には、玉世姫は乳白色の泉を飲んだら、乳が豊になったことは、乳の出がよくなるというご利益を裏付ける。同様に、夢のお告げを通して病気を癒してくれる神仏は、後に病気平癒のご利益があるとされる事例もいくつかある。

ほかに、由来譚と関連していないが、信仰対象を連想や類推を通してご利益と結びつける事例が数多く見られる。例えば、馬が祀られることに由来する神社は馬脾風病を治すとされる。これは「馬」と「馬脾風病」との語呂合わせによると推測できる。さらに、馬の腰部以下を埋めた馬墓の上に立てた馬頭観音は、人の腰部以下病気を治すと言われ、首切りをされた人は祀られた後、頭部の病気に霊験あらたかということは、「馬の腰部以下」と「死者の首」から「人の腰部以下」と「人の首」を連想しているからであり、同じように、石に湿疹の治癒を祈ることも、石の凹所から湿疹を連想していると考えられる。これらの事例は、病気平癒に対する切実な願いとともに、民衆の豊かな想像力も物語っている。

要するに、信仰対象のご利益は様々な経緯で確立されることが分かる。しかし、ご利益の内容が必ずしも一貫しているわけではなく、ある時、突然別のご利益が付与されることも少なくないため、神仏などのご利益を考察する際、その変遷をつかむように歴史的視座を取るのとは極めて重要であろう。

2-4、祈願方法

最後に、祈願者はいかに信仰対象に対して願掛けをするかを見ておこう。それは実に様々であり、時には神仏の好物を捧げ機嫌を取るが、また時には縄で縛るような一見無礼極まりないことをするのである。強いて分類すれば、以下の三つのパターンがよく見られる。

まず、酒、お菓子等を供えたり、絵馬をかけたり、額づいたりなどして、人が自分の願いを聞いてもらうように懸命に伝えようとするパターンがある。その中、縄で縛りかけ、願いが叶うまで解かないというような強烈な伝え方が取られる場合もある。

それに、借物をするパターンもよく見られる。例えば、石碑や石像を削ってご飯に混ぜて炊くことや、藤の皮を得て帰る事例では、信仰対象から借りてきたものはパワーのある神聖なものとされている。絵馬などを借り、願いが叶えば倍返しをするやり方もあり、それは現在でもよく目にすることである。

さらに、呪術的な行動を取るパターンもある。例えば、信仰対象を擦った後体を擦ることや、藤葛をくぐることなどがある。このような呪術的な行動を通してパワーをもらい、病氣平癒や祈願成就に結びつくと言われるのである。

当然、祈願者が願掛けを行う時は、複数のやり方を取る場合もあり、個人の工夫や発想で動くことも想定できる。そのような個人レベルの祈願方法も今後視野に入れて考えていきたい。

以上、第二次世界大戦以前に編纂された『郷土の伝承』を資料とし、人の信仰対象に焦点を当て分析を行なってきた。概して言えば、当時神仏だけではなく、いろいろなものが信仰対象となっており、それは現在にも通じることである。信仰対象の由来に関しては、人を神仏として祀ることや、宗教的な体験に基づく信仰対象の出現、外部の信仰対象の受け入れなど、要因は様々であり、時には宗教者が重要な役割を果たしていることが分かる。人は色々な願掛け方を通して種々のご利益を求め、その内病氣平癒のご利益に一番の関心を寄せていたことが窺え、それは戦前の医療状況を側面から反映していると考えられる。

次章からこのような庶民の信仰は時代とともにいかに変遷するのかについて注目しながら、その中から流行神がいかに生まれ、広がるかを個別的な事例を取り上げ、探っていきたい。

¹ この達磨に対する信仰の発生と伝播については、二瓶美佳の論文『安産祈願～宮城県刈田郡蔵王町平沢の安産達磨を中心に～』が詳しい。

² ねずみ小僧次郎吉は鬼あざみ清吉とともに、よく知られている江戸後期の盗賊である。昔から合格のご利益があるとされ、墓石が削られている。

³ 「みずいぼ」すなわち「水疱瘡」のなまりと思われる。

	場所	名称	祈願対象	由来	ご利益	願掛け方	宗教者の関与
1	仙台市米ヶ袋	縛り地藏	地藏	首切役人の萬右衛門は地藏を立て、寛文事件で処刑された伊東七郎重孝を祀った。		縄で地藏を縛り願掛けをする。	
2	仙台市木の下国分寺境内	薬師様	薬師堂		お産が軽い様にと産婦の安産	産婆達が正月七日の夜から翌八日まで夜籠する。	
3	仙台市荒町	毘沙門天	毘沙門堂	伊達正宗により堀に捨てられた毘沙門天を子供が拾いあげ担ぎ回った。後に今の所に安置された。	子供の病氣平癒とその他子供に関するご利益		
4	刈田郡齋川村	乳神様	神社	玉世姫がこの隘路に通りかかった時産気を催し安産をした。しかし、乳の出が悪く、そこで神託を受けて、乳白色の泉を飲んだら、乳が豊になった。	乳の出がよくなる	堂の中の女体の石像の乳部を削り、その石粉を混ぜてご飯を炊き食べる。二度目には白布に綿を入れた乳房二個を作って献じる。	
5	伊具郡丸森町	庄吉観音	観音堂	庄吉という者が夢告で大銀杏樹のほとりに聖観音像を掘り出し、観音堂を作り安置した。	病氣平癒		
6	名取郡六郷村五柱神社境内	藤塚	藤の古木	この社の神様が藤の筏に乗って此浜に着き其筏の藤葛が根つきそれで此浜を藤塚と称する。	疫病にかからぬ、かかっても軽病で済む	藤葛をくぐる。	
7	名取郡愛島村	塩薬師	塩薬師如来堂	仮宿廻の東部に建てられた鹽薬師如来堂が火災にかかり、御神体が山上の松の枝に飛んできた。邑人堂を建立して祀った。	家内安全、悪役退散、五穀豊饒		
8	名取郡愛島村	道祖神	神社		縁結び、性関係	左手だけで賽銭箱の材木に布を結びつけて、祈願をこめる。	
9	宮城郡根白石村	白藤観世音	観音堂	田村將軍の愛馬の太白號は一夜毒草を食みて此の地に死んでしまった。將軍は里人の助けを得て馬体を三分し、それぞれ祭った。腰部以下をこの地に祭った。將軍の持ちきた筈は記念にと立った後、根が生じ芽がのびて、のちに白藤になるという。	腰部以下の病に利益がある	祈って帰るに必らず借物をし、又藤皮を得て帰る。	
10	黒川郡吉田村	台ヶ森欽泉	温泉	延宝年間柴田某が半身不随の病にかかり、神に立願すると、夢に湯を授かった。	病氣平癒	入浴	
11	黒川郡粕川村	夜泣地藏	地藏	昔夜に赤子の泣き声がする。探したら地藏を発見した。	子供の夜泣		

12	遠田郡不動堂村	馬上嶋崎神社	神社	藩祖貞山公は愛馬の後藤黒に墓を立て祀った。	子供の馬脾風病(デフテリヤ)	神前に捧げた胡桃を神殿の階段より転げ落して、拾ひ取り各自の家に蔵し置く。	
13	桃生郡鷹来村	三峯様	神社	幸蔵は狼に襲われてそれを殺した。狼の死骸を川に捨てが、又同じ場所に流れ戻った。それで祈禱に話を聞き、宮を建て三峯様と祀った。	起こり(癩)	「むくれんこ」する(手と額をついて宙返りすること)	祈祷者
14	亙理郷吉田村(龍光寺境内)	胎賢の碑	墓碑	大正時代、名僧の祟りで吉田小学校の児童が死亡し、学校当局はお告げに従い名僧の墓を改葬した後、不祥事がなくなった。	病氣平癒	碑前にぬかづいて全癒を祈る	易者
15	加美郡色麻村	ひつちがひばんさま	石御堂	寛政年間、生前引違いを癒し、子供を可愛がるだけ婆さんは死後神として祀られた。	引違ひ(脱臼)	煙草やお菓子を供え、しかもそれを子供に自由に委す。	
16	加美郡色麻	円光大師の木像	木像	法然上人の高弟金光上人伝道のため、円光大師の木像を持ってきて安置した。			金光上人
17	桃生郡北村	幸運の石地藏	地藏	窪田惣五郎という学者は没後石像が建設され、祀られた。	幸福	小石を積む	
18	仙台市(宗禪寺境内)	義鶏の墓	鶏の墓	檀家は自分を助けた鶏の墓を立て祀った。	百日咳	絵馬をかける	禪宗寺の住職
19	黒川郡粕川村	馬頭観音	馬頭観音	伊達政宗の家臣鈴木重信の乗馬が葬られ、後馬頭観音に祀られた。			
20	加美郡色麻村(曹洞宗弥勒寺境内)	弥勒石	奇石	洪水のため弥勒堂の表土が現れ河原となつた際弥勒石が出てきた。	くさがさ(湿疹)	弥勒石の凹所を紙でこすりこれにてくさがさを撫し河に流す	
21	登米郡登米町	子持杉	大木の杉	元文五年に植えられたという。	子宝		
22	本吉郡御岳村	首塚	供養碑	東禅寺の木陽住職は無実の罪で首が切られ、祟があった。托鉢僧がその頭骨をみつけ、霊を慰め供養をした後、不祥事が消えた。地元の人のはの供養碑を立て霊を祀った。	頭部の病氣		托鉢僧
23	登米郡石森町	皇太神宮の御分霊様	神社	昔神明草の一人の子供が死に、その子守が伊勢参宮してきて、死んでいたはずの子供を連れ帰ってきた。子供の墓場を発掘したら、御幣が現れ、それを皇太神宮の御分霊として祀り上げた。(焼失)			巫女
24	黒川郡吉田村	榊澤権現			豊作		

25	仙台市（光寿院境内）	嘉治平法印の墓	墓石	仙台藩の足輕の嘉治平は処刑された時に消え、幣束一本が残された。	百日咳（セリセキ）、 實扶控利垂（バヒフウ）	墓石を煎じて飲めば効き目が早いという。昔祈願をこめる時は鶏一羽を自宅の戸口に逆さまに吊らして置いて願望成就の暁これを墓前に納めたという。現在鶏の絵馬をかける。	
26	柴田郡槻木町	濡れ薬師	薬師堂	旅僧から祈雨のための薬師如来の像を授け、宇を立てた。	雨乞 子供の耳の悪いこと	子供の耳の病気が治ったら、ザンキを奉納する	旅僧
27	宮城郡多賀城村	夜泣地蔵	地蔵		子供の夜泣		
28	宮城郡多賀城村（慈雲寺境内）	縛り地蔵	地蔵		子供の夜泣や病気	地蔵さんをつなぎ藁で縛って願をかけると不思議にもすぐ癒る。癒れば其の御禮としてつなぎ藁を解いて赤頭巾や赤の腹掛を献納する	
29	宮城郡根白石村	みづえぼ地蔵	地蔵		みづえぼ	一個の小石を借りて毎日なでる。治ったら、年齢丈の小石を加えて献する。	
30	加美郡色麻村	清水観音	観音像	田村曆呂が京都音羽山清水観音を勧請したという。	縁結び、子育て		
31	桃生郡中津山村	満徳地蔵尊	地蔵	三百年前、十五六才から志田家の寄食の身となった満徳という少年は、二十七才の時病気で亡くなった。家人は哀に思い遺言によって楓を墓標に植え付けた。後満徳の菩提を弔うべく地蔵尊が建てられた。	病氣平癒		
32	登米郡宝江市	代掻地蔵	地蔵	本吉郡横山村野尻という所から登米郡宝江村新井田に分家して住んでいた者の氏神である。			
33	本吉郡志津川町	逆竹の神社	地蔵	秀衡の臣某なるものが、馬の鞭の折れたのを逆さまに挿し、根付いた。土地の人々は祠を立ち祀った。	耳漏（ミミダレ）	祠に献上されてある竹の小筒の水をとって耳に挿し入れると治る	
34	牡鹿郡女川町江島	栄存法印	神社	流刑にされた修験者の栄存法印を祀った	靈験顕著		
35	宮城県多賀城村	鎮懐石	石	祭神の神功皇后は皇子の降誕を天神地祇に祈願する際、鎧の上帯に挟まれた石という。	安産		

36	玉造郡岩出山町	子安観音	観音堂				
37	元吉郡御岳村	ポーボ墓	石塔	昔六部が吹雪に悩みつつ一夜の宿りを求めた時、この家の家人大変親切にしたのであったが、吹雪のため持病が再発し死んでしまった。この家人の恩義に感じて病気を癒すのであろうという。			この塔をポーツポーツと言いながら三遍程掌で撫で回し、その手を持って身体の痛む所を擦る。
38	黒川郡落合村	石神	大石	蒜袋村に疫病が流行した際、村の里正が石の神から自分を祀ってくれとのお告げを受けた。大石を探し求め、祀ったら疫病が消えた。	耳だれ、小児の脱腸		小石の真中に穴をあけ糸で年の数だけ繫いで御礼に上げる。
39	宮城県南	ケツトリさん	神社		百日咳		五色の糸、五色の旗と鶏の絵馬を携えて参詣する。そして一旦奉納した五食の糸の一部をもらい、小児の肩にまきつけ、五色の旗の一本を帯や肩掛けにする
40	黒川郡吉田村	船形山神社	神社				生竹を争う。取った者がその竹を水田水口に立てると、稲作がよいという。
41	刈田郡平澤村	平澤安産達磨大師堂	達磨大師堂		安産		
42	亘理郡逢隈村	田中元珍の碑	古碑	田中元珍という医者に関係する古碑	百日咳		竹筒に酒を入れてこの碑に手向かう。
43	栗原郡岩ヶ崎町	さかさ仏	小祠堂	生前無実の罪を服した太宰六郎左工門は「死骸は必ず逆まに埋めよ」と遺言を残したが、家族が普通に埋めたため、祟が起こった。それで発掘してその場所にさがさに埋葬した。	訴訟勝ち 靈験顯著		
44	登米郡登米町	登米成田不動尊	不動尊	二十年前、胃潰瘍を患った畠山氏は不動尊のお告げを受け、全快になった。夢に出た不動尊の神像と神剣を手に入れ、畠山家に祀られた。			畠山氏
45	牡鹿郡渡波町	白狐「お菊」	小祠	護法白山妙理大権現を祀った小祠を白狐「お菊」を祀ったものとされた。	心願成就		
46	栗原郡栗駒村	貴船社	神社		祈願成就		

47	米谷郡米谷町	米谷守屋地藏	地藏	無実の罪に問われ憤死した守屋文右衛門の靈魂を静めるため、墓の上に延命地藏菩薩を安置した	勝負事、訴訟事、病氣平癒等		和尚
48	登米郡石森町	聖徳太子堂	太子堂		悪疫、流行病除け	神具の鍋を頭に被らせ經文をとなえる	
49	元吉郡志津川町	小森御前祠	祠	義経の臣鈴木三郎の妻と姥がこの地で自死した。里人がそれを埋め祀った。			
50	刈田郡越河村	法常院	石碑	寛文年間、弥次郎という信心深い者が死後森の峯に葬られた。法名は法常院殿と称され、石碑が造営された。	病氣平癒	石碑を削る。	
51	刈田郡福岡村	神明社	神社	治承年間藤原秀衡は福岡の地に神明社を、伊勢宇治の地より勧請いた。			
52	刈田郡福岡村	瀧の観音	観音堂	南朝の忠臣菊地家の後裔なる菊地某は九州の肥後から此の地に流れ、白石の地に土着して郷土とした。守り本尊であった観音をこの地に安置した。			
53	伊具郡大内村	鹿狼山神社	神社		養蚕の守護神 所願成就		
54	宮城縣多賀城村	お多賀さま	神社	多賀城の盛な時代に近江國犬上郡官幣大社多賀神社を勧請した。	延命長寿	年の数だけ竹の籬を連ねて祈願する。	
55	宮城郡多賀城村	仁和多利神社	神社		子供の百日咳	鶏の繪馬を拝借して自宅の門に逆に吊して置き、そして全快した時は倍にして返納する。	
56	宮城郡多賀城村	柏木神社	神社	この神さまは非常に柏の樹を愛され鹽釜さまに従つて鹽を煮てそれを柏の葉に包んで人民だちに分ち与えられたので柏木の神として祭られたそうである。	安産		
57	仙台市(宝泉寺境内)	おすて地藏	地藏	里人は取つてはいけない蓮の花を取り命を失ったおすてという娘を祀った。			
58	黒川郡吉岡町	甘酒地藏	地藏	藩祖公の公子河内守に殺された行者が祟り、土地の人々は塚の上に地藏様を建て、靈を慰めた。	耳の病氣	竹筒に甘酒をつめて供える。	
59	元吉郡志津河町	孫惣延命地藏尊	地藏	今から去る二百五十年の昔、西城家の長男清之進が忠僕の子孫惣のため、地藏尊を建て追善供養をした。			

第二章 新たな七福神——「奥州仙臺七福神」

前章では、「毘沙門天」の伝承に触れたが、伊達政宗が栗野大膳を攻撃する際、毘沙門天の保護によりなかなか落とすことができなかった。そこで政宗がその毘沙門天に願掛けをしたところ、大膳の城を落城させることが出来た。政宗はその毘沙門天に感謝してお堂を建てつもりで担いで帰城の途についたが、その毘沙門天が容易に人の願いを聞き届けるので、次に自分も栗野と同じハメになるかもしれないと思い、辺りの溝に投げ捨てた。その後、付近の子供たちがその毘沙門天を拾い上げ、地元の人により祀られた。これにより毘沙門天は子供の願いを何でも聞いてくれる「子育ての毘沙門さん」となったという（宮城県教育会 1981：第一輯 27-28）。

本章においては、この「毘沙門天」の事例を最初に取り上げ、それがいかに現在まで変遷してきて、「奥州仙臺七福神」の一神となったのか、また「奥州仙臺七福神」がいかに結成され、展開したのか、及び各時代にあつて七福神がどのように流行しているのかなどの諸問題を考察する。

1、毘沙門天から七福神へ

1-1、毘沙門堂の概略

現在の住職である我妻龍聲が提供した資料によると、仙台市若林区荒町にある毘沙門堂の由来は、前掲した伝承といささか異なる。現在満福寺の境内にあるこの毘沙門堂は、中世には名取郡北目城（現仙台市太白区郡山）の近くにあり、北目城主である栗野氏の崇敬を受けていた。伊達政宗は1600年（慶長5）白石城へ出陣の時勝利を祈願した。願いが叶ったら堂宇を建立すると満福寺の実快法印に約束した。その後よい場所を探し、1626年（寛永3）に仙台北下荒町に仮堂が建てられて尊像を移した。そして、1643年（寛永20）に伊達忠宗により立派なお堂が建てられた。その別当寺として、金山満福寺が實快法印により開山された。現在の毘沙門堂は1904年（明治37）に焼失し、1916年（大正5）

に再建されたものである。堂内には、毘沙門天像のほか、吉祥天と善膩師童子の画像があり、弁財天像と不動尊像が厨子に納められ祀られている。

また、本堂の中の毘沙門天像は平泉の藤原秀衡が運慶に作らせた護持仏であったと言い伝えられ、その後、磐井郡大原、宮城郡松森を経て、名取郡北目に移り、1626年（寛永3）に荒町に祀られた。1904年（明治37）の火災で、全身火を受け、黒焦げの姿で現存している。毘沙門天が寅の年、寅の日、寅の刻にこの世に現れたという故事によって、寅年に本尊御開帳¹の大祭を行うという。



写真 2-1-1 鳥居と参道



写真 2-1-2 本堂



図 2-1-1 満福寺周辺の地図（「Yahoo!地図」をもとに作成）



写真 2-1-3 毘沙門天のお前立ち²

境内には唐門、子安観音堂、百八体毘沙門堂、宝篋印塔、奇縁二天石などの仏堂や石碑があり、いずれも江戸時代のもと思われる。その内の唐門は、江戸中期の優れた門として、仙台市の文化財指定されている。

毘沙門堂の主な行事は、元日午前零時に行う護摩祈祷、1月14日のどんど祭、立春前日に行う厄祓い祈祷と8月1日～2日に行うお祭りがある。ほかに、毎月始めての寅の日を縁日として、午後1時に護摩祈祷が行われる。



写真 2-1-4 唐門



写真 2-1-5 子安観音堂（左）と百八体毘沙門堂（右）



写真 2-1-6 宝篋印塔



写真 2-1-7 奇縁二天石³

1-2、毘沙門天信仰の変遷

次は毘沙門天をめぐる信仰がいかに変遷してきたのか、文献資料と住職への聞き取りに基づき考察していきたい。

(1) 軍神・守護神としての毘沙門天

中世には毘沙門天は軍神・守護神として、北目城主である栗野氏を始め、武将たちの崇敬を受けていたことが諸文献から見られる。『満福寺所蔵略縁起』（年代不詳）にはこのような記録が残されている。

毘沙門天王略縁起

昔、文永中奥州岩井郡平泉之城正五位上土御門鎮守府將軍兼陸奥守藤原朝臣秀衡尊崇守本尊にして西岩井郡平泉村に御鎮座まします。然るに文明中藤嗣の後裔栗野助五郎大膳亮忠重の子右京助遠江守國定、名取郡北目之城え移し奉り軍神に祝ひ奉る。其後

栗野大膳亮は北目より國分松森之内臺と申所え政宗の御掟に依つて所替と云ふ。蓋し養子栗野清蔵重清東山之内大原村え所替に付、文禄中鎮守府將軍兼陸奥守藤原朝臣政宗公、北目より荒町え毘沙門天王を後安置、其後政宗公の後遺言に依り、寛永二十年忠宗公御堂御建立なり。毘沙門天御尊像者御長八尺七寸六分にして運慶之作なり。昔、北目城に安置ある時之鱗口今之御堂前に掛けて有、銘曰

奥州名取郡北目金山満福寺大檀那藤原朝臣宗國于時天正辛巳十一月日、本願若生信濃守家定

仙臺城下町荒町

別當眞言宗 金山満福寺

毘沙門天はもともと西岩井郡平泉村に鎮座し、「守本尊」として藤原秀衡により崇められていた。栗野大膳がそれを北目の城へ移し、「軍神」として奉った。後に伊達政宗が荒町へ安置した。『囊塵埃捨録』（1811年）にも概ね同じような記述がある。

一、北目毘沙門、國分小泉村、今仙臺荒町、此尊像は往昔陸奥・出羽兩國の押領使佐藤陸奥守兼鎮守府將軍藤原秀衡志願にて沙門運慶に命じて多門天王の尊像を作らしむ。御長七尺五寸二分、秀衡の嗣子泰國國家を失亡す。其後、名取郡北目の城主栗野大膳亮助兼、岩井郡平泉の城より此毘沙門天を移し奉りて封内の守護神と崇め、助兼八代の孫北目多門兵衛助清死去の後遺命によつて南長谷主計、北長谷市丸靈像を傳り奉りて爰に至る。是は古黄門貞山公南征ありし時、助清に御誓約あるを以てなり。故に主計、市丸府下に来る。然れども太守公に謁すべき便あらずして暫時此處に假堂を設けて尊像を安置す。靈驗あらたかなる故、土俗堂舎を營み、渴仰深かりしとなん。御當家瑞夢に依つて御建立ありしとなり。故に世人北目毘沙門と唱え、毎年六月朔日祭祀あり。別當を金山満福寺といふ。眞言宗なり。

藤原秀衡が運慶に作らせた毘沙門天像は、北目城主栗野大膳により平泉から移され、「封

内の守護神」として代々崇めていた。後に伊達政宗により荒町に安置された。靈験あらたかなため、その土地の住民にも信仰されてきた。ほかに、簡略ではあるが、このように毘沙門天が転々と移されたことは仙台の地誌『仙臺鹿の子』(1695年)と『封内風土記』(1772年)にも記録されている。

一 多聞堂は荒町にあり寺あり金光山満福寺といふ名取郡北目館主栗野大膳大夫護持の像なり天正四年藤原宗國なるものおゝに安置す

(按) 一書に云く北目毘沙門といふ元來此の像は藤原秀衡か名工運慶に命して作らしむるものにて平泉にありしを栗野大膳太夫北目城に移したるなり藤原宗國何人なるか詳ならされとも栗野氏の遺臣にてもあらんか(『仙臺鹿の子』)

毘沙門堂、荒町市店の後に在り。傳え云う、本尊は運慶の作なりと。往古、藤原秀衡堂を磐井郡平泉に建て、其後同郡大原邑、宮城郡松森館、名取郡北目の諸處に移る。寛永四年(一六二七)貞山君今の地に移し、堂宇を造營せんと欲したるも、世事紛冗遂に果さず、君の卒後、義山君其志を繼ぎ、同二十年(一六四三)之を造營す。名蹟志に曰く、「寺あり、金光山満福寺と曰う。名取郡北目館主栗野大膳大夫護持の像なり。天正四年(一五七六)藤原宗國なる者之を安置すと。」希文接ずるに満福寺に傳うる所と名蹟志の記す所と合わず、姑らく之を記して参考に備う(『封内風土記』)

要するに、荒町に移されるまで、毘沙門天像は各地に転々と移され、不安定な状態であった。また、軍神・守護神として、藤原秀衡、栗野大膳や伊達政宗などの武将に崇められ、武将の「職業神」のような性格が目立っていたことがわかる。

(2) 子育ての神としての毘沙門天

荒町に移転されたことをきっかけに、毘沙門天は「子育ての神」としての性格がより顕著になった。毘沙門天がなぜ「子育ての神」になったのかについての一説は、『郷土の伝承』

に記載されていた通り、伊達政宗に捨てられた毘沙門天像が、子供により拾われたため、子供の願いを聞いてくれる「子育ての神」に変身したというのである。この物語が一般に知られているが、事実かどうか定かではない。

住職の我妻龍聲によると、子育てと結びつけられたのは、毘沙門天が仏の中で唯一の妻帯者だからである。毘沙門天には妻として吉祥天、子として善膩師童子がいるとされ、それに因んで子供と結び付けられたという説もある。いずれにしても、毘沙門天がなぜ「子育ての神」になったのかは定説とされるものがない。

毘沙門天は「子育ての神」にされたため、江戸時代から子供が関わるイベントが盛んに行われてきた。

①子供神楽：江戸時代から大正時代まで子供神楽が奉納されていた。田町、荒町と南鍛冶町の子供が練習を重ね、春秋の祭典の時などに舞ったという。

②子供相撲：江戸時代には仙台藩内の相撲興行場の一つとして、毘沙門堂で相撲興行が行われた。その関係で、大相撲第9代横綱である秀ノ山雷五郎の供養碑と立行司の六代目式守伊之助の墓もある。その際、子供相撲も行われていたという。

③その他：現在、毎年立春前日に年男年女が豆撒きをする。子供達には菓子、みかん、ボール、5円玉等が入った福袋が配られる。例年300人位の子供達が集まる。

このように、毘沙門天は荒町に移転された後、「子育ての神」としての性格が目立つようになった。「軍神・守護神」から「子育ての神」に変身した具体的な経緯が不明であるが、戦国時代とうい乱世が終わり、太平な世を迎える当時の社会背景を反映していると思われる。



写真 2-1-8 相撲力士秀の山の墓



写真 2-1-9 立行司式守伊之助の墓

(3) 七福神の一神としての毘沙門天（1986年から）

1986年（昭和61）、仙台地方の七福神として、「奥州仙臺七福神」は、仙台市内の七つの社寺が連携することにより発足した。毘沙門天はその中の一神として、七福神のご利益

の福德寿命という新たなご利益を付け加えられた。

「奥州仙臺七福神」のイベントとして、正月の「出開帳」と「奥州仙臺七福神巡り」が行われている。「出開帳」は毎年の正月に藤崎百貨店の特設会場で開催され、住職がこれに出席する。また、住職の我妻龍聲によると、「奥州仙臺七福神巡り」が企画されて以来、県内外から巡礼者が訪れ、特に正月の巡礼者が多いという。



写真 2-1-10 満福寺のスタンプ

以上、毘沙門天に対する信仰の変遷を概観してきたが、時代の変化を背景に、人々の需要に応じ、神のご利益内容や性格は何回も変化を遂げ、現在、「奥州仙臺七福神」の一神として定着した。次は、具体的に「奥州仙臺七福神」がいかに結成され、人気を集めたのかを見ていきたい。

2、流行りと巡り——「奥州仙臺七福神」の展開

2-1、「奥州仙臺七福神」の概略

七福神は一般に福をもたらすとされる恵比寿・大黒天・毘沙門天・弁才天・福祿寿・寿

老人・布袋をいう。七福神は室町時代末期のころから江戸時代初期に信仰されるようになったと考えられ（喜田 1980 : 143）、江戸時代の『合類節用集』（1680年）や『日本七福神伝』（1697年）などによれば、福祿寿の変わりに吉祥天、寿老人の代わりに猩猩が入ることがあり、七福神が現在のメンバーに定着するまで、様々な変遷を遂げてきた。また、七福神の物語や縁起物の広がりと共に、「七福神巡り」も「京都七福神」を発祥とし、その後、江戸を中心に広く受け入れられ、現在日本各地に行き渡っている。

「奥州仙臺七福神」は1986年（昭和61）下記の七つの社寺により結成された。結成当初から人気を集め、現在毎年1月4日から6日まで藤崎百貨店で行われる「出開帳」は2013年で28回目を迎え、頻繁に地方紙に取り上げられるほど正月の代表的なイベントとして定着している。それに伴い、「奥州仙臺七福神巡り」も一種のブームとなり、正月になれば各社寺は県内外のツアー客や巡礼者で賑わいを見せている。仙台市内に点在するこの七つの社寺は、自転車やバスはもちろん、たとえ徒歩でも一日でゆっくり回れるコースである。

表 2-2-1 「奥州仙臺七福神」

七福神	社寺	宗派	祭神・本尊	所在地
えびす	藤崎えびす神社	西宮神社	えびす	青葉区一番町 3-2-17
大黒天	喜伝山秀林寺	曹洞宗	釈迦如来	青葉区北山一丁目 3-1
毘沙門天	金光山満福寺	真言宗	阿弥陀如来	若林区荒町 206
弁才天	天総山林香院	曹洞宗	釈迦如来	若林区新寺五丁目 1-1
福祿壽	医王山鉤取寺	曹洞宗	薬師如来	太白区鉤取四丁目 1-21
壽老尊	喜福山玄光庵	曹洞宗	釈迦如来	青葉区通町一丁目 3-16
布袋尊	南谷山福聚院	曹洞宗	聖観音菩薩	太白区門前町 8-12

（筆者作表）

表 2-2-2 「奥州仙臺七福神」 社寺略年表

	藤崎えびす神社	秀林寺	満福寺	林香寺	鉤取寺	玄光庵	福聚院
835年（承和2）					開山		
1461年（寛永18）		開山					
1497年（明応6）							開山
1523年（大永3）						開山	
1601年（慶長6）				現在地に移転		現在地に移転	
1636年（寛永13）					改宗		
1643年（寛永20）			開山（毘沙門堂建立）				
1819年（文政2）	藤崎創業						
1904年（明治37）			毘沙門堂焼失				
1916年（大正5）			毘沙門堂再建				
1932年（昭和7）	神社勧請						
1945年（昭和20）					焼失		
1959年（昭和34）					再建		
1963年（昭和38）	現在地に移転						
1984年（昭和59）						寿老尊像新設	布袋尊像新設
1986年（昭和61）		大黒天像新設					

（筆者作表）

毘沙門天と満福寺の状況を前節で紹介したが、ここでほかの社寺と対照しながら全体的に七つの社寺の概略を説明しておきたい。

(1)えびす：藤崎えびす神社

藤崎えびす神社は、兵庫県西宮市に鎮座する西宮神社を総本社とする。藤崎百貨店は、1819年（文政2）呉服屋として創業した。屋号を得可主屋（えびす屋）と称したため、創業当時から暖簾には商業の神様であるえびすを染め抜き、商標にも使用し、えびすを氏神として崇拝してきた。1932年（昭和7）、鉄筋コンクリート造三階建の新館を大増築したことを機に屋上に「えびす神社」を勧請した。その後、幾度の増築により神社が移動し、1963年（昭和38）の現在地への移設を最後に今日に至る。現在藤崎えびす神社に専門の神職がおらず、七福神や神社関係の業務は、総務部長を始めとする藤崎の職員が担当している。

(2)大黒天：喜伝山秀林寺

秀林寺はもともと泉区にあった古刹で、仙台市北山輪王寺十三世、角外麟恕を第一世として1461年（寛永18）開山された。本尊は釈迦如来である。開山以来、食事を司る神として寺の台所に大黒天像が祀られていた。「奥州仙臺七福神霊場会」の結成と同時に、本堂に移され、後に新しく安置された三面六臂出世大黒天像の胎内に胎内仏として納められている。

(3)毘沙門天：金光山満福寺と毘沙門堂

毘沙門堂は1643年（寛永20）伊達忠宗により荒町に建立された。満福寺は阿弥陀如来を本尊とし、毘沙門堂の別当寺として實快法印が開山した。毘沙門堂の中の毘沙門天像は運慶の作とされ、中世には武神・守護神として北目城主である栗野氏の崇敬を受けていたと伝えられ、また、毘沙門天と荒町の子供の物語も広く知られ、子育ての神ともされている。この毘沙門堂は1904年（明治37）に焼失し、1916年（大正5）に再建された。中の毘沙門天像は寅年の大祭の日に開帳される。

(4)弁才天：天総山林香院と弁才天堂

林香院には弁才天堂が本堂脇に建てられている。本堂の本尊は釈迦如来で、1601年（慶長6）伊達氏の仙台開府と共に福島県富岡の龍臺寺五世即慶長馨によりに現在地に移された。その時、すでに「弁才天堂」があったと伝えられる。弁才天像は正月1日から3日と11月23日の例祭の時に開帳される。

(5)福祿壽：医王山鉤取寺

鉤取寺は835年（承和2）天台宗の西翁により開山されたと伝えられ、1636年（寛永13）仙台市北山輪王寺十三世、角外麟恕により曹洞宗に改宗され、本尊は薬師如来である。1945年（昭和20）仙台空襲で本堂が焼失し、1959年（昭和34）再建された。寺院内に秘仏とされている福祿壽像が昔からあり、三十年くらい前に、福祿壽像を新設した際、その胎内仏として中に納められた。

(6)壽老尊：喜福山玄光庵

玄光庵は1523年（大永3）仙台市新寺二丁目竜泉院の末寺として明屋梵察による開山といわれる。それ以前は、大日如来を本尊とする天台宗の寺院であったが、曹洞宗になってからは、釈迦如来を本尊とし、大日如来を壽老尊の胎内仏として安置した。1601年（慶長6）伊達政宗公の仙台城造営に当たり青葉山から現在地に移転され、独立寺院となった。1984年（昭和59）に新たな等身大の壽老尊像を安置した。

(7)布袋尊：南谷山福聚院

福聚院は1497年（明応6）通屋祖文の開山で、本尊は聖観音菩薩である。1984年（昭

和 59) に布袋尊像を奉安した。この布袋尊像は頭から足の先まで触って参詣することができる。

総じて言えば、この七つの社寺はいずれも地元根付き、安定した氏子と檀信徒を抱えている。社寺自体は数百年の長い歴史を持っているのに対して、まだ三十年も経っていない「奥州仙臺七福神」は歴史が浅い。しかも、「奥州仙臺七福神」の成立にあたり、鉤取寺、玄光庵、福聚院はそれまでに祀られていなかった神の像を新たに安置することで、七福神を揃えたのである。

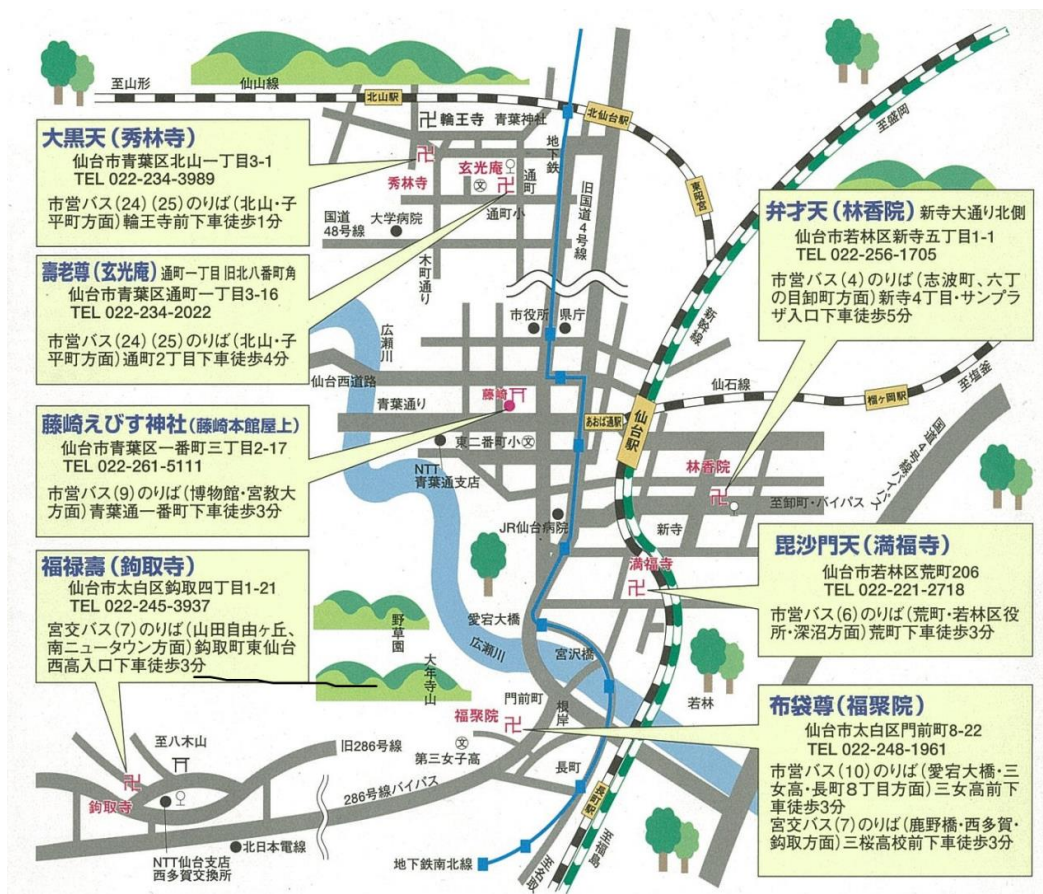


図 2-2-1 「奥州仙臺七福神」 (パンフレットより)



写真 2-2-1 「奥州仙臺七福神の看板」

各社寺に同じ看板が立てられている

2-2、「奥州仙臺七福神」の成立と展開

(1)「奥州仙臺七福神」の成立過程

「奥州仙臺七福神」は、布袋尊が奉安されている福聚院の住職伊達廣三が発案したもので、1986年（昭和61）に「奥州仙臺七福神霊場会」の看板が掲げられ、七つの社寺の連携により結成された。伊達住職は京都の七福神霊場巡りに行ってきて、仙台にも七福神霊場会を作ろうと考え、弁才天が奉安されている林香院の住職と相談した。2000年9月28日の『朝日新聞』によると、お寺や神社の関係者が「亡くなった人を懐かしむだけでなく、明るい気持ちでお寺や神社を訪れる機会をつくれないうだろうか」と話し合ったのがきっかけで、「京都や鎌倉にある権力者のための寺社とは違い、仙台はほとんどが庶民のためのもの。

大きな行事などではなく、気軽にいつでも立ち寄れるお寺巡りや神社巡りがあれば」と話がまとまったという。しかし、仙台には福祿寿、寿老人と布袋の三神がなく、そこで市内の寺院に声をかけ、新しく作ったことで七神が揃い、曹洞宗の寺院を中心にした「奥州仙臺七福神霊場会」が発足した。

「奥州仙臺七福神霊場会」は成立して以来、本部を福聚院に、事務局を秀林寺に置いている。毎年「出開帳」が一番大きな行事であり、その準備や連絡は主に事務局が担当する。また、巡礼者のためのスタンプ、おみくじや配り物なども事務局が用意し、各社寺に届ける。各社寺の集印やスタンプを集めるイベントも行われている。さらに、各寺院の住職は年に一回くらい外の地方の七福神霊場を巡り、例えば、2012年（平成24）は浜名湖の七福神を周り、2013年（平成25）五月に伊東の七福神と東京隅田川の七福神を巡る予定であるという。外の地方の七福神霊場はどのような活動をしているかを視察し、それを見て仙台の七福神にも取り入れようとの目的がある。

(2) 「出開帳」と「奥州仙臺七福神巡り」

「奥州仙臺七福神」の「出開帳」は、毎年1月4日から6日まで藤崎百貨店の特設会場で行われる。各社寺はそれぞれの軸やお前立ちを展示し、参詣者はその前で参詣したり、社寺から集印やスタンプを集めたりする。それに、六人の住職による無料のご祈祷も挙げられ、一日四回、最終日は三回行われる。初日の最初のご祈祷会は、藤崎の社長と六人の住職が揃い、住職たちによる藤崎と関係会社の商売繁盛の祈願から始まる。その後、参詣者の名前を受付け、ご祈祷の際全て読み上げる。最後に、七福神やお正月に因んだ話をしてご祈祷会を終了する。ご祈祷会は曹洞宗の流儀に従い行われる。

「奥州仙臺七福神巡り」について、2013年1月の第73巻の『街ナビ仙台』において、「めぐり角に福来たる 奥州仙臺七福神めぐり」という見出しで巡り方を詳細に掲載している。例えば、お参りする順番には決まりがないが、自宅に一番近いところから反時計回りを見て、二番目の社寺から順に回るとよいと説明され、お参りする時のマナー、信じる心やお礼参りなども強調されている。また、参詣の際、御神前に正座合掌し、御真言を七

回唱和して、心の中に祈願の念を凝らし静かに低頭してお参りするというふうにパンフレットに記されている。つまり、「奥州仙臺七福神」を巡る際の儀礼が定められて、それを載せる雑誌やパンフレットは、宣伝や広告だけではなく、案内書の役割も果たしていると思われる。

「七福神御真言」

えびす神—エビス オオカミマモリタマエ サキハエタマエ

大黒天—オン マカカラヤ ソワカ

毘沙門天—オン ベイシラマンダヤ ソワカ

弁財天—オン ソラソバテイエイ ソワカ

福祿壽—オン マカシュリ ソワカ

壽老尊—オン バサラユゼイ ソワカ

布袋尊—オン マイタレイヤ ソワカ



写真 2-2-2 集印



写真 2-2-3 スタンプラリー

2-3、参詣者と巡礼者

「奥州仙臺七福神」はそれぞれ安定している氏子や檀信徒を保持しているが、「御開帳」や「奥州仙臺七福神巡り」の参詣者と巡礼者は社寺の氏子や檀信徒とほとんど重ならない。参詣者と巡礼者は主に以下の三つに分けられる。①個人の参詣者と巡礼者。②地域団体。例えば、老人会、ボーイスカウト等のグループ。③バスツアーの参加者。例えば、読売旅行社、ビーエストラベル、山形タクシーなどのツアー参加者。

これらの参詣者と巡礼者を集め寄せ、「奥州仙臺七福神」を流行させる大きな推進力となっているのは観光業者である。その中に、仙台市に本社を置き、曹洞宗・浄土宗の本山参詣を専門に扱う旅行会社ビーエストラベルは、1993年（平成5）に一番早く巡りツアーを取り組んだ。地域紙の『河北新報』（1993年1月12日）はビーエストラベルのツアー企画を紹介している。その内容は「奥州仙臺七福神」の七カ所巡り、酒造会社の見学と秋保温泉のホテルに一泊を含んでいる。最初の頃は人気があり、一回五台から十台くらいのパ

ツアーを組んだこともあるが、十数年前から主体的にツアーを企画し、参加者を募集することがなくなり、依頼される時だけバスなどを提供するようになっている。その代わりに、近年読売旅行社の企画により、毎年の正月に30人から50人のバスツアーが10回程度実施され、宮城県内だけではなく、福島、山形、岩手からも訪れてくる。

事務局長の計良弘信住職によると、2013（平成25）年の「出開帳」の参詣者は三日間で2,000人にも上り、近年はますます増え、また、「奥州仙臺七福神巡り」のほうも、正月にバスツアーが多く訪れ、全体的に巡礼者が増えているという。

2-4、マスメディアの報道

「奥州仙臺七福神」は発足以来、マスメディアに取り上げられることが多く、現在まで地元紙の『河北新報』の掲載に限っても二十回以上ある。このように関連記事が頻出することから、「奥州仙臺七福神」は仙台地方の代表物の一つとして受容され、定着していくことが窺える。

これらの新聞記事を分析すれば、以下の四つの角度から「奥州仙臺七福神」の社寺を紹介していることが分かる。

(1)正月の行事。仙台では、毎年1月2日から大勢の客を寄せ集める「初売り」が始まる。「奥州仙臺七福神」の「出開帳」と巡りはこの「初売り」と並び、正月の代表的なイベントとして紹介され、特に、えびす神社は藤崎百貨店の屋上にあるため、買い物に便利であることが強調されている。

(2)観光の名所。「奥州仙臺七福神」の社寺は、いずれも歴史が古く、文化財に指定されているものも多々ある。これらの社寺の歴史に個別に触れる記事がしばしば見られ、つまり、観光客や歴史ファンを引き寄せる名所として注目を受けている。

(3)願掛けスポット。七福神は従来それぞれ特定のご利益を持ち、例えば、えびすは商売繁盛、除災招福の神、大黒天は生命の根源を司る福神、毘沙門天は武闘の神とされる。それとは別に、七福神結成前、秀林寺の大黒天は夫婦円満の神、満福寺の毘沙門天は子育ての神として信仰されてきた。マスメディアは特定のご利益を求める願掛けスポットとして、

これらの社寺を取り上げている。

(4)散策やハイキングのコース。「奥州仙臺七福神」の社寺は仙台市内に集中するため、散策やハイキングのコースに適する。個人やグループはレジャーや健康などを目的に七つの社寺を巡ることが紹介されている。

このように、新聞記事に頻繁に掲載されることにより、「奥州仙臺七福神」はより広く知られる宣伝効果が得られる。その一方、様々な角度の記事からは、人は七福神のご利益を求めるためだけでなく、それぞれの目的やニーズに応じて、「奥州仙臺七福神」に接したり、巡りと同時にレジャーや観光をしたりしていることが窺われる。

表 2-2-3 「奥州仙臺七福神」 関連新聞記事

日付	新聞紙名	見出し
1991年08月24日	河北新報	ビルの屋上／ひと味違う都市の表情
1992年09月24日	河北新報	道 未知 探検／青葉神社通
1993年01月01日	河北新報	1月のこよみ／宮城
1993年01月05日	河北新報	仙台の七福神がめでたく“集合”／藤崎で「出開帳」
1993年01月12日	河北新報	仙台の七福神を巡るツアー企画
1993年03月18日	河北新報	道 未知 探検／旧国道286号
1993年11月10日	河北新報	道 未知 探検／大年寺山周辺
1993年12月22日	河北新報	道 未知 探検／中央通
1993年12月23日	河北新報	東北の本棚
1994年08月20日	河北新報	仙台発 味のあるハイキングコース／仙台市内と近郊の主な散策路
1994年11月05日	河北新報	ヘルシーさーくる／グループわらじ／「4キロ50分」が目標
1995年06月28日	河北新報	道 未知 探検／鉤取
1998年08月19日	河北新報	楽しんでます／「ウォーキング」本田光さん 四季折々の躍動を体感
1998年09月22日	河北新報	街 いま／好評です 七福神ツアー／不況下、御利益授かりたい
1998年10月14日	河北新報	新聞週間特集／河北新報 読者相談室の一日 問い合わせ、ご意見、おしかり…連日お答え
2000年09月28日	朝日新聞	デパート屋上の「えびす様」参拝が人気 仙台（青鉛筆）
2000年09月28日	朝日新聞	いいことありそな、仙台七福神巡り 小さな旅、人気です /宮城
2001年04月21日	朝日新聞	みやぎチェキ！ /宮城
2003年08月13日	河北新報	アラマチマン／仙台・荒町商店街にニューヒーロー誕生 有志発案／イベントに登場、活性化に一役／「地域は私が守る」
2004年06月22日	河北新報	帰ってきたアラマチマン／26日、半年ぶり登場／仙台・荒町商店街 助成金切れで休止してました／今度は地元出資で
2005年01月08日	朝日新聞	七福神巡り えびす様は百貨店の上（散歩みち：12） /宮城
2006年08月20日	河北新報	N I E／中学生NOW／七郷中（仙台市） 学校名 仙台市立七郷中学校／所在地 仙台市若林区荒井遠藤9の3 校長 佐藤輝子／生徒427人
2006年08月22日	河北新報	仙台のまちづくりグループ、荒町版観光カリスマ養成／「検定」でお墨付き歴史遺産に光、魅力発信／9月誕生、住民が案内役
2006年10月22日	河北新報	隠れた名所アビール／仙台・荒町で史跡巡りツアー 「観光カリスマ」が案内役
2006年12月23日	朝日新聞	荒町～河原町 旧街道、買い物街の息吹 /宮城県
2007年09月29日	朝日新聞	仙台中心部の寺社巡り 街中にとけ込む社たち /宮城県
2007年11月24日	河北新報	仙台・荒町のお宝と歴史を再発見／12月8日街歩きツアー 「四大画家」の作品展示／観光への活用探るシンポジウムも
2008年09月18日	河北新報	仙台そぞろ歩き 願掛けスポット編（2） 秀林寺の大黒天（仙台市青葉区北山）／男女の縁も取り持つ
2009年01月05日	河北新報	七福神が勢ぞろい／出開帳、参拝客にぎわう／仙台
2009年01月05日	朝日新聞	仙台七福神参りは百貨店で お正月、市内の寺社から集合 /宮城県
2010年07月13日	河北新報	仙台・満福寺の毘沙門天王像／焦げたまま修理、8月開帳／明治後期に火災
2011年03月03日	河北新報	ティータイム／51回目の春に＜佐藤かつい＞
2013年01月03日	河北新報	ティータイム／初夢＜角張あさ子＞
2013年01月05日	河北新報	縁起物手に福を招こう／仙台・藤崎でフェア

(1991年－2013年の関連記事、筆者作表)

以上、「奥州仙臺七福神」がいかにかに成立し、展開していったかを概観してきた。総じて言えば、この「奥州仙臺七福神」は自然発生による神仏ではなく、社寺により意図的に作られた神である。その受容と流行には、社寺側の連携、観光会社の介入とマスメディアの喧伝など様々な要素が働いている。

3、七福神の流行

宮田は「七福神巡り」の流行は大きく江戸時代後期、明治後期から昭和初期、第二次世界大戦後、特に昭和五十年以降の三つに分けられるとされる（宮田 1998 : 53）。「奥州仙臺七福神」はちょうど第三の流行期に発足したものである。ここでは、より広い視点で現在までの七福神巡りブームの様相を総合的に見ていくことにする。

3-1、七福神巡りの成立

七福神は室町時代末期のころから江戸時代初期に信仰されるようになったと考えられ（喜田 1980 : 143）、江戸時代の『合類節用集』（1680年）や『日本七福神伝』（1697年）などによれば、福祿寿の変わりに吉祥天、寿老人の代わりに猩猩が入ることがあり、七福神が現在のメンバーに定着するまで、様々な変遷を遂げてきた。

記録に残っている中で「七福神巡り」の成立が一番早いのは、文政年間（1818～1830）に東山界隈で定められた「東山七福神」であり、後の七福神巡りの一つの模範となっている（宮田 1998 : 165）。1823年（文政6）に書かれた『享和雑記』には、

近頃正月初出に七福神参りといふ事始りて遊人多く参詣する事となれり、その七福神は不忍の辨才天、谷中感応寺の毘沙門、同長安寺の寿老人、日暮の里青雲寺の恵比須大黒布袋、田畑西行庵の福祿神也、近頃年々にて福神詣する人多くなれり

と記され、江戸においても「七福神巡り」が盛んになった様子であった。江戸の七福神の中、特に歴史が長いのは隅田川七福神等が挙げられ、現在の七福神の原型となっている。

江戸時代の七福神が組まれる際、伊藤は「ここに七福神寺社の地域的セット化が生じます。その場合、福神のどれかが祀られていることが必須となりますが、巡拝の便宜で新しく出現した七福神の寺社が中世以来の著名な福神社寺にとって代わることになってしまいました。鞍馬の毘沙門天などは、巡拝に組まれて当然なのに、地理的な関係から除外され、毘沙門天を安置した別の寺院が選ばれてきたのです」（伊藤 1998 : 109）と述べ、江戸時

代の七福神の地域性が指摘された。

3-2、明治時代の七福神巡り

明治時代に七福神ブームが再び起こり、向島の七福神、現在の隅田川七福神はその担い手の一つとして、明治30年代からは頻りに新聞紙に取り上げられた。ここで、『朝日新聞』の記事を通して、向島の七福神巡りの様子と当時の世相を窺おう。まず、1903年（明治36）12月29日の『朝日新聞』にはこのような記事が見られた。

向島の七福神 吉例により一月元旦より七日との間向島の七福神詣でをする人々は近年漸く多くなりしも昔の如く墨堤を徒歩するのみの人もなく千住通ひの曳船又は東武鐵道の便も開けたる今日とて其の便を利用する人も少なからぬにぞ七福神所在地の管理者は今回協同して其の順拝路程圖に汽船の發着所及び汽車の停車場と渡船場をも記入し改正出版をなしたるが此の圖は新年參詣者の望みにより各所の尊像の寫しと共に差出すものなるが七福神の寫しの尊像は何れも八分位の焼きものにて之を花屋敷にて製造する長サ四五寸位の角田焼の寶船に安置する妙とす又各所とも尊像は二百體と定まり居るより近年は二日又は三日の後は品切れになると云へば所望者は新年早々參詣せでは之を得られぬ事なるべし扱其七福神の所在地は恵比壽大黒（三圍）布袋（弘福寺）辨財天（長命寺）福祿壽（花屋敷）壽老神（白鬚）毘沙門天（多聞寺）にして三圍より參拝を始めたるものは最終の多聞寺より其の歸路は汽船なれば鐘ヶ淵發着所より汽車なれば鐘ヶ淵停車場よりおのがじ、家路に向かふべく又鐘ヶ淵より南千住の潮入村への渡船もあること故道順に従つて此の路を取るも可ならんか

この記事から近年向島の七福神詣でをする人が増えてきたことが分かった。七福神の各社寺が毎年用意した二百体の尊像の写しは、二日または三日で品切れることもその人気ぶりの証であった。また、交通機関の発達により、汽車または汽船を利用する参詣者が増え、各社寺は巡拝図に汽車の停車場と汽船の渡船場を示し、尊像の写しと共に参詣者に差出す。

そのことから、交通機関の発達に向島の七福神の流行と密接に関係し、その流行を直接促進させたと推測できる。さらに、七福神の所在地や道順なども新聞記事により紹介されたことにより、宣伝効果も得られると考えられる。

翌年の1904年（明治37）12月28日の『朝日新聞』は、引き続き向島の七福神の様子を報道した。

向島の七福神廻り 江戸時代の一名物に数へられた向島の七福神廻りも時世の變遷によつて一時中絶してゐたが去二十八年頃から昔に還つて段々と評判も高くなり年々參詣者が殖えて來たので來年の元日から向ふ一週間は各七福神所在主より參詣者に三百の神體を分配することに定めたさうである其の道順は吾妻橋より三圍神社の大國天、恵比壽神へ六町、三圍より弘福寺の布袋へ三町、弘福寺より長命寺の辨才天へ一町、長命寺より花やしきの福祿寺へ五町、花屋敷より白鬚の壽老神へ一町、白鬚より多聞寺の毘沙門天へ七町で以前と遠つて今では沿道に東武線の汽車と隅田川通ひの汽船があるから足弱連を連れて出ても平氣なものである

昨年度二百と決めた分配用の神體の数は今年三百になったことは、向島の七福神の人気ぶりが増してきたことは読み取れる。さらに、その翌年の1905年（明治38）12月29日の『朝日新聞』によれば、この数字が千体にも上り、七福神巡りはますます盛んになっていることが窺える。

向島の七福神巡り 毎年一月元日の吉例として七福神巡りの事は年毎に盛んになり神體分與の希望者益多き事なるが參詣者の内には松の内に亘りて詣づる者あれども神體は三ヶ日中に出切となり遅れ駆せの人は失望して立歸るより明年は其憂ひなからしめんとて各社祠にては一千體づゝを造り置く事となしたる由

このように、江戸時代に流行っていた向島の七福神は、一度下火になったが、明治時代

に再び人気を集めるようになった。その二度目の流行には、交通機関の発達と新聞紙の宣伝が力添えになったと言えよう。

3-3、戦後の七福神ブーム

七福神に関する恒例行事は戦争によりほとんど中断されたが、戦後各地で七福神の復興と新設が相次いでいる。「昭和五十年代以降には、二十以上もの七福神めぐりが新設され」（宮田 1998 : 53）、例えば、京都の「都七福神」と「京の七福神」が報告される（伊藤 1998 : 111）、また「奥州仙臺七福神」もこの時期に発足したものである。七福神はこの時期から新たな展開を迎えた。ここで、東京都の事例がメインであるが、この時期の七福神ブームの様相と特徴を、新聞記事を資料として分析していきたい。

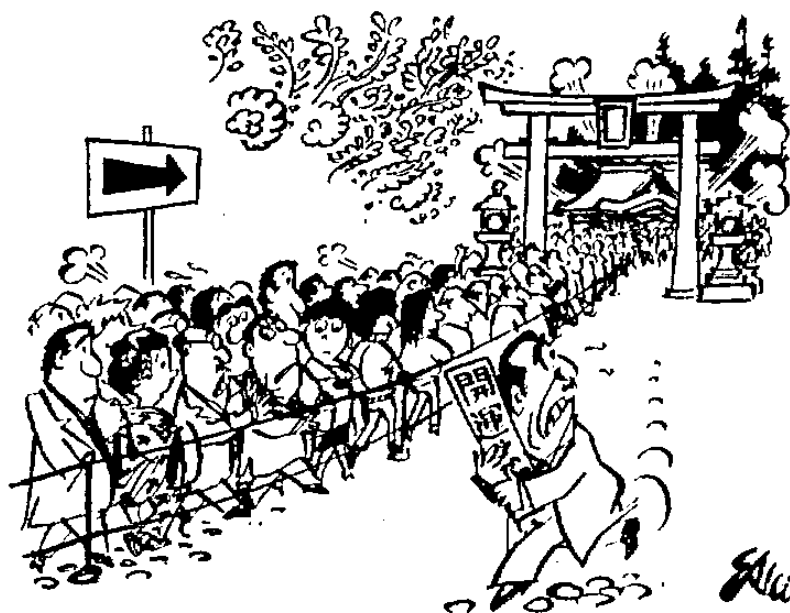
(1) 空前の人気ぶり。1975年（昭和50）12月21日の『朝日新聞』は、「人気ふっとう 七福神めぐり」という見出しで、「ことしの正月、深川七福神めぐりに繰り出した人出はざっと七千人だった。ところが、来春の七福神めぐりは、予約だけですでに、ほぼ同数に達しており、史上空前の記録になりそう」と深川七福神の混雑を報道した。また、1981年（昭和56）1月31日の『朝日新聞』は「今ごろなぜか七福神めぐり」とのタイトルで、「墨堤沿いの三キロのコースを歩く参拝客は年ごとにふくらむ。弘福寺の布袋さま、白鬚神社の寿老神という具合に小さな陶製の御分体を集めるが、ことしは各寺社で用意した二万対が十日ほどで全部さばけてしまった」と書かれ、隅田川七福神も参拝客が殺到する様子であった。このように、この時期の七福神は空前の人気ぶりを示した。

(2) 複数の七福神巡りコース。東京都内だけでも、数多くの七福神巡りのコースが決められた。重なっているものはあるが、1977年（昭和52）12月19日の『朝日新聞』は11コース、1982年（昭和57）12月29日の『朝日新聞』は10コース、1989年（平成元）12月30日の『朝日新聞』は15コースを初詣の行き先として紹介した。

(3) 観光バスが殺到。1977年（昭和52）1月6日の『朝日新聞』には、「東京の名所旧跡を案内してくれるバスは、正月三が日フル運転だった。いつものコースのほかに都内の主要神社を巡る『初詣（もうで）コース』、深川、隅田川、横浜の各『七福神巡りコース』が加わり百三十八台のバス、百七十人のガイドは休みなしで働き続けた」と七福神の流行

により、観光バスがフル運転していることを報道した。このような状況は、数年衰えず、はとバスが増線するほど七福神の人気が続いている。

(4) 不景気の影響。七福神の流行はしばしば経済的な不況という社会背景に結び付けられる。1975年(昭和50)12月21日の『朝日新聞』は「七福神巡り」をめぐり、「不況続き うさばらし?」との見出しを出した。また、1982年(昭和57)12月29日の『朝日新聞』には下記の挿絵が見られて、七福神巡りも含めて、空前の初詣の人出と不景気との関連性を表したものである。



不景気

「今年は願いごとに時間を
かけてるなー!」え 岩本 悦成

図 2-3-1 「不景気」

昭和 57 (1982) 年 12 月 29 日の『朝日新聞』より

このように、各時代の七福神ブームを概観してきたが、マクロな視点で見れば、時代の変遷により、七福神の流行には常に新しい様相を示している。江戸時代の七福神は、地理的な関係で組み込まれる特徴が顕著である。明治時代に入り、交通機関の発達と新聞紙の紹介により、汽車や汽船を利用する参詣者が増え、七福神が再び流行り出した。戦後、特

に昭和 50 年代になれば、複数の七福神が復興または新設され、空前の参詣者が訪れたと同時に、新聞紙に頻りに取り上げられ、観光バスも殺到した。その背後に、経済的な不況という社会背景があるとされる。

ミクロな視点で「奥州仙臺七福神」を例として見れば、戦後新設された七福神の一つとして、それは社寺により作られた新たな神である。「奥州仙臺七福神」になる前の社寺は、時代の変化に伴い、神の神格やご利益内容は、すでに何回も変化している。「奥州仙臺七福神」も当時の七福神ブームに乗って発足したものである。同時代の七福神と同じように、その流行には社寺側の連携、観光会社の介入とマスメディアの喧伝などの要素が見られたが、具体的に見ればいくつかの特徴が際立っている。以下に箇条書きにして示したい。第一、アクセスはより便利になっている。社寺側はすべての神仏を一箇所に集め、「出開帳」を開催することや、バスツアーは県外から各社寺まで送迎するなど、必ずしも各社寺を足で回る必要がなくなる。第二、社寺側が靈験譚を付与しご利益をアピールすることは見られなく、その逆に、『『叶わなかった、ご利益がない』ではなく、願いを叶えるための力添えをお願いし、自らもそこに向かって努力することが大切だ』というふうに、神仏の力ではなく、参詣者の自力による祈願成就が強調される。第三、受け側として参詣者と巡礼者は、神仏に願掛けし、現世利益を求める宗教行動が見られるものの、講や崇敬会などの組織に至らず、靈験譚や体験談の流布も見られない。それにもかかわらず参詣者と巡礼者が増加するというのは、宗教的な需要以外に、レジャー、健康、散策などを求めているからだと考えられる。このように、「奥州仙臺七福神」は新たな七福神として挙げられるが、その特徴はほかの七福神にも見られる一般的なものかどうかを課題として今後考察し続けたい。

¹ 開帳：本尊など仏像類を安置してある厨子を開けたり、仏像の前面をおおってある幕を開いて外から直に拝めるようにすること。秘仏を一定の周期または縁日などに一般開帳したり、参拝者のもとめに応じて臨時開帳することもある。その寺内で行うものを「居開帳」、他所に出張して行うものを「出開帳」という。出開帳には本尊でなく「お前立ち」（本尊に代わる尊像）が用いられることもある。中村元【ほか】編『岩波仏教辞典』（岩波書店、2002）、131 頁。

² お前立ち：注 1 を参照。

³ 奇縁二天石：正面に「奇縁二天石」、正面下に「三方庵」、右側に「をしゆる方」、左側に「たつぬる方」と刻まれ、張り紙をはるなど情報交換のための石であった。

第三章 新名所の形成——貧乏神神社

前章で取り上げた「奥州仙臺七福神」は、ツーリズムの対象、更に限定すれば宗教ツーリズムの対象とも言うことができる。本章においては、同じく宗教ツーリズムの対象とされる長野県飯田市にある貧乏神を事例として、それがいかに建立され、人気を集めたのかを分析した上で、ツーリズムとの関連性を論じていきたい。

1、貧乏神神社とは

1-1、貧乏神神社の概況

まず、貧乏神神社の概況を説明しておきたい。貧乏神神社は長野県飯田市にあり、中央自動車道飯田インターまで約3キロの距離に鎮座している。1998年（平成10）に櫻井鉄扇により建立された質素な神社である。「神社」とは称するものの、神社本庁とは関わりがなく、宗教法人登記もされていない。神社の入り口には金色の鳥居と白い看板が掲げられており、中に進めば、高さ2.1メートル、幅1.7メートルの巨大な「世直し不動尊」の頭部像が先に目に着き、その奥に貧乏神神社の本堂が建てられている。堂内には一木造りで、2メートルほどの貧乏神の木像（成田青畔作）が奉安され、周囲の壁面には参拝者の名前が記入されているのし袋と絵馬がびっしりと並んでいる。本堂の左側に窓口が設けられ、そこで貧乏神神社の御札やお守りなどが配布されている。



図 3-1-1 貧乏神社周辺地図（「Google 地図」をもとに作成）

建立者の櫻井鉄扇は祭主と自称し、現在妻の治子と夫婦二人で神社を管理している。櫻井鉄扇は 1931 年（昭和 6）に長野県飯田市に生まれ、地方銀行の銀行員を務めていた。1970（昭和 45）年脱サラブームに乗退って退職し、不動産や地上げに手を出して失敗するなどして自己破産した。その後数多の辛酸を嘗め、1998 年（平成 10）「自分には貧乏神がとりついている」と一念発起し、貧乏神神社を創建した。これが当たって櫻井自身、これまでの多重債務から脱出できたという。この経歴が神社の由緒となった。治子によると、貧乏神神社が建立された翌年の 1999 年（平成 11）から、その独特な参拝方法により続々と新聞やテレビに取り上げられて、広く名を知られるようになり、個人の参拝者や観光バスが続々と訪れている。参拝者の数は 2000 年（平成 12）、2001 年（平成 13）から増え始め、2006（平成 18 年）以降、徐々に安定するようになってきているという。

本堂前の「世直し不動尊」は飯田市出身の彫刻家森藤繁治の作品であり、2007 年 6 月 6 日に開眼式が行われた。櫻井は格差が広がり、凶悪犯罪が多発するなど、乱れた日本を正す願いを込め、この「世直し不動尊」を建立したという。隣の「やすらぎ地藏尊」はもと

もと近くにあった地蔵尊であったが、貧乏神神社が創建された後、境内に移されるようになり、「ガンの痛みをやすらげる」との白い看板が立てられている。また、本堂隣りの銭神大明神の祠には、明治時代の画家鈴木芙蓉の作品とされる雨宝神の絵画が祀られおり、その前に「はずれ券 供養箱」が置かれ、宝くじなどのはずれ券がどっさり入っている。このように、貧乏神神社の境内には、貧乏神だけではなく、ほかにもいくつかの神仏が合祀されている。



写真 3-1-1 鳥居と看板



写真 3-1-2 本堂



写真 3-1-3 「世直し不動尊」(左)

「やすらぎ地蔵尊」(右)



写真 3-1-4 「銭神大明神」

1-2、参拝方法

貧乏神神社は貧乏神を崇め奉る場所というより、追い払う場所である。参拝の際、貧乏神の木像の前に「心」の字が書かれた神木を「貧棒」と呼ばれる棒で三回叩き、三回蹴飛ばし、その後右側に「不景気」、「病気」などが書かれた的的に豆を投げる。このような参拝

の仕方は、「自分自身の弱い心を叩く」という櫻井の考え方から生まれたのである。つまり、貧乏とはお金ではなく、「心」の問題である。貧乏神は人の心に住み着いている。弱い心を叩き、貧乏神を追放することにより、ストレス発散になり良いことがあると念じれば、必ず良いことに恵まれる。それに、神社とは「お願いする所」ではなく、「心を清める場所」、「生かされている事を感謝する場所」である。お願いしても、神様は叶えてくれようがない。神前で「頑張ります」と誓い、自分で頑張るしかない、と櫻井が参拝の仕方とこのような参拝の心得を説明し、神の力ではなく参拝者の自力に頼ることを強調している。参拝の後に、櫻井夫婦は参拝者一人一人の手または患部に手をかざし、「気」を入れる(写真)。

この一連の参拝により、参拝者はストレスが解消し、気分がすっきりすることができ、体の痛みが消えたり、ギャンブルで勝ったり、仕事が増えたりなどのご利益を得ることができた参拝者は大勢いるという。



写真 3-1-5 神像と神木



写真 3-1-6 参拝者



写真 3-1-7 叩きの様子



写真 3-1-8 「的」に豆を投げる



写真 3-1-9 「気」を入れる（櫻井鉄扇）



写真 3-1-10 「気」を入れる（櫻井治子）

1-3、宗教的思想——「気」と「天の大神」

ここで、「気」について説明しておきたい。櫻井は次のように述べている。『『気』は誰でも持っているし、誰でも出す事はできる。程度の問題で努力すれば向上はする。でも、そう簡単ではない。修行、修練、血の滲む努力の末に、『気の奥義』を体得した人は多い。一方ある日、突然『気』の能力に目覚めた人も居る』（櫻井 2007：42）と述べ、櫻井夫婦の場合は、訓練したものではなく、自然と身に付いたものだと語った。また、気の能力を取得する経緯については、櫻井は貧乏神神社を建てる前に、友人を通して飯田市に在住した笹原政人という気功師と知り合い、気功を二三次体験している内に会得したという。櫻井家の宗教は臨済宗であるが、それ以外に特定の宗教と関わりがない。妻の治子によれる、

笹原は宗教者ではないものの、貧乏神神社を立てた後に、良い波動¹ができるように術を施し、また「世直し不動尊」の前で供養を執り行ったのである。ほかに気功や空手にも精通し、慕っている人が多くいる「仙人みたいな方」だという。そして治子のほうは、偶然「ばね指」を起こしてしまい、それを笹原に治してもらったことをきっかけに厚い信頼を寄せ、気功を教わることになったという。そしてある日、治子は神社のお守りなどを整理している時、突然手が熱く感じ、気の能力に目覚めたと語った。櫻井夫婦はこの気の能力を使い、参拝者一人一人に気を入れている。また、参拝者の要求に応じて、病気の治療やアクセサリ類の邪気除去なども行なっている。

櫻井はこの気の能力を「天地神心流活気道（気功術）」と名付け、「天の大神さまのエネルギーと地の神々のパワーが、受ける人の心と一体となった時、私の『気』が生き伝えられる」（櫻井 2007：48）と記述するように、気を受ける人の信じる心と感謝の心を強調している。ここでいう「天地神」とは、森羅万象を司る目に見えない「大神」のことを指し、櫻井はこの「天地神」から気をもらい、それを参拝者に入れる。また、日々の神前の勤めと参拝者への奉仕により気の能力を向上させていると説明した。つまり、表に祀られている貧乏神と対照的に、その背後には「天の大神」といった別の祭神の存在があると思われる、そのことは、黄色い鳥居に取替えられる以前の看板にあった、「天の大神を始めとする 神仏共包の広場」という文言によって裏付けることができる。

貧乏神神社とは、貧乏神を追い払う場所であると言うことができ、その機能的役割は、普段よく神社の境内に見ることが出来る自動車祓所と極めて類似していると考えられる。



写真 3-1-11 「天地神心流活気道」の看板



写真 3-1-12 取替えられた前の看板²

2、分社による展開

現在、「貧乏神神社」の名を冠した神社は日本全国に複数存在しているが、その内、分社として承認されたのは静岡県、東京都、長野県、大阪府、沖縄県にある五つの「貧乏神神社」であり、それぞれの所在地、建立年月および参拝方法を表 3-2-1 にまとめた。

表 3-2-1 「貧乏神神社」の分社

所在地	建立年月	参拝方法
静岡県周智郡森町三倉地区	2002、3	「弱」「病」「脂」などと書かれたクッションを、竹刀などで三回叩く。
東京都江東区亀戸 6-31-1	2003、9	「貧棒」でご神木を三回叩き、三回蹴り、「貧乏袋」という布の袋を投げる。
長野県茅野市宮川 4529	2003、11	「貧棒」でご神木を三回叩き、三回蹴り、ご神体に豆を投げつける。
大阪府大阪市淀川区加島 3-14-3	2004、3	ご神体の前に置かれた古い石に片手をかざし、貧乏を預ける。
沖縄県石垣島	不詳	「貧棒」でご神木を三回叩き、三回蹴り、カラフルボールをご神木に投げつける。

(筆者作表)

最初にできた静岡県周智郡森町三倉地区にある分社は、唯一の移動式の神社である。祭主の田邊哲は様々な活動に携わったが、特に自己啓発の講演や村おこしに力を注いできた。父の貧乏神神社への参拝体験をきっかけに、田邊は貧乏神神社に強い興味を覚えた。分社を設立し、祭主を務めたいと本社にお願いした。分社設立後、田邊は祭主の服装をまとい、講演会場で貧乏神のご神体を立て、貧乏神の追い払いを出席者に体験してもらいながら講演を行なうようになり、現在も活動を続けている。

その翌年に、長野県茅野市にあるみその製造販売をする丸井伊藤商店により、自社の味噌蔵内に分社が勧請された。この分社は、丸井伊藤商店の向いに鎮座する「鈿女(おかめ)神社」とセットになり、貧乏神神社で貧乏神を追い払った後鈿女神社で福を授かる参り方が特徴的である。県紙の『信濃毎日新聞』はこの分社を数回取り上げ、丸井伊藤商店を始めとする地元商業が貧乏神神社の勧請を通して、集客と街興しの効果に期待していることが見られ、また、この貧乏神神社が地元の名所として徐々に定着していることも窺える。

表 3-2-2 『信濃毎日新聞』 関連記事

日付	見出し
2003年12月1日	茅野に貧乏神神社 飯田から分社...街おこし期待 変わった参拝
2004年1月30日	茅野の貧乏神神社 保育園児が豆まき 力いっぱい...災い追い払う
2004年4月9日	茅野 TMO 協議会 市民調査、まとめ 事業認知度—まだ PR 不足
2005年5月31日	茅野の小中学生が街なか探索 地図や写真から魅力探し 20人参加
2005年11月14日	茅野の宮川商業会、創立百周年で式典 会員ら 50人—出席 振興の歴史...思い
2011年5月28日	茅野の散策コース紹介 街づくり組織がスタンプラリー開始 商店街訪れる観光客増狙う

(筆者作表)

東京にある分社は、東京都江東区の亀戸サンストリートというショッピングモール内にあり、その施設管理をする株式会社タイムクリエイトの前社長により建てられた。しかし、前社長がなくなった後、お守りの販売などもやめられ、また神社自体も放置される状態になっている。その後大阪市と沖縄県石垣島に設立された分社も同様に、現在本社との繋がりがなくなっている。この三社は一時期繁栄をしていたようだが、現在いずれも廃れてしまい、特に石垣島の分社は廃業し、消滅してしまっているのである。

ほかに、分社として認められないが、貧乏神神社と名乗る神社、または貧乏神を追い払う神社がいくつかある。例えば、2006年11月、行政書士の石橋吉治が飯田市の貧乏神神社の参拝方を取り入れ、徳島県神山町に貧乏神を追い払う幸福神社を建て、人気を集めた。そのことが2008年11月15日の『朝日新聞』に報道された。このように、貧乏神神社のコンセプトや参拝方が広く受け入れられ、分社が作られたのだけではなく、それを模倣する神社まで現れたのである。ただ、これらの神社では、いずれも本社と違って、祭主は気功の修行をしておらず、参拝者に対して「気」の注入も行われていない。

3、マスメディア報道の明暗

廃れた分社と対照的に、本社は人気ที่衰えることなく、マスメディアからも絶えず注目

を受けている。本社の貧乏神神社が成立した翌年、地元のテレビ局が貧乏神を叩き飛ばす初詣の風景を報道したのが最初であり、その後頻りに他のテレビや新聞紙、週刊誌などに取り上げられ、櫻井によると、2012年（平成24）の時点で、すでにマスメディアの報道回数が50、60回にも上ったという。ここでは、貧乏神神社がいかに報道されているかを、大宅壮一文庫に収録されている雑誌記事を例として見ていきたい。その関連記事は表3-3-1にまとめた。

表 3-3-1 雑誌関連記事

番号	日付	雑誌目	タイトル
【1】	1999年03月07日	週刊読売	NEWS WAVE「貧乏神神社」スゴイ霊験 ご神体叩くとパチどころか
【2】	2002年11月14日	女性セブン	御利益続々...「貧乏神神社」は今日も大盛況！ 長野発・マル得名所発見！名は“貧乏”でも実はホクホク...！？
【3】	2003年02月04日	女性自身	BBS トーキング娘。 今週の指令 ブランド品の買いすぎで金欠の記者アオキ、貧乏神を叩き出せ！
【4】	2004年01月15日	週刊実話	新春列島 ユニークな「御利益」の神社・仏閣大特集
【5】	2006年05月02日	週刊女性	日本、「珍」気になるスポット14 Hな秘宝館・変なテーマパーク・オモシロ神社
【6】	2006年06月	ムー	日本ご利益紀行 亀戸分社の当選祈願で1等1億円が当たった！ 貧乏神神社 不幸の元凶・貧乏神を追いだせば、福が無い込む！
【7】	2007年02月	歴史読本	日本の大神社・総本社名鑑 特別企画 全国ユニーク神社 由緒・ご利益ガイド
【8】	2009年12月01日	SPA!	板谷遠足 23回 長野県飯田市「貧乏神神社」に行く 「今から良いことがある、ある」と言いながら豆を投げさせられ
【9】	2009年12月27日	週刊大衆臨増	松金ようこのギャンブル女王への道 14回 ギャンブル神社めぐり ギャンブルには神頼みも必要

【10】	2010年02月	BIG tomorrow	ニッポン 格差の風景 13回 貧乏神は心の中に棲んでいる
【11】	2010年05月	怖い噂	日本珍奇絵馬見聞録 14回 靖國神社（東京都千代田区） 貧乏神社（長野県飯田市） 『ハルちゃんとやりなおしたい！』...自称日本一の男ハッチよ。何故靖國神社にこの願いを？
【12】	2010年05月02日	週刊実話臨増	摩訶不思議な貧乏神神社 お金持ちになれる！？ 一瞬で人生が好転する「奇跡」
【13】	2011年01月10日	週刊実話臨増	懐事情も心も豊かにしてくれる... 幸せの「貧乏神神社」 御神木を叩いて蹴飛ばす！
【14】	2011年05月26日	アサヒ芸能	ニッポン「超B級スポット」巡り 3回 貧乏神を祀る神社は儲かっていた
【15】	2012年01月08日	週刊実話臨増	「総本山」から公認された名所にもかかわらず... 消えた貧乏神神社 繁昌していたのに、なぜ廃業してしまったのか！？
【16】	2012年7月12日	女性セブン	宝くじ 「はずれくじ供養」で当せん力UP！ もうすぐサマージャンボ 貧乏神との縁を絶つ、その名も「貧乏神神社」

(大宅壮一文庫より筆者作成)

これらの記事は、貧乏神神社を珍奇性のあるものとして捉える傾向が見られる。例えば、記事【5】と【7】においては、貧乏神神社が「『珍』気になるスポット」や「ユニーク神社」として紹介され、一般的な観光スポットや神社と異なることが強調されている。さらに具体的に言えば、貧乏神神社の珍奇性は①櫻井の人生経歴、②貧乏神を祭る発想、③独特な参拝方の三点により表されている。櫻井が元銀行員として順風満帆の人生を送っていたが、脱サラ後様々な失敗を体験し、最後に貧乏神神社にたどり着いたというこの経歴は実に波瀾万丈であり、珍奇そのものと言える。また、貧乏神を祭るというアイデアも「逆転の発想」（記事【2】）として説明され、それも風変わりものである。さらに、「究極の参拝」（記事【6】）と称される貧乏神神社の独特な参拝方は、一般の人々やタレントがご神体を叩いたり、蹴飛ばしたりする風景が載せられ、普通の神社参拝とあまりにも異なるこ

とで読者に強いインパクトを与える。このように、マスメディアは貧乏神神社の珍奇性に注目し、娯楽性のある報道をし続けてきた一方、貧乏神神社はマスメディアの報道により広く知られ、「変わった神社」としてのイメージが定着してきたと考えられる。

もう一つ焦点が当てられたのは貧乏神神社のご利益である。そのご利益の内容は様々であり、例えば記事【2】には以下の三人のご利益体験が載せられた。

「主人とお参りに来て3日後に、主人がパチンコで十数万円勝ちました」（沢田鈴世さん・仮名44才美容師）

「娘の恋人が店長をしている居酒屋が繁盛しはじめたんです。2割増しくらいになったんです」（武田由美さん・仮名53才主婦）

「いやあ、私に関しては、まだ何も御利益はないんです（笑い）。ただ、膝の痛みがかなり楽になったくらい」（吉田孝子さん・仮名33才主婦）

この三人はそれぞれギャンブルで勝ち、商売繁盛と病気快癒のご利益をもらった。ほかに、「倒産しそうな会社が持ち直した」、「宝くじが当たった」、「パチンコやパチスロで勝った」（記事【4】）、「貧乏神神社パワーで1億当選者出現」（記事【6】）、「今から2年前、温泉の帰りに寄りました。『どうか宝くじで1000万円当たりますように！』ってお願いをしたら、本当に500万円当たったんです」（記事【12】、【14】）、「トイレに、祭主の教えが書かれた紙を張って、毎日読んでいたら、500万円当せんしました」、「ここではずれくじを供養したら、100万円当せんしました」（記事【16】）などの体験談も報道され、明らかにくじやパチンコといった金銭的なことに関するご利益がメインである。また、記事【9】においては、ご利益の体験談が言及されていないが、「賭けごとに御利益あり」とされる神社として紹介された。つまり、貧乏神神社が貧乏という名と逆に、金銭をもたらすご利益があることがマスメディアにより大いに伝えられている。

こうして、貧乏神神社は珍奇な神社、金銭をもたらすご利益のある神社としてマスメディアの喧伝により名を拡め、多くの参拝者を引き寄せた。しかし、上記の記事は、記事【6】を除き、ほとんど櫻井の「気」と「天の大神」の理論や病気治癒のご利益に触れていない。櫻井によれば、「気」のパワーにより病気が治る体験談もたくさん寄せられてきたが、それ

を実証することが難しいという理由で、マスメディアはあえて取り上げないようにしているという。要するに、マスメディアは貧乏神神社の珍奇性と金銭をもたらすご利益に関しては積極的に報道するのに対して、「気」のパワーという宗教的民間医療に関しては控えめな態度を取っている。

4、ご利益分析

前述したように、マスメディアは貧乏神神社のご利益について、くじやパチンコがあたったような金銭的なことを積極的に報道するのに対して、「気のパワー」によるご利益、特に身体的なことにはほとんど触れなかった。実は、参拝者の体が元気になった体験談は貧乏神神社のホームページに公開され、また神社の感謝帳にも数多く記載されている。貧乏神神社のご利益を全面的に考察するにはこれらの体験談は看過することはできない。貧乏神神社には、一冊の感謝帳が残されており、中に 2004 年 11 月 11 日から 2006 年 7 月 30 日までの期間に、計 332 人が「リウマチの手が動く」、「腰の痛みが良くなった」というような体験談を書き込んだ。ここでは、これらの体験談を資料として利用し、参拝者の人数推移、男女比、地域分布、具体的ご利益内容など分析する。

4-1、人数推移と男女比

まず、2004 年 11 月 11 日から 2006 年 7 月 30 日まで月毎のご利益体験談の記入者の人数推移を見よう。それを下記の図 3-4-1 にまとめた。毎月の記入者数にばらつきがあり、不規則に見えるが、全体的に減少している傾向を示し、漸減していることが窺える。すなわち一般的に、流行神の出現と流行に伴い、ご利益体験談も一時期多く出回り、広く流布されるが、その後、流行神の衰退か習慣化とともに、ご利益体験談の出現もピークを過ぎた後に減少し、あるいは徐々に消滅してしまうことが見られる。このような流行神の流行とご利益体験談の伝播との相互関係が、貧乏神神社の多くの事例においても現れている。

それに、感謝帳の記入者数は 5 月と年末あたりになれば増加することが分かる。櫻井の談によると、ゴールデンウィークを挟む春季と 12 月後半を除く年末頃は神社に訪れる参拝者が特に多いというため、ほかの時期より記入者が多く出ていると考えられる。

感謝帳には性別が示されていないため、名前より性別を判断したところ、名前を記入した 292 人の内、男性と女性はそれぞれ 74 人と 218 人あり、およそ 1 : 3 の比率である。女性が圧倒的に多いことが一つの特徴と言える。

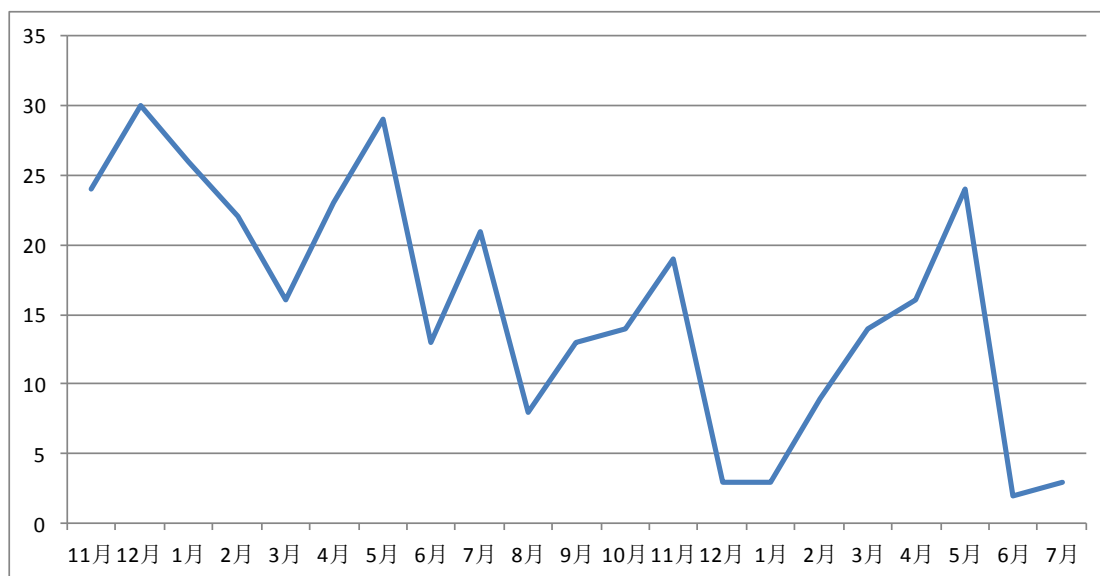


図 3-4-1 記入者の月毎の人数推移

4-2、地域分布

続いて、感謝帳の記録を通して、記入者の地域分布を分析しよう。全記入者 332 人の内、出身地が確認できるのは 203 人あり、主な出身地は中部、関東、近畿、四国地方であることが分かった。下の図 3-4-2 が示しているように、7 割以上の記入者が中部地方出身であるが、地元の長野県より愛知県、静岡県と岐阜県からの記入者が多く、それぞれ 3 割、2 割と 1 割に及んでいる。2 番目に多い関東地方の参拝者は 1 割くらいに過ぎない。ゆえに、貧乏神神社の影響圏は、愛知県とその周囲を中心とする中部地方と考えられ、しかも地元の長野県よりとなりの愛知県を始めとする周囲の県からの参拝者が多いことが一つの特徴と言える。

愛知県出身の記入者が特に多い理由として考えられるのは、愛知県の旅行会社とバス会社が積極的にツアーを取り組むことである。櫻井によると、地元よりよそとの繋がりが顕

著であり、現在、全国から参拝者が訪れ、感謝帳の記載当時に比べれば、更に影響圏が拡大したという。

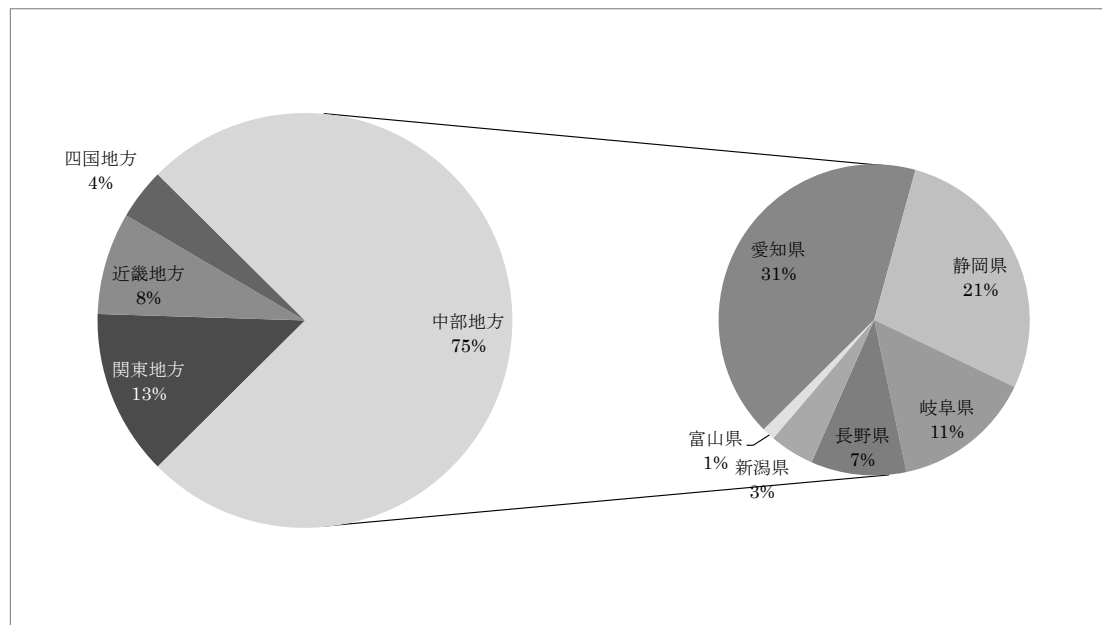


図 3-4-2 記入者の地域分布

4-3、ご利益内容

最後に、具体的にどんなご利益内容が記入されたのかを分析しよう。感謝帳にはご利益をもらい、お礼を示すものが 292 件と祈願を示すものが 5 件あり、計 297 件が確認できた。そのご利益については、例えば、「腰が楽になりました。うれしいです。（医者で治らなかった）」（長野県 Y さん）、「ひざの痛みがあるのでパワーをわかせていただき、とてもらくになりました。ありがとうございました」（静岡県 T さん）といった身体の痛みが消えたり、病気が治ったりしたような身体に関連する内容であった。まず、図 3-4-3 は身体の中のどの部位の痛みが解消されたかをまとめた。一番多いのは膝、その次に足/足首、腰、肩などの痛みがなくなったという事例である。また、その内病名を示したのは 24 件があり、それを表 3-4-1 にまとめた。リウマチや腱鞘炎など様々な病名が見られた。

このように、貧乏神神社のご利益は貧乏神の参拝による金銭関係のご利益と、櫻井夫婦

のパワーの注入による病気治癒のご利益に二分することが可能となる。前者は「報道できる」ものとされマスメディアに大いに宣伝されたのに対して、後者は「報道できない」ものとされ、ほとんど口コミを通して知れ渡るようになったのである。

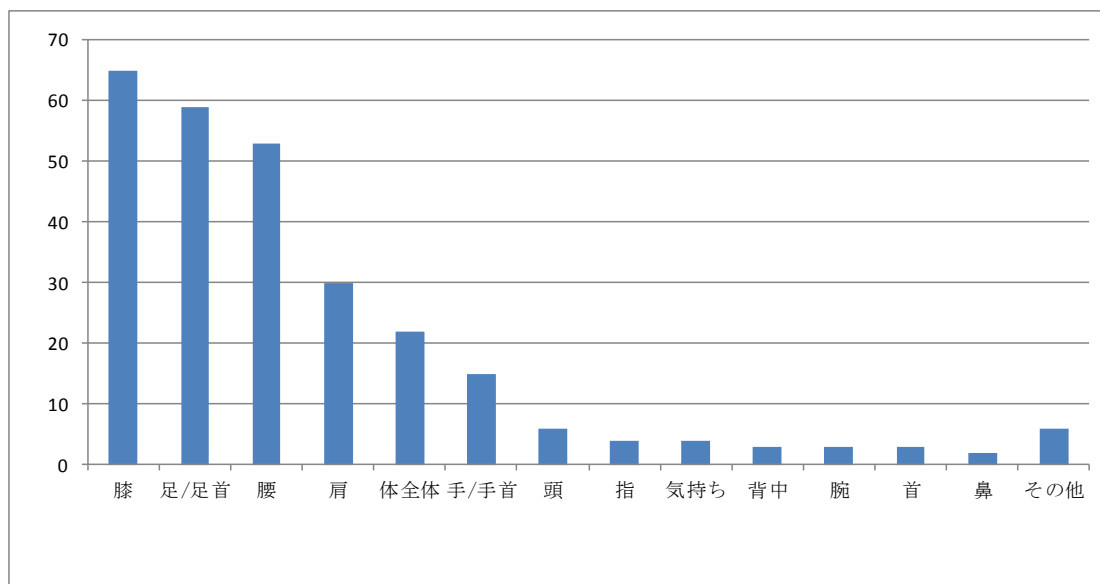


図 3-4-3 身体の部位

表 3-4-1 病名と件数

病名	件数
リウマチ	4
腱鞘炎	3
骨折	3
しびれ	2
50肩	1
ぎっくり腰	1
けが	1
首こり	1
ヘルニア	1

麻痺	1
骨折後遺症	1
肩こり	1
咳	1
血圧不安定	1
中耳炎	1
自律神経	1
合計	24

5、旅行関連業者の関わり

貧乏神神社が 1998 年 9 月に創建されて以降、いわゆる氏子と言えるものが存在していないにもかかわらず、県内外各地から数多くの参拝者が訪れている。それらの参拝者は、旅行会社により企画された参拝ツアーに参加し、観光バスで来た客が大きな割合を占めている。建立当時、貧乏神神社は半年くらい閑散としていた。マスメディアの報道により、参拝客が徐々に増えてきたと同時に、櫻井は地元観光バスの立ち寄りドライブインに「ぜひうちへ来てください」と営業活動を行い、翌年から観光バスも続々と訪れてきて、さらに口コミを通して、遠方からも観光バスが来るようになったと述べた。

貧乏神には感謝帳と別に、数多くの記名帳も残っている。この記名帳は建立当時から書き続けられ、参拝者の名前だけではなく、旅行会社名や団体名などの情報、さらにお礼参りの言葉やエピソードも書かれている。2012 年（平成 24）年末までの時点で、この記名帳はすでに大学ノート 200 冊を越えている。ここでは、貧乏神神社の記名帳を資料として、ツアーを企画する旅行会社、参加する団体やツアーの内容などを具体的に考察する。資料がかなり膨大なため、記録の残る最も初期の 2000 年（平成 12）1 月から 6 月までの記録を例として分析していきたい³。



写真 3-5-1 記名帳 (1)

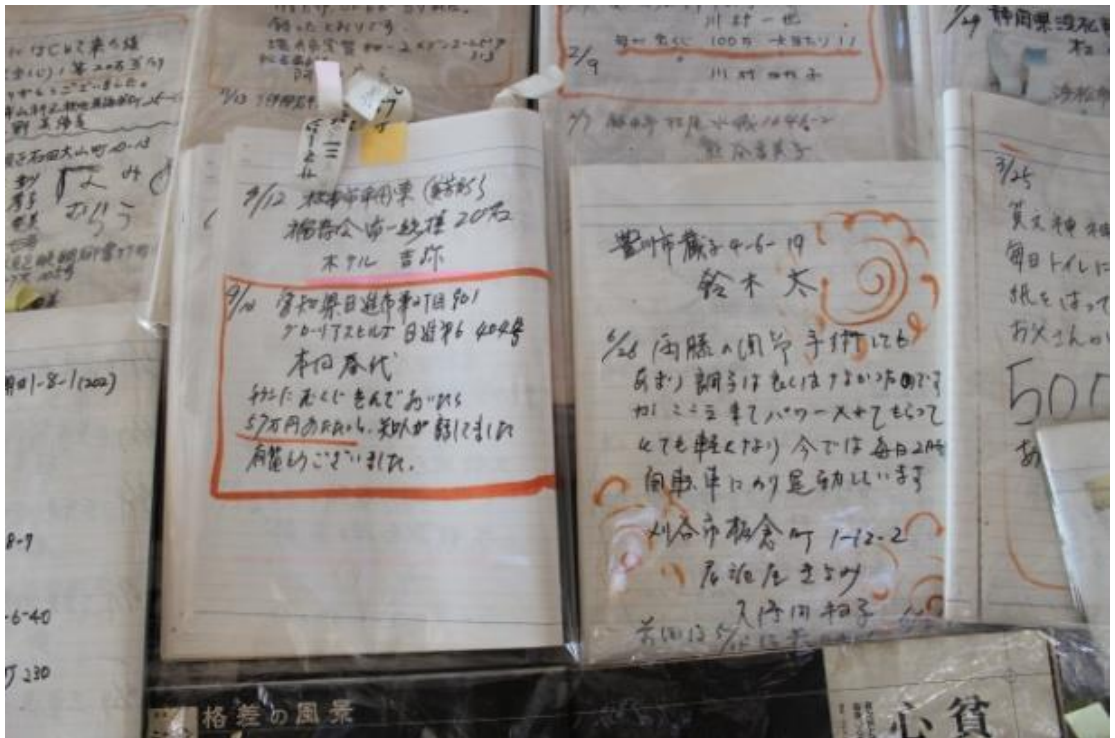


写真 3-5-2 記名帳 (2)

5-1、旅行会社とバス会社の関与

この6ヶ月間に、人数が書かれたツアーだけを計算すれば、計415のツアーで、延べ9092人が貧乏神神社を訪れている。したがってツアー客だけでも、年間2万人前後が訪れると推測できる。また、人数が書かれていないツアーも含めて、173のツアーが旅行会社を明確に示し、394のツアーがバス会社を示している。

まず、記名帳の記録に基づき、図3-5-1はバスツアーを企画する各旅行会社の占める割合をまとめた。太平洋トラベル、JTBやKNT（近畿日本ツーリスト）などの大手を始め、多くの旅行会社が貧乏神神社を観光スポットとしてツアーコースに組み込んだことが分かった。これらの観光会社の所在地に注目して見れば、太平洋トラベルの場合は特定できないが、JTBの場合はJTB西日本とはっきりと示したのは8割があり、KNTのツアーの内、KNT名古屋支店とKNT横浜支店経由のものも8割近くになっている。また、中央トラベルは全ての店舗が愛知県内にあり、愛知県からの旅を主な業務内容としている。このように、愛知県の旅行会社が積極的にツアーを企画していることが窺え、ほかに神奈川県や兵庫県といった関東地方や近畿地方の旅行会社も貧乏神神社を旅行商品として売り込もうとしていたことが分かった。

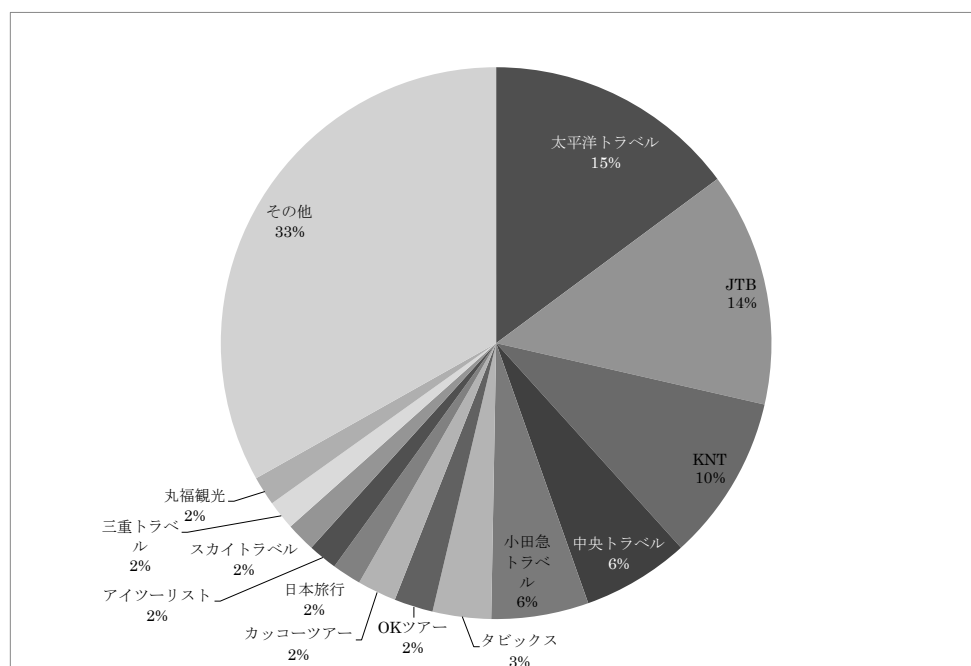


図 3-5-1 各旅行会社の割合

貧乏神神社は中央自動車道飯田インターまで約3キロの至便の地にあり、境内に広大な駐車所があるため、観光バスが立ち寄りやすい条件を備えている。旅行会社が観光客の運送をバス会社に委託する場合もあれば、バス会社が自らツアーの企画から運送まで実施する場合もあり、貧乏神神社には様々なバス会社から観光バスが訪れている。図3-5-2は各バス会社が占める割合を示した。その中、名古屋観光バスが一番多く、全体の四分の一を占めており、主に名古屋、刈谷（愛知県）、四日市（三重県）や松阪（三重県）営業所によるツアーである。この名古屋観光バスは名阪近鉄バス、名鉄東部観光バスと共に、愛知県に本社を置く名鉄グループに所属している。その次に多いのは、新潟県の越後交通バス、大阪府の水間鉄道バスや静岡県遠州鉄道バスなどである。つまり、愛知県のバス会社を中心に、中部地方や近畿地方のバス会社により観光客が各地から運ばれてきたのである。

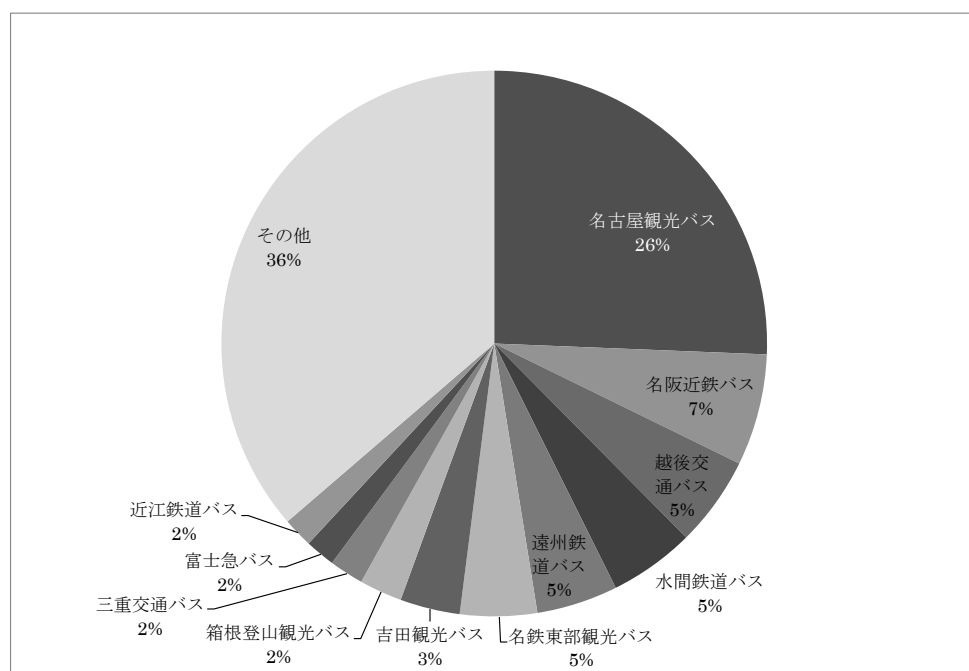


図3-5-2 各バス会社の割合

このように、愛知県の旅行関連業者が貧乏神神社との関わりが特に顕著であり、ほかに、中部地方、関東地方や近畿地方の旅行会社とバス会社も貧乏神神社と観光客をつなぐパイプ的な役割を果たしている。2000年当時の状況に比べると、その後周囲の県にとどまらず、

東北地方や四国地方からもバスツアーが訪れるようになり、現在全国に行き渡っているという。櫻井によると、2011年の東日本大震災の影響で、訪れてくる観光バスの数は一時期激減したにもかかわらず、現在月に20台から70台くらいがあり、多い時に一日13台にも及ぶという。

5-2、ツアー団体

2000年前半団体で訪れた観光客の内、その団体名を書き記したのは161の団体がある。これらはどのような団体であるかについて分類して説明していきたい。まず、名前だけで判断不能なものは4割あり、それを除けば、「〇〇会社」や「〇〇工務店」のような職場関係による旅行団体が多く、その中に現役の社員団体だけではなく、定年後の社員からなるOB会も入っている。その次に、各種の老人クラブが約1割を占めており、高齢層の団体が多く見られることが一つの特徴と言える。ほかに、同じ地域や趣味により結成された団体がそれぞれ1割くらいで、各種の婦人会、信仰会や同級生会は比較的に少数に留まっている。

不明：弥生会、四六会... 40%

職場：〇〇会社、〇〇工務店... 24%

年齢：老人クラブ 11%

地域：〇〇町内会、〇〇商店街... 10%

趣味：カラオケクラブ、ゲートボール会... 8%

性別：婦人会 4%

宗教：〇〇信仰会、〇〇敬神講... 2%

学校：同級生70年会、昭和20年卒業生... 1%

5-3、ツアーの目的

ここでは、観光客がいかなる目的でツアーに参加し、貧乏神神社にたどり着いたかを考察する。記名帳にツアーの目的が明記されたのは288件があり、それを図3-5-3にまとめ

た。見て分かるように、温泉を楽しむと同時に貧乏神神社に訪れるケースが圧倒的に多い。この温泉というのは、貧乏神神社から 10km 離れる所に「美人の湯」と称する昼神温泉のことで、このようによく貧乏神神社と一緒にツアーコースに取り込まれている。二番目の目的は神社仏閣であり、特に元善光寺との組み合わせが多く見られた。元善光寺とは飯田市にある天台宗の名刹で、貧乏神神社から 12Km くらい離れている。距離的に近いこともあり、一緒に参拝される対象となっている。そのほかに、旬のフルーツや地ビールといったグルメ、水芭蕉で有名な戸隠植物園のような名所、地元の旅館や花見なども観光客を惹きつける要素となっている。

要するに、旅行会社やバス会社は貧乏神神社を地元の他の観光スポットなどとセットとしてツアーコースに組み込み、集客効果を上げようとする。一方、観光客は神社仏閣の参拝という宗教的な行動と行楽を矛盾なく同時に取り入れていることが窺える。

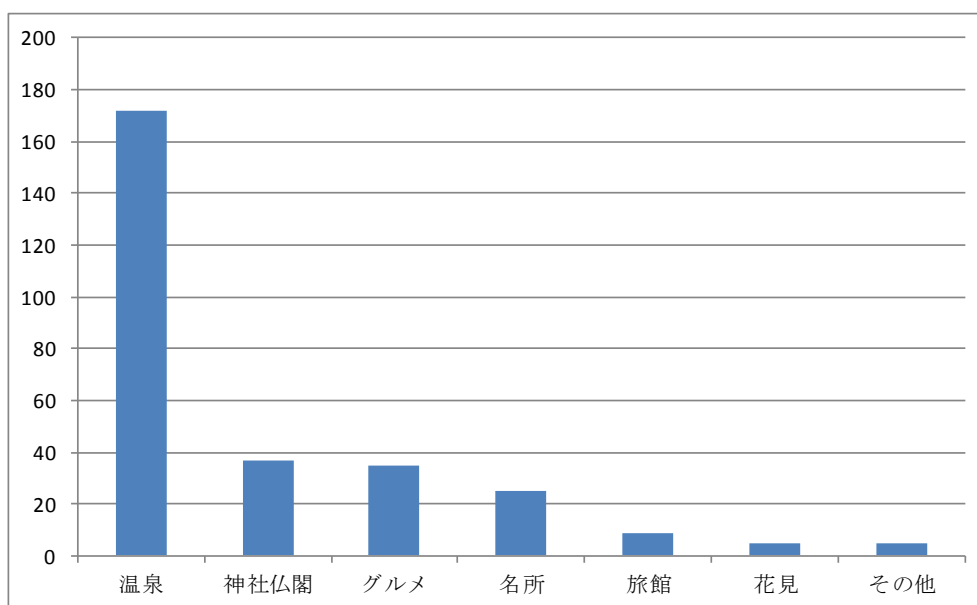


図 3-5-3 ツアーの目的

考察

以上、貧乏神神社の建立経緯、発展過程、マスメディアの報道や観光業者の関与などを考察してきた。貧乏神神社は、創建の後急速に参拝者が増えているため、流行神の一例と

考えられる。しかし従来の流行神と比較すると、いくつかの特徴が顕著に見られる。

①俗人による創立と運営。貧乏神神社は神社と言うものの、宗教法人でもなければ、祭主夫婦は正式な宗教者でもない。それにもかかわらず、貧乏神神社は紛れもなく参拝者やマスコミによって宗教施設とみなされ、参拝者がそこで祈願をしたり、ご利益をもらったりするのである。特に、貧乏神神社の展開において、これまで流行神の一つの特徴として指摘された宗教者の関与という特徴が見られず、そのかわりに非宗教者である祭主夫婦が宗教者と同じ役割を果たしてきたのである。

②信仰対象の複雑性。貧乏神神社における信仰対象は二つあると考えられる。一つは貧乏神という抽象的な神である。それに対する信仰の仕組は、疱瘡をもたらすことも直すこともできる疱瘡神と類似していると言える。つまり、貧乏神は貧乏をもたらす神であり、駆除しなければいけない反面、貧乏を司る神でもあるため、それを祀り上げることにより、金運を招く神としての性格が表に出てしまう。一方、祭主夫婦のパワーにより病気治癒のご利益をもらった参拝者が多くいることから、祭主夫婦にはカリスマ性があり、教祖的な存在であると考えられる。その意味で、祭主夫婦はもう一つの信仰対象と言えよう。

③特殊な地域性。観光会社とバス会社の所在地と参拝者の出身者を見れば、地元の長野県ではなく、周辺の愛知県、静岡県や岐阜県により強く影響を及ぼしていることが分かる。櫻井夫婦は、地元との繋がりが極めて希薄であると証言し、財津の論文にも「参拝者のほとんどは遠方からで、地元や近隣の住民はあまり来ないそうだ」（財津 2013 : 3）との記述が見られた。地域性においては、貧乏神神社は特殊な例と思われ、地元で根ざしたほかの事例と異なっている。

貧乏神神社のこのような特殊な地域性は、観光会社とバス会社の関与が大きな要因と考えられる。貧乏神神社は新たに生まれた参詣地であり、参詣者にとっては一つの「聖地」と言える。観光産業はこの「聖地」を旅行商品として取り入れ、商品化していく過程の中で、貧乏神神社が流行り出したのである。これまで、ツーリズム研究の中で、巡礼ツーリズムに関する研究が特に多く、巡礼の商品化については、岡田は「巡礼ツーリズムにみる商品化過程は、巡礼習俗の知識と規範を占有していた寺院などの宗教組織や地域組織によ

る働きかけではなく、それらの『外部』からやってきた産業セクターの主導によるものであった」（岡田 2013 : 99）と述べた。貧乏神神社の商品化過程においても、同じく「外部」からの働きかけが一番大きな推進力であるが、神社経営者の櫻井夫婦による営業活動は「内部」からの働きかけとして、無視できないと考えられる。

また、宗教とツーリズムについては、欧米では 1990 年代から「宗教ツーリズム」という用語が一般化になった。リンシードは「宗教ツーリズム」を「その参加者が部分的ないし全面的に宗教的理由に動機づけられているツーリズムの類型である」（Rinschede 1992:52）と定義した。貧乏神神社は宗教ツーリズムの対象とされる際、ツーリストは「聖」としての宗教的な行動を執り行う同時に、「俗」としての娯楽も求めている。佐藤（2004）による四国巡礼の研究においても、このように信仰とツーリズムが矛盾なく共存していることが示された。

これまでの宗教とツーリズムに関する研究では、巡礼あるいは伝統的な聖地に焦点を当ててものが多かったが、現代における宗教とツーリズムの関連性を究明するには、貧乏神のような新たに作られた「聖地」も射程に入れ考察する必要があると思われる。

1 波動とは、微弱なエネルギーを意味する。『現代宗教事典』の「ヒーリング」の項目を参照（小池 2005 : 436）。

2 貧乏神神社ホームページ (<http://www9.plala.or.jp/binbougami/index.html>) より。閲覧日 2013 年 9 月 5 日

3 2000 年（平成 12）前のノートが残っていないため分析ができない。

第四章 招福キャラクターの新登場——仙台幸子

本章では、再び仙台の事例に目を向ける。仙台には、福の神とされる仙台四郎があり、仙台初売りのイメージキャラクターとしても定着している。近年、その「現代版」や「妹分」とされる仙台幸子が流行り出し、莫大な人気を博した。この仙台幸子は、グッズの配布したとたんに、数多くのご利益体験談が寄せられ、ご利益即効の「幸運の女神」と呼ばれるようになった。本章においては、仙台四郎と比較しながら、仙台幸子の登場と展開過程を明らかにし、その流行に見られる新たな特徴を考察する。

1、仙台四郎

1-1、仙台四郎とは

仙台幸子を説明する前に、まず仙台四郎を紹介しておきたい。仙台四郎とは江戸時代末から明治時代に生きた知的障害者である。彼がどこかの店に入れば、店は一瞬賑やかになる。そのため、彼は商売繁盛をもたらす「福の神」として扱われていた。現在、仙台市都心部の商店街にある三瀧山不動院は「仙台四郎安置の寺」として知られ、また、仙台四郎の写真を使って作られたグッズが店頭に並べ、仙台初売りのイメージキャラクターにも起用されている。それに、七夕などのイベントの際、仙台四郎をモチーフにしたコスプレなども見られる。このように、仙台四郎は馴染み深く身近な福の神であり、仙台地元の招福キャラクターとして定着している。



写真 4-1-1 仙台四郎の写真

実在している仙台四郎については、『仙台人名大辞書』の「四郎（白痴）」の項目では、

以下のように述べられている。

【四郎】白痴。四郎馬鹿を以て其名四方に著はる、仙臺北一番丁鐵砲師芳賀某の子なり、其家火の見櫓の下にあるを以て櫓下四郎と呼ぼる、性痴愚東西黒白をも辨ぜざれども好奇者の愛憐を受くる四郎の如き蓋し稀なり、明治三十五年頃、四十七歳にて福島縣須賀川町に死せりと云ふ（菊田 1974 : 556）。

仙台四郎は「四郎馬鹿」と呼ばれる知的障害者でありながらも、生前かなりの有名人のようであった。当時の『仙台新聞』、『仙台日日新聞』を始め、地元の新聞紙は四郎の逸事を何回も取り上げた。例えば、1877年（明治10）の『仙台新聞』に車を引いていた四郎が手を突き放し、客をひっくり返した面白話、1878年（明治11）10月18日の『仙台日日新聞』に娼妓が四郎に衣服を拵えて与える人情話を載せていた。ほかに、与えられた切符で区間外に行ってしまったことや山形市の花柳界にもてはやされるなどの記事から、四郎の純粋な性格と、白痴者として名高い四郎が人々に愛憐され、花柳界で人気者だったことが窺える。



写真 4-1-2 三瀧山不動院にある仙台四郎像



写真 4-1-3 店頭での仙台四郎グッズ



写真 4-1-4 初売りの旗にある仙台四郎



写真 4-1-5 仙台四郎のコスプレ

1-2、仙台四郎の流行過程

仙台四郎がいかに発展してきたかについて、栗野邦夫は 1882 年（明治 15）から 1993 年（平成 5）までを 5 つのブーム期に分けた（栗野 1993 : 170-175）。1882 年（明治 15）から 1917 年（大正 6）までを第 1 期とする。この時期四郎は何回も新聞に報道され、死後、千葉写真館の千葉一氏によって四郎の写真が公開され、「仙臺四郎」と命名されている。第 2 期は 1918 年（大正 7）から『仙台人名大辞典』に掲載された 1919 年（大正 8）まで。第 3 期は 1935 年（昭和 10）から 1980 年（昭和 55）まで。この時期、仙台四郎は様々な書誌に取り上げられた。第 4 期は 1986 年（昭和 61）から 1993 年（平成 5）まで。この時期新聞、書誌だけではなく、テレビも四郎を取り扱いはじめた。一方、仙台中心街にある三瀧山不動院に仙台四郎のポスターが奉納されるようになった。第 5 期は 1993 年（平成 5）からである。四郎は再びメディアに多く報道され、三瀧山不動院も「仙台四郎安置の寺」として定着するようになった。本稿では栗野の分け方を踏まえ、現時点までの仙台四郎に対する信仰の発展を流行以前、一回目のブーム、二回目のブーム、三回目のブームと安定期に分け、総合的に考察する。

流行以前：1882年（明治15）から1986年（昭和61）まで。四郎は生前において新聞に何回も取り上げられたが、いずれも四郎を有名で人気の白痴者として彼の逸事を扱っただけで、四郎が客寄せのできる福の神だというニュアンスは窺えなかった。四郎の客寄せの話はただ口伝えに留まっていたことが予測できる。四郎の死後、1917年（大正6）になって、仙台市内の千葉写真館が「明治福之神 仙臺四郎君」と銘打ってこの写真を絵葉書に印刷し売り出した。この時から「仙台四郎」と呼ばれるようになり、仙台四郎がデビューした。それから1986年（昭和61）までの長い間、四郎は仙台特有の風物として様々な書誌、特に郷土資料に紹介され、四郎の物語も次第に定着してきたが、仙台四郎に対する信仰が急速に広がった様子にはなかった。

一回目のブーム：1986年（昭和61）になって初めて、一回大きいブームが起きた。その発端は三瀧不動院で四郎に対して祈祷が行われ、商店街で特別に作った色紙、のれん、土鈴などのグッズが販売されたことである。NHK 仙台も「セピア色の福の神—謎の名物男・仙台四郎—」という番組を放送した。しかし、テレビにも取り上げられたものの、この時期の仙台四郎グッズは一時的な商品で終わり、ブームも2、3年で去ってしまった。仙台四郎の影響はただ県内にとどまったと考えられる。

二回目のブーム：後に再び大きいブームが起きたのは1993年（平成5）のことである。この年の5月に朝日新聞社の雑誌『アサヒグラフ』（5月7・14日号）で、『東北の不思議番外編「謎の福の神!?仙台四郎を追う」』という特集で仙台四郎を取り上げた。それに続き、日本テレビ「ルックルックこんにちは」の番組で仙台四郎を取り上げ、全国放送した。これで、仙台四郎の人気は急激に上昇し、仙台市の観光課や三瀧不動院へ問い合わせも殺到した。同年5月27日の『河北新報』で『スペシャルワイド／商売繁盛の「福の神」仙台四郎／ブーム再び不景気の今だから...／色紙、絵馬・土鈴...／グッズ人気“全国区”一般家庭でも／家族の幸せ託す』といった見出しで、仙台四郎を紹介した。

いま「仙台四郎」である。ん？ご存じない。ホラ、よく仙台市内の飲み屋さんなんか、写真が飾ってあるでしょう。いがぐり頭で、腕組みした着物姿の笑顔の男が。商売繁盛の「福の神」として、仙台市内を中心に信仰を集めてきたんです。その四郎さ

んはここ最近、グーンと信者を増やしてきています。色紙、土鈴といった「四郎グッズ」が、全国的に人気の的となっているのです。商売繁盛だけではありません。家族の幸せを託すまでに広がり、一般家庭にも、そっと飾られるようになりました。四郎さん、お喜びでしょうか。

この記事から四郎の人気ぶりが見られる。また、四郎に対する信仰は商店街から一般家庭にまで広がり、さらに流行するようになったことが窺えた。

三回目のブーム：それ以来仙台四郎はよく『河北新報』や『朝日新聞』に取り上げられるようになり、またこれまで出回っている写真のほかに、写真や色紙入り小冊子、仙台四郎が描かれているテレホンカード、置物も登場し、さらに仙台四郎をテーマにした「仙台四郎ミステリーツアーズ」などイベントも行われていた。1995年（平成7）、ブーム再発の2年後、仙台四郎の信者は自発的に仙台四郎を祭るような行動が見られた。

まず、1994年（平成6）8月15日の『河北新報』には「仙台四郎」を描いた紙が仙台市青葉区上杉5丁目にある樹齢約100年のイチョウの木に、4枚張り付けられていると述べている記事が掲載された。その後、翌年1月13日の『河北新報』では、「仙台四郎手植えのイチョウ！？／仙台・青葉区上杉関係ないのに“ご神木”の怪／「美観損ねる」住民からは苦情／写真、ほこらにおさい銭、手を合わせる人の姿も」との記事が仙台四郎を祭る様子を詳しく紹介した。

仙台市青葉区上杉5丁目の都市計画道路「北四番丁岩切線」沿いにある1本のイチョウが、木の周りに、商売繁盛の福の神として知られる仙台四郎の写真やほこらなどを祭られ、神木扱いられている。実際には、仙台四郎とは何のゆかりもないのだが、それを知って



写真 4-1-6 神木になっているイチョウ
『朝日新聞』（1994年8月15日）より

か知らずか、お参りする人の姿も見られる。(中略)「仙台四郎の写真が置かれている」と初めて付近の住民が気付いたのは、昨年5月ごろ。だれが最初に置いたのかはつきりしない。その後、写真は10枚以上に増えたほか、いつの間にか、民家の神棚に祭る木製のほこらや、さい銭箱代わりの空き瓶などが置かれ、「仙台四郎手植えの銀杏」と書かれた小さな案内板まで立てられた。

このように、仙台四郎と何のゆかりもないイチョウの木が仙台四郎手植えの銀杏として神木扱いされ、その下に仙台四郎の写真やほこらなどが設置され、自然に仙台四郎を祭る場所と化してしまった。結局周辺住民の苦情を受け、市が写真などを撤去したのだろうか、現在は既にその気配が見られないが、このエピソードからは当時仙台四郎がよほど流行っていたことが推測できる。

安定期：それ以降仙台四郎ブームは次第に落ち着いていったが、2002年(平成14年)から、仙台四郎のイラストが仙台初売りで起用された。また図9のように、近年クリスマスシーズン前から、アーケード天蓋下にサンタクロース姿の仙台四郎の巨大バルーン人形も掲げられる。現在仙台四郎は、完全に福の神、また仙台初売りのキャラクターとして定着し、仙台四郎グッズも仙台のご当地グッズの代表となっている。



写真 4-1-7 仙台四郎のバルーン人形

2、仙台幸子

2-1、仙台幸子とは

仙台幸子とは、実在の人物を元に作られた幸運を呼ぶとされるキャラクターである。そのキャラクターとなった人物は「幸子」という名の女性である。実の娘の峰ハチヨが2001年(平成13)から自分のホームページに、母の立ち寄る所に人が押し寄せてくるというエ

ピソードを載せ、仙台四郎に因んで「仙台幸子」と命名した。2003年（平成15）東北放送のラジオで報道され、それをきっかけに峰ハチヨは幸子の1歳頃の写真を使った新たなグッズを製作した。これが頒布されると「ご利益があった」との声が寄せられてきた。仙台幸子グッズは以下のようなシールやストラップをはじめ、バッジ、Tシャツ、ペンダントまで様々あり、ご利益も金運、仕事、恋愛などに及んだという。その後、仙台幸子は「福の神」、「幸運の女神」として様々なメディアを通じて全国で紹介されるようになった。



写真 4-2-1 幸子1歳頃の写真



写真 4-2-2 シールとストラップ

グッズに使われている写真は幸子本人が1歳の頃に、一家が旧満州に移住していた時に撮られたという。写真の中、どんぐり頭をしている小さい女の子が人形を抱えて椅子の上に立っている。現在の幸子本人は既に70歳を超え、仙台市宮城野区に在住している。メディアに声だけ出演をしたことがあるが、顔を出したこともなければ、現在の写真も公開されていない。また、「幸子本人に会った」というグッズ購入者のご利益情報はあがるが、多いものではなかった。つまり、幸子本人はメディアから離れ、身を潜ませている。

2-2、実在する仙台幸子

さて、肝心な幸子本人はメディアに一度も顔を出したことがなく、しかもネット上本人の現在の顔が分かる写真すら一枚も見つからない。一体この「幸運の女神」としての女性はどのような人なのか。

グッズ購入者から「幸子に会った」という証言は仙台幸子オフィシャルサイトに数件掲載された。例えば以下のような記述が見られた。

ご本人にお会いできるとは思っていませんでしたから。ワタシの想像どおり、上品で優しくて、ごく普通の奥様っていう感じです。(秋田在住 J)

このように、仙台幸子は見た目がごく普通の奥様であるが、購入者は「仙台幸子に会ってからいいことがあった」(秋田在住 J)とか、「仙台幸子と握手してからご利益が現れているんだ」(山形在住 M)と語った。

ほかに、峰ハチヨの著書『仙台幸子伝説 さちぼん』における幸子の逸事からより具体的な仙台幸子像が読み取れる。『仙台幸子伝説 さちぼん』には13件の「幸子伝説」が収録されているが、その特徴は以下の三点にまとめられる。

第一、幸子は仙台四郎と同じように人を寄せる。商業繁盛のキャラクターとして発信した仙台幸子は客を寄せる伝説が一番広く知られている。例えば、幸子が人のいなかった売り場に向かったら、すぐ客が群れた(幸子伝説その四)、客のいない店のドレスを眺めていたら、すぐそのドレスが買い求められた(幸子伝説その六)、デパートで幸子買った物はすぐに他の客にも求められた(幸子伝説その七)、どの店に行っても客が後ろについていった(幸子伝説その五、八、九、十)、行った喫茶店がすぐに満席になった(幸子伝説その十一)などの話が記されている。

第二、単なる店の客だけではなく、仙台幸子はもっと広い意味で何かを寄せてくる。例えば、旦那の同僚や近所の奥さんたちがよく遊びに来た(幸子伝説その一、二)、動物は近所の庭には出沒せず、幸子の庭だけを荒らした(幸子伝説その三)、よく知らない人から声をかけられた(幸子伝説その十三)などの話が示すように、動物や知らない人まで近寄ってくる。さらに、幸子はクジ運が強く、懸賞にもよく当選する(幸子伝説その十二)とい

うことも、幸子の持っている何かを寄せてくる力の現れであろう。

第三、幸子の特殊な力はさておき、その生活と性格を見れば、「普通のおばさん」と峰ハチヨが強調しているが、実は普通でないところは読み取れた。例えば、峰ハチヨが幸子についてこう述べている。

幸子は温室育ちの深窓のご令嬢だった（たぶん）。（峰 2006：06）

幸子は戦争を経験したにもかかわらず、世の中にうごめく泥沼のような境遇に遭遇することなく、普通に恋愛結婚してほのぼのと専業主婦をこなしてきた。（峰 2006：06）

昔、3人の子供の手をひいて歩いていたとき、路上の手相占い師に突然呼び止められてこんなことを言われたそうだ。

『あなたは商売人向きです。苦労しなくとも客が集まってきます。なんでもいいから商売をやりなさい、大成功しますよ！』

その後何度か、似たようなシチュエーションで同じことを言われたそうだ。（峰 2006：12）

幸子の経歴を見て分かるように、彼女は「普通のおばさん」でありながら、少し特別な「恵まれている」人でもある。言わば、幸運の女神ともされる幸子自体が幸運の人である。

3、仙台幸子の展開過程

まず最初に、仙台幸子はいかに知られるようになり、またどう展開してきたのかを概観しておきたい。2003年（平成15）仙台幸子デビュー前後から現在に至るまで、おおよそ以下の5つの時期に分けられる。

第1期	2001～2003.8	デビュー前
第2期	2003.9～2004.4	東北放送のラジオ番組に出演
第3期	2004.5～2005.12	大阪のテレビを皮切りに、全国メディアに出演
第4期	2006～2009	マスコミ登場数が減少

第1期：仙台幸子デビュー前の2001年（平成13）から2003年（平成15）9月まで。2001年（平成13）から峰ハチヨは自分のホームページに幸子の人寄せの話を載せ、幸子の1歳頃の写真もアップロードし、仙台幸子という名前も家族の冗談話に出てきた。2003年（平成15）の夏、幸子の話はある女性ディレクターに知るところとなり、峰ハチヨのところに仙台のラジオ局から取材が申し込まれた。言わばこの時期は仙台幸子デビュー前の準備期に当たる。

第2期：2003年（平成15）9月から2004年（平成16）4月までは仙台幸子が宮城県のメディアに取り上げられ、徐々に流行り出した時期である。2003年（平成15）9月仙台幸子が最初に出た番組は東北放送のラジオ番組「ボリュームワイド」であった。もちろん、幸子本人ではなく、峰ハチヨが出演したのである。ラジオ放送後、峰ハチヨのホームページのアクセス量が増え始め、また商売人から「グッズはないのか」という問い合わせのメールも入り込んできて、それをきっかけに、峰ハチヨはシールやTシャツなどのグッズを作り始めた。翌年、顔を隠した幸子と峰ハチヨが東北放送のテレビ番組「ウォッチンみやぎ」に出演し、その後、ほかのメディアにも何回か取り上げられたため、仙台幸子がより広く知られるようになった。グッズの購入者は商売人にとどまらずに、個人の注文も増え、しかも「ご利益があった」との情報も多く寄せられてきた。

第3期：2004年（平成16）5月から2005年（平成17）12月までは、仙台幸子の最盛期とも言える。2004年（平成16）5月に、大阪よみうりテレビの「ほんわかテレビ」で紹介されて以降、関西地方でも人気を集め、関西地方からのグッズ注文が殺到した。新聞各紙においても、仙台幸子の紹介記事が見られる。

きょうは「こどもの日」。「小僧の神様」ならぬ「子どもの神様」が今、仙台で静かなブームを呼んでいる。『河北新報』2004年5月5日号

「立ち寄った店は繁盛する」という伝説から、仙台で商売の神様とあがめられるキャラクター仙台四郎。その向こうをはる新キャラが今年、にわかにならびに広がっている。人形を抱く幼児はその名も「仙台幸子」（中略）昨年初め、七十年ほど前の写真を元に「冗談半

分で」Tシャツや携帯ストラップを作った。今では携帯ストラップは数百個を生産しても即座に完売する勢いだ。『日本経済新聞』2004年5月17日号

また翌年5月3日の『朝日新聞』においては、

「仙台幸子（さちこ）」という名のキャラクターグッズが、飛ぶように売れている。仙台市内だけでなく、東京・渋谷の東急ハンズなどでも携帯ストラップやポスターを扱っていたが、どこも品切れ状態だ

との記述があり、仙台幸子の人気ぶりを示している。

その後のおよそ一年半の間、仙台幸子は次々と地方と全国のメディアで報道された。一時期パニック状態にも陥ったほど、全国からのグッズ注文が峰ハチヨのところに途切れることなく送られた。また、ネット通販だけではなく、この時期京都の「喫茶みわく」、仙台の「ミッキーズトイ」、北海道旭川の「焼肉専科おかちゃん」、東京の「温故和新」を始め、全国において18店舗が仙台幸子グッズの取扱いを開始した（峰、2006：132）。どの店もグッズを仕込んだら、すぐに売れ切れるほどの人気ぶりであった。県外から仙台へグッズを求めに来た人も急増したのである。

第4期：2006年（平成18）には、メディアの報道が落ち着いていく傾向が見られる。仙台幸子のマスコミ登場数は2005年（平成17）をピークに、その後段々減少した。一方、仙台幸子グッズを取り扱った店も減少している。この時期は、仙台幸子とセンダイガールズプロレスリング、ヤマカノ醸造などの企業とのコラボレーションが目立つようになった。

第5期：2010年（平成22）以降は、仙台幸子はあまりメディアに取り上げられなくなった。また、仙台幸子オフィシャルサイトによると、現在グッズ取扱い店はなお仙台の「こけしのしまぬき」、京都の「喫茶みわく」などの数店舗があり安定している。

4、グッズがもたらすご利益体験談

2004年5月5日の『河北新報』では、「グッズの購入者からは『競馬で当たった』『パチンコで勝った』『店のお客が増えた』なんていう御利益に感謝する声も寄せられる」との記述が見られた。実は仙台幸子グッズ購入者から寄せられてきたご利益情報は、仙台幸子オフィシャルサイトやグッズ取扱店のホームページに多く掲載されている。これらのご利

益情報にはご利益を得たことに感謝の意を表す例がほとんどである。例えば、

友人から幸子様のお写真をいただき、父の会社に飾ったところ、それまで閑散期の長かった会社がコンスタントに仕事が入るようになり、社員3人で忙しく過ごしています。

おかげで仙台のアパートに帰る暇もありません。(石巻在住 S)

春にTシャツなど、幸子グッズを数点購入致しました。それ以来私に収入がどんどん入ってきております。借金返済にあてたりしてまだまだ、余るお金はないのですが、色々電化製品を購入したり旅行に出たり、明らかに仙台幸子効果だと思います。

お礼を言わねばならないと思いが連絡を差上げた次第です。(M 県在住 M)

というように、仙台幸子グッズを手にしてからご利益が現れたと購入者が語ったものが多い。その反面、

実は前に峰ちゃんに店にともらったポストカードサイズの仙台サチコありましたよね！あれを店のお客さんがどうしてももって行ってしまってから自分にとんでもない事ばかり起きてもしかしてあれは他人に譲ってはいけないもの？ だったりして...少々恐くなりました。お客さんが持ち帰った日に40度近い熱が出て初めて店を二日休んだり、つい最近夜に仕事をしているとどうもやる気が起きなくて何故なのかなと思っているうちに、胆のうのあたりに激痛がはしり苦しくて苦しくて家に帰って即寝たら直ってしまいなんだかよくわからないのですが、御払いしてもらったほうがいいのか？全く不思議なことばかり。(塩釜在住 A)

幸子Tシャツ着て店に出ると大口注文が入るんです。1回10万の撮影も入りました。忙しくて着替えるひまもなく3日間Tシャツ着てました。汗でびしょりになったので洗濯しました。洗濯してる間はパツパツと店がヒマになるんです。オレこういうのあんまし信じない人間なんです、これにはちょっとビックリです。こないだお客さんにあげてしまった幸子さんポストカードは返してもらいました。おかげさまで具合も良くなりました。(塩釜在住 A)

というように仙台幸子グッズを手放したら集客効果が消え、しかも本人が急病にまでなってしまった例も見られた。

以下ではこれらのご利益情報、特に仙台幸子オフィシャルサイトに掲載する部分に焦点を当て、ご利益情報数の経年変化、購入者の地域分布、ご利益の内容と伝播方式を分析する。

4-1、ご利益情報数の経年変化

まず現時点で仙台幸子オフィシャルサイトやグッズ取扱店のホームページに掲載されているご利益情報数の経年変化を見よう。仙台幸子オフィシャルサイト、販売店「喫茶みわく」（京都）と「ミッキーズトイ」（仙台）のホームページに掲載されているご利益情報数を表 4-4-1 にまとめた。

表 4-4-1 仙台幸子のご利益情報数¹

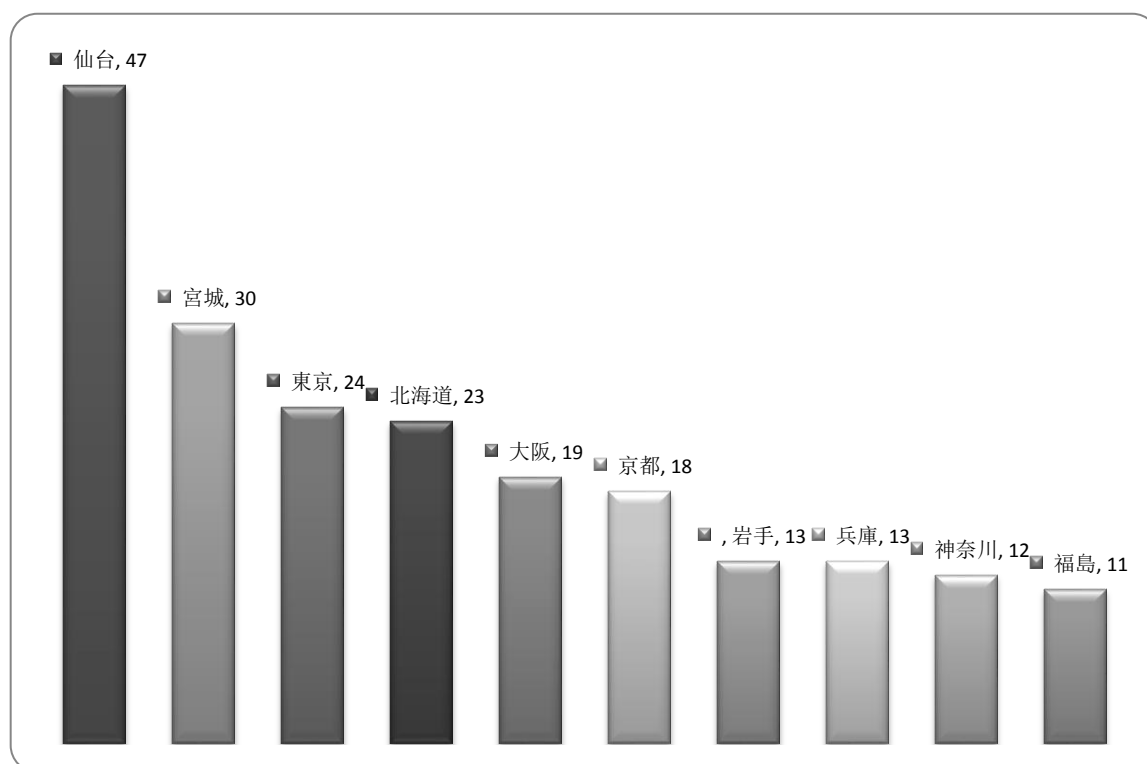
件数 \ 年代	～2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	合計
オフィシャルサイト	219	20	38	43	28	6	—	354
「喫茶みわく」	12	11	2	5	—	2	1	33
「ミッキーズトイ」	102	37	22	18	5	—	—	184

ここでは、「喫茶みわく」のホームページに掲載されたご利益情報数は少ないため、数字変化の傾向は読みにくいですが、2006年（平成18）以降ご利益情報数は全体的に減少していくことが分かる。仙台幸子オフィシャルサイトと「ミッキーズトイ」のほうは、2005年（平成17）に比べると、2006年（平成18）からご利益情報数が激減したことが明らかである。2006年（平成18）からメディアの報道が落ち着いていった事情に一致している。

4-2、購入者の地域分布

次に、仙台幸子オフィシャルサイトに掲載されているご利益情報を通し、購入者の地域分布を分析しよう。2003年（平成15）から2010年（平成22）までの354件の内、居住地を記載したのは309件で、残りの45件は無記入であった。この309件のご利益情報を分析した結果、購入者がほぼ日本全国に行き渡ることが分かった。図 4-4-1 と図 4-4-2 が

示すように、東北地方の購入者が4割近くを占めている中、仙台を含む宮城の購入者が一番多く、全体の四分の一である。東北地方を除けば、近畿地方（大阪、京都、兵庫）と関東地方（東京、神奈川）の件数がその後を次ぎ、北海道はその後が続く。要するに、仙台幸子の主な流行圏は宮城を中心とする東北地方、大阪、京都を中心とする近畿地方、東京、神奈川を中心とする関東地方と北海道の4つが考えられる。これらの地域はいずれも早い時期から当地の店が仙台幸子グッズを取り扱い始め、メディアの報道が相まって、仙台幸子の流行に拍車をかけたことが考えられる。



* 「宮城」は「仙台」を除く

図 4-4-1 購入者の地域分布① (前10位)

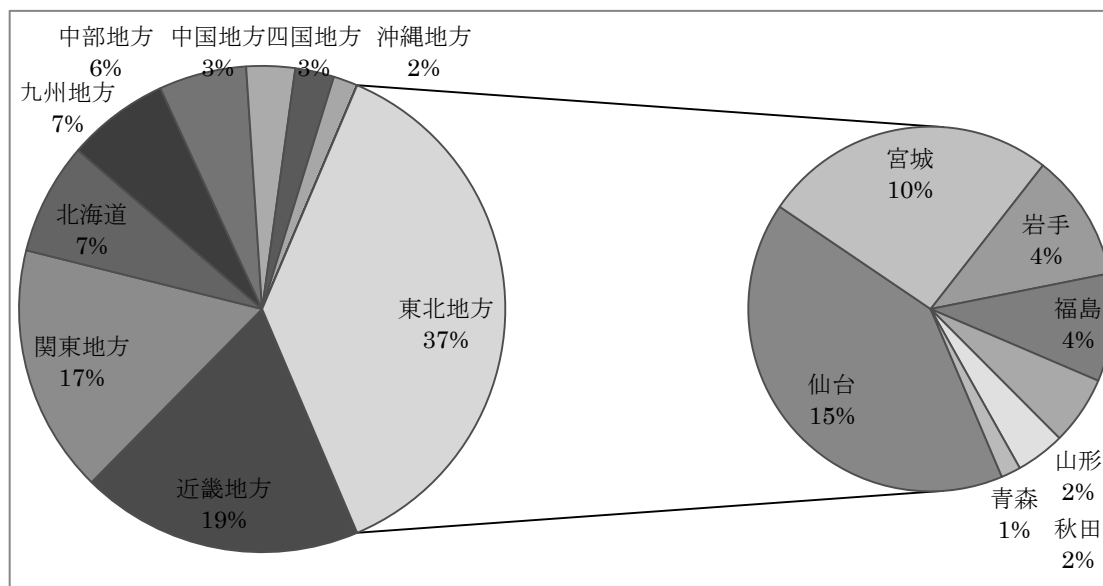


図 4-4-2 購入者の地域分布②

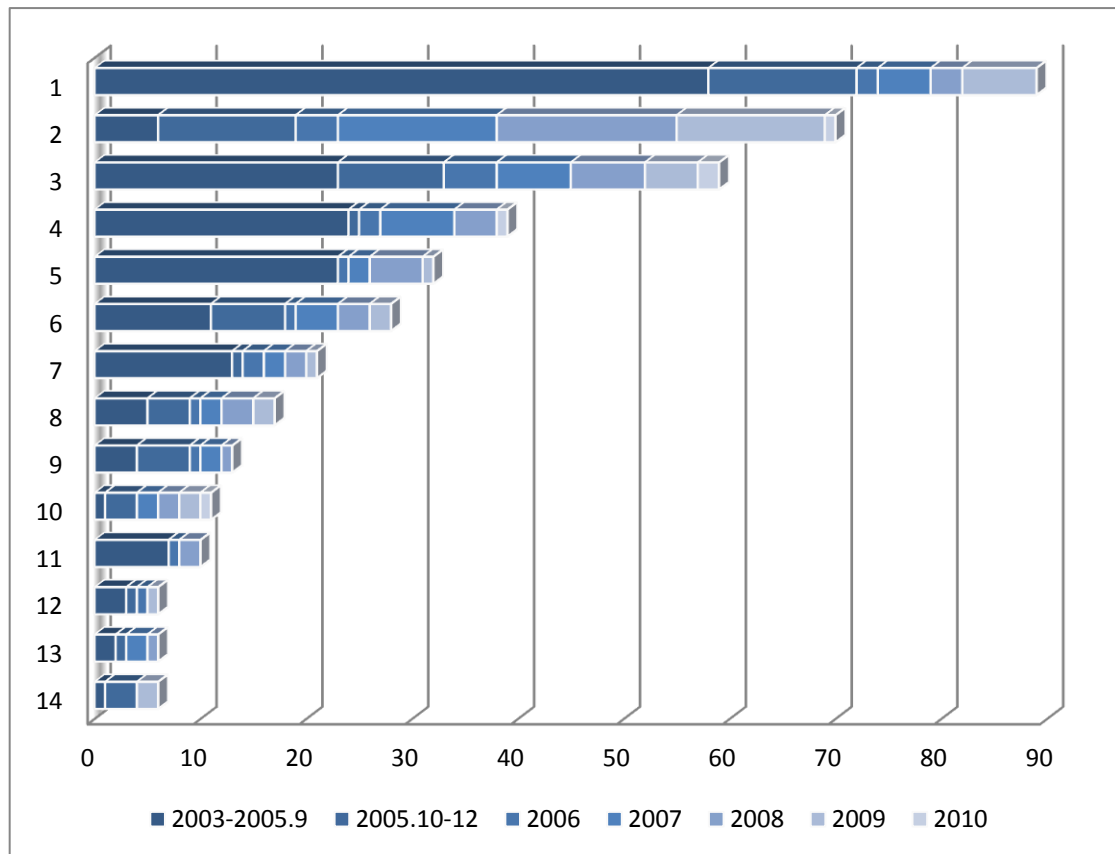
4-3、ご利益の内容

それでは、仙台幸子には一体どのようなご利益があるのだろうか。上述の 354 件のご利益情報を通し、分析を試みた。一件のご利益情報の中には複数のご利益に関連する事例があるため²、総数は 354 を超えている。図 4-4-3 には 14 のご利益項目を設定したが、どれに入るか判断しにくい場合は著者が判断した。

まず、全体的には「仕事・商売」のご利益が一番多く、特に「売上げが伸びた」とか「仕事が増えた」などの話はたくさん寄せられていた。「ギャンブル」と「懸賞当選」の件数はその後に次ぎ、「人間関係や人脈」は 4 番目に多い。要するに、仙台幸子の主なご利益は「仕事運」、「金運」、「人運」をもたらすものであると言える。

また図が示しているように、「仕事・商売」のご利益情報が占める割合はだんだんと減少し、逆に「ギャンブル」の伸びが顕著であった。峰ハチヨも「商売繁盛のキャラクターとして発信していたはずが、なぜかギャンブルや人間関係などの予想だにできなかった内容が増えていった」（峰 2006 : 78）と述べている。つまり、仙台幸子は最初の単なる商売繁盛の神から万能の神になってきたのである。ご利益情報を分析すれば、幸子本人のエピソードを連想して、自分の体験に結びつける傾向があると考えられる。即ち、幸子本人はくじによく当たり、人を寄せることからギャンブルや人間関係の話に広がっていったことが

推測できる。鈴木が紹介する「首無地蔵」の事例と比較すると、『身体的不調』の解消という機能神的信仰から始まり、〈おかげ確信〉後、『身体的不調』の祈りのみならず、それ以外の祈りにも徐々に拡大し、多様化する傾向のあることを推測させる」（鈴木 1995：188）と同様に、仙台幸子も商売繁盛機能神から万能の神に変化する傾向が見られた。



- | | | |
|-----------|------------|----------|
| 1 仕事・商売 | 2 ギャンブル | 3 懸賞当選 |
| 4 人間関係や人脈 | 5 金銭・収入 | 6 恋愛・婚姻 |
| 7 心願成就 | 8 合格・勝利 | 9 物をもらった |
| 10 出産・安産 | 11 物が見つかった | 12 家族関係 |
| 13 体調・健康 | 14 災難除け | |

図 4-4-3 仙台幸子のご利益 (全 452 件) ³

4-4、伝播方式

最後に仙台幸子を何で知ったのかを 354 件ご利益情報を通して考察を試みる。仙台幸子

を知った契機を明確に記した事例は 47 件がある。テレビ、新聞、ラジオ、雑誌といったマスコミによるものが半分以上、サイトによるものも含めれば、7 割に達している。それに対し口コミによるものは 3 割に留まっている。したがって、仙台幸子の伝播には口コミよりマスコミのほうがより影響力を持っていることは明らかである。

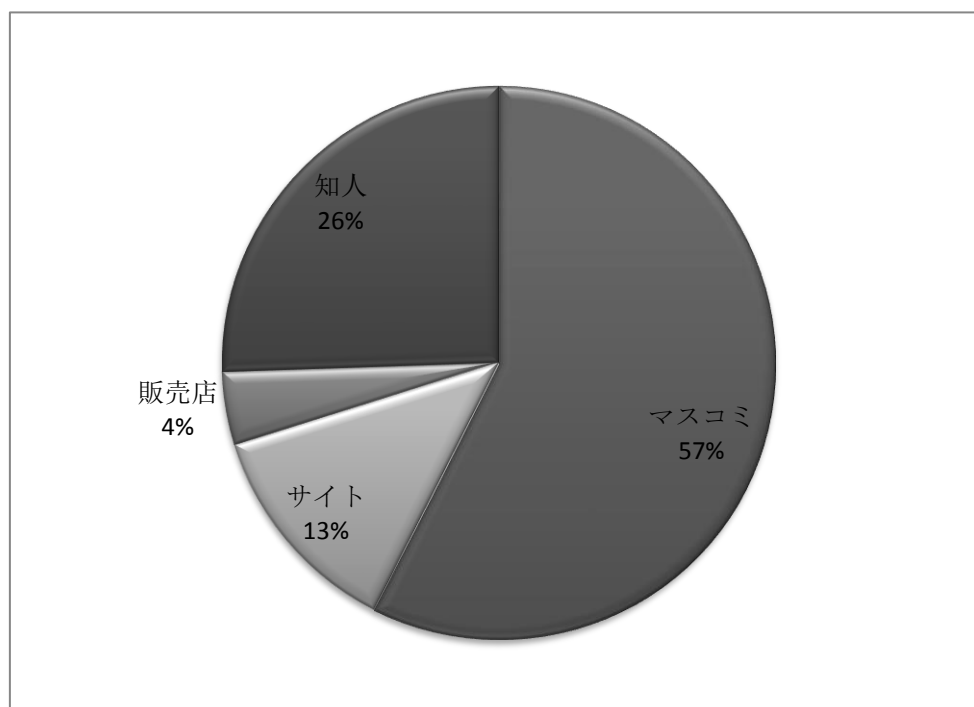


図 4-4-2 仙台幸子を知った契機 (全 47 件)

そして、前述した購入者の地域分布と関連して考えれば、マスコミは購入者の地域分布に影響を及ぼしたと思われる。流行神の伝播が地域的に制約されることは流行神の特徴の一つとして宮田に指摘され (宮田 1972b : 584)、鈴木も具体的な事例を通し、流行神の地域性を実証した。例えば、広島県東部府中市にある首無地蔵の場合、信仰者の体験談をまとめた『礼賛記』からその信仰圏は「広島県居住者が全体の 57.8%を占め、その内の 89.6% (全体の 51.8%) が旧備後国で占められ」(鈴木 1982 : 405)、また岡山県東南部にある横樋観音の場合、参拝ノートから「参拝者の居住範囲は岡山県内だけで 88.2%を、さらにいえば観音像の鎮座している岡山市内だけで 59.7%を占めている」(鈴木 1992b : 148) と鈴木によって報告されている。しかし、これらの数字に比べれば、仙台幸子の場

合は仙台の購入者が 15%、仙台を含め宮城の購入者が 25%を占め、地元が占める割合は比較的に低い。要するに、21 世紀の現代では口コミに代わり、マスコミとウェブサイトが主な伝播方式になったと考えられ、仙台幸子は流行神としてその地域性が保たれているにしても、弱まってきたと考えられる。

5、仙台幸子と仙台四郎の比較

仙台幸子と仙台四郎は緊密に関わっている。仙台幸子は仙台四郎と同じように、客寄せのエピソードを持っているため仙台四郎に因んで命名され、メディアでも屢々『仙台四郎』の現代版（『河北新報』、2009 年 12 月 26 日号）、「元祖の仙台四郎」（『河北新報』、2005 年 12 月 01 日号）、「四郎の“妹分”」（『読売新聞』、2010 年 7 月 9 日号）などの言葉で仙台幸子と仙台四郎との関係を表している。ここでは、仙台幸子は仙台四郎の性格及び発展過程において両者の相似点と相違点を考察する。

仙台幸子と比べれば、両者とも客寄せのエピソードを持っているほか、写真を使ってグッズ化することやマスコミの報道により広く知られるようになったことなどの共通点もあれば、表 4-5-1 でまとめたような相違点も見られた。仙台幸子が 10 年くらいの間に、全国的に名を広め、仙台の地元グッズとして定着したことは、仙台四郎の 80、90 年に及ぶ発展過程を凝縮してきたのだと言える。そのはやりすたりの激しさはインターネットから発信した流行神の特徴と言えるだろう。それに、宗教施設の関与においては、三瀧山不動院は「仙台四郎安置の寺」として参詣地となっているのに対して、仙台幸子は鎮座地がないため、参詣地とされる場所がないことも大きな違いである。

表 4-5-1 仙台四郎と仙台幸子の比較

	仙台四郎	仙台幸子
特徴	知的障害者	普通の主婦
身元	芳賀四郎	非公開
写真の主体	大人	子供
写真の出まわり	死後	存命中
プロデューサー	千葉写真館	娘の峰ハチヨ
エピソードの発信	口コミ	インターネット
定着するまで	80、90年くらい	10年くらい
宗教施設の関与	三瀧山不動院	なし
自発祭祀	あり	なし
ご利益	主に商売繁盛	商売繁盛から全般

筆者作表

考察

以上、新しい招福キャラクター仙台幸子の登場と展開過程を分析し、仙台幸子のご利益内容などをご利益体験談を通して考察したのである。仙台四郎が地元の招福キャラクターとして定着しているのに対して、仙台幸子は爆発的に人気を集めた後、急速に購入者が減ってしまい、今は仙台幸子グッズはほとんど見られないほどブームが去ってしまった。その「はやりすたり」の過程が明らかである。このインターネットから発信した仙台幸子は、従来流行神とされてきた神仏と比較すれば、新たな特徴が見られる。

①出現形態。宮田は寺院の境内仏に特別な靈験を付与して、流行神仏となった例の他、一般に流行神仏の出現の仕方には、土中出現型、空中飛来型と海上漂着型の3タイプがある(宮田 1972a : 31)と述べたが、仙台幸子の場合はそのいずれにも属せず、インターネットというバーチャルな世界から始まった。これはまさに、インターネットが普及している現代ならではの出現過程と言える。

②宗教者の関与。流行神が生ずる場合、必ず神や仏の新しい靈験を創作する宗教者が介在していると宮田は論じた（宮田 1972a : 28）。この点、鈴木が取り上げた首無地蔵や横樋観音の事例においても、民間宗教者の関与が確認された（鈴木 1992a : 45）。それに対して、仙台幸子の場合は全く宗教者が関与せず、仙台幸子の情報を世に知らせたのは俗人の実の娘であった。娘の峰ハチヨは従来の民間宗教者と同じように、仙台幸子の「靈験」を知らしめる役割を果たしてきた。

③信仰者の関わり方。これまで指摘されてきた流行神の事例からは、信仰者と神仏との関わり方はどれも「参詣」を通じてなされていた。それゆえ、参詣者の多寡からも流行りの度合いを把握することが可能であった。この点、仙台幸子の場合はその鎮座地がないため、「参詣」のような行動が確認できなかった。神仏に対して人が関わる現実空間がない点は、従来の流行神には見られない点である。

仙台幸子が流行していった過程において、インターネットは重要な役割を果たしていた。インターネットを通じることで、人と神仏との関わり方に変化が生じ、「参詣」を通じた直接接点が不要となったのである。仙台幸子の流行からは、現代人が抱えている「神仏の所に行かなくても、ご利益があれば」という現世利益志向を窺うことができる。次章からは、インターネットと関わる事例を取り上げ、バーチャル空間における信仰のあり方を考察していきたい。

¹ 仙台幸子オフィシャルサイト上のご利益情報は 2003 年～2005 年 9 月、2005 年 10 月から～12 月、2006 年、2007 年、2008 年、2009 年、2010 年の 7 区分にされている。2003 年から 2005 年までのご利益情報はホームページ上年代の区分がされていないため、各年の件数が把握できない。「喫茶みわく」は、2005 年 8 月からご利益情報を掲載し始めた。「ミッキーズトイ」は 2005 年からであった。

² 例えば、「仙台幸子のグッズを手にしたら、就職もできて、家族関係もよくなった」の場合は、ご利益は「仕事関係」と「家族関係」の 2 件と計算する。また「仙台幸子を手にしたら、私は就職ができたんだ。グッズを妹にあげたら、妹も就職ができた」場合は、「仕事関係」の 1 件と計算する。

³ 本図はホームページ上の年代区分に従い、2003 年～2005 年 9 月、2005 年 10 月から～12 月、2006 年、2007 年、2008 年、2009 年、2010 年の 7 区分にする。

第五章 インターネットから流行り出す神——「願いの宮」 を事例に

本章においては、インターネットというヴァーチャルな領域に現れた新しい動向に注目しよう。1990年代から、インターネットの普及は宗教の分野に大きな影響を与えた。例えば、ヴァーチャル参拝やインターネットによる宗教情報の発信などが実現されることにより、新たな参拝方法と布教手段が登場した。本章では、インターネット上で積極的に発信し、参拝者を急増させた金光教桃山教会「願いの宮」に焦点を当て、それがいかに流行り出したのかを考察する。

1、「願いの宮」とは

1-1、金光教の概略

金光教桃山教会「願いの宮」を紹介するに当たり、まず金光教の概略を簡潔に説明しておこう。

金光教は1859年（安政6）備中国浅口郡大谷村に成立した教派神道系の新宗教である。教祖の金光大神（1814年～1883年）により立教され、天地金乃神を祭神とする。金光大神は幼名を香取源七といい、後に川手文治郎、赤沢文治、金光大陣と改名した。備中国占見村（現、岡山県金光町）の農家、香取家の次男として生まれ、12歳で隣村大谷村（同町）の親戚川手家の養子となった。23歳の年、義弟（鶴太郎）と養父（糸治郎）を亡くし、家督を継ぎ、結婚した。後に、三度の自宅建築のたびに家族や飼牛の死に出会い、村人は金神の祟りと恐れた。42歳の年、病を患い、重体に陥った。親類が集い、祈祷を行ったところ、義弟（古川治郎）が神がかり、金神に無礼があったとのお告げを下った。ひたすらおわびをした後やがて病気が全快した。2年後、金神を信仰していた実弟（香取繁右衛門、香取金光教教祖）は神がかり、実弟の口を通じてお告げを受けていたが、まもなく自らも

神意が分かるようになった。1859年（安政6）10月21日、お告げにより農業をやめて「取次」に専念するようになった。金光教では、このお告げを「立教神伝」とし、この日を金光教の立教とする。金光教は現在、1991年（平成3）に就任した金光平輝五代目教主の下、創設から150年を経過した。本部は岡山県浅口市金光町にあり、約1500の教会が日本全国に行き渡っている。金光教の本部および全国の教会には「広前」¹があり、そこで参拝者に対する「取次」が行われる。

「取次」とは金光教の特徴とされるもので、「人の願いを神に、神の思いを人に伝え、神、人共に、あいよかけよで助かっていく世界を顕現するための働きをいう」（金光教本部教庁1983：（付録）23）。つまり、取次者は人の悩みや願いを神に伝え、神からの神意を人に伝えることで、人と神との助かりを生み出し、「あいよかけよ」という調和関係を実現する。

「あいよかけよ」とは、「相より相かかわるの意。金光大神はこの語をもって、神と人のかかわり合いを示した。人は神の願いを受け、真実な生き方を求め立ち行くことになり、神もまた、人の真実な生き方により、その働きを十全に人の世に現すことができ、神みずからも助かるということ、この語は表現する。人間相互の関係に用いられる場合もある」（金光教本部教庁1983：（付録）12）。金光教においては、「取次」は難儀に苦しむ人を助け、救済を求める方法でもあれば、布教の根源的な形態でもある。

金光教の布教活動については、創設後、1867年（慶応3）金光大神は白川家に入門して神職の資格をとり、布教活動に正統性を付与した。1868年（明治元）までに、信者による「取次」は備前、備中、備後を中心に行われたが、それからの20年間、山口、大阪、京都まで教勢が伸び、更に九州、四国、東京、北海道に布教が始まった。また後に、国内布教の推進につれて、台湾、朝鮮、満州、北米にも布教を開始した。ほかに、教師の養成施設、布教機関や財務機関もでき、1921年（大正10）には境内が拡張され大教会所が完成した。明治の始めから大正にかけて、金光教が著しく成長していることを示した。昭和初期に入り、金光教の教勢はしだいに固定化した。戦後、1951年（昭和26）、金光教はラジオ放送を開始し、布教の新たな方法として取り入れた。1914年（大正3）創刊した『金光教報』のほかに、1983年（昭和58）に『金光教経典』、1987年（昭和62）に金光教教団

の新聞誌である『金光新聞』も刊行された。こうして、音声、映像や文書など様々なメディアが布教に活用された。

表 5-1-1 金光教の教勢統計

年度	宗教教団			宗教法人	教師（外国人教師数）			信者
	教会	布教所	合計		男	女	合計	
1989年	1,652	22	1,674	1,518	2,169	2,183	4352	448,393
1990年	1,653	22	1,675	1,520	2,168	2,180	4348	445,657
1991年	1,649	22	1,671	1,516	2,162	2,184	4346	442,584
1992年	1,647	21	1,668	1,517	2,149	2,178	4327	436,916
1993年	1,647	22	1,669	1,517	2,131 (1)	2,175	4,306 (1)	436,805
1994年	1,646	22	1,668	1,518	2,128 (1)	2,180	4,308 (1)	433,340
1995年	1,646	20	1,673	1,518	2,103 (1)	2,175	4,278 (1)	430,189
1996年	1,646	16	1,662	1,518	2,093 (1)	2,174	4,267 (1)	430,189
1997年	1,642	15	1,657	1,515	2,090 (2)	2,173	4,263 (2)	430,189
1998年	1,627	15	1,642	1,505	2,085 (2)	2,170	4,255 (2)	430,189
1999年	1,607	13	1,620	1,489	2,076 (3)	2,167	4,243 (3)	430,190
2000年	1,595	13	1,608	1,481	2,062 (4)	2,150	4,212 (4)	430,190
2001年	1,586	11	1,597	1,475	2,046 (4)	2,137	4,183 (4)	430,190
2002年	1,576	13	1,589	1,469	2,034 (4)	2,112	4,146 (4)	430,190
2003年	1,567	12	1,579	1,462	2,030 (4)	2,108	4,138 (4)	430,190
2004年	1,563	10	1,573	1,459	2,027 (4)	2,080 (1)	4,107 (5)	430,190
2005年	1,559	8	1,567	1,456	2,012 (4)	2,064 (1)	4,075 (5)	430,190
2006年	1,555	8	1,563	1,483	1,998 (3)	2,030 (1)	4,028 (4)	430,188
2007年	1,548	9	1,557	1,445	1,991 (3)	2,021 (1)	4,012 (4)	430,188
2008年	1,544	9	1,553	1,444	1,985 (3)	2,003 (1)	3,988 (4)	430,145
2009年	1,538	9	1,547	1,437	1,952 (3)	1,987	3,939 (3)	430,105
2010年	1,535	8	1,543	1,435	1,959 (3)	1,974	3,933 (3)	430,090
2011年	1,533	8	1,541	1,432	1,938 (3)	1,960	3,898 (3)	430,055

文化庁（編）『宗教年鑑』（平成元年～平成 23 年）より筆者作成

しかし、布教方法の発達はずしも教勢の拡大をもたらしたわけではなかった。『宗教年鑑』の統計によると、戦後から金光教の信者数が減少し続け、1949年（昭和 24）の信者数は 693,314 人であったが、1961年（昭和 36）から 60 万人を割り、1975年（昭和 50）から 50 万人を下回った。更に、近年の金光教の宗教教団、宗教法人、教師と信者数を表 5-1-1 にまとめたが、全体的に教勢が低迷している実態が読み取れる。これは金光教に限

るものではなく、実際に多くの宗教集団が教勢縮小の問題に直面している。ところが、このような教勢縮小の状況を背景に、逆に参拝者²が増え、インターネットから流行り出した金光教教会がある。次は、金光教桃山教会「願いの宮」を紹介していきたい。

1-2、「願いの宮」の概況

「願いの宮」とは大阪市天王寺区烏ヶ辻にある金光教桃山教会の名称である。現在の広前は2001年（平成13）に新築されたもので、一階は広前会堂で、「取次」を行う場所であり、二階は集会室として行事後の茶会などが行われる。



写真 5-1-1 「願いの宮」の外観



写真 5-1-2 「願いの宮」の看板



図 5-1-1 「願いの宮」周辺地図（「Yahoo!地図」をもとに作成）

現在の宮司桃山きよ志は（本名井上清志、1974年7月5日生まれ）、教会長就任後、地元と教会の繁栄の願いを込め、地名の「桃山」に因んで桃山きよ志と改名した。桃山によると、本人がもともと教会を継ぐ意志がなく、せいぜい就職して定年後金光教教師を務めるだろうと考えていたが、20歳の年の体験をきっかけに、金光教学院入学を志した。「大学受験前夜、泊めてもらった友人宅で、友人が高熱を出した。一晩中介抱をすることになり、その時『目の前でうなされる友人の姿が数多くの救いを求めている人の姿に見え、お前の役は人を助けることだと、神から呼ばれていると感じた』。帰阪後、受験結果の合否を待たずに、金光教学院入学を決心し、一年間教会修行に入った」（「道を切り開く世代」編集委員会 2004：2）。1997年（平成9）金光教の布教資格を得て、1999年（平成11）より七代目として教会を継承した。それ以来、常に「結界」³にて「取次」に専念している。2004年（平成16）桃山は桃山教会を「願いの宮」と命名し、2005年（平成17）「願いの宮」ウェブサイトを立ち上げた。

「願いの宮」では、参拝者が直接参拝に行く場合は、「願いの宮」が用意した「願いごと奉納記入書」（以下は「祈願書」と略す）に記入し、それを宮司に渡す。宮司は結界（写真5-1-3）で参拝者と会話を交わし、神に「取次」をする。ホームページ開設以降、直接参拝

に行けない人でも、インターネットを通じて「取次」をしてもらうことができるようになった。インターネットを通じて祈願する場合は、大きく分けて幸福祈願と特別祈願の2種類ある。幸福祈願とはメールで祈願することで、つまりホームページの記入欄に願い事を記入し、宮司にメールを送れば祈願が完成する。桃山によると、2010年（平成22）6月から2012年（平成24）5月末の24ヶ月には、全部で9147件の祈願メールが届いている。1日に2、3件と極端に少ない時があれば、急に50件ほど来る時もあり、平均的に毎日10数件であるという⁴。特別祈願とはまず祈願者は祈願用紙をホームページからダウンロードし、それを記入して「願いの宮」に郵送し、宮司はそれを神殿に奉納し特別集中祈願する。つまり、手紙で祈願することになる。写真5-1-4は祈願者から届いた祈願手紙の一部である。要するに、「願いの宮」に行けない場合は、メールと手紙を通して、「願いの宮」に祈願することが可能になっている。2005年（平成17）インターネットで発信して以来年200人以上、多い年には500人の参拝者が訪れる。桃山によると、延べ3000人の新規参拝者が増えたという。



写真 5-1-3 「結界」



写真 5-1-4 特別祈願の手紙神職は桃山きよ志

インターネットを通じて「取次」をする事例はすでに2002年（平成14）に川端亮・兼子一により報告された。当時事例として取り上げられたのは金光教尼崎教会（兵庫県尼崎市）であった。尼崎教会の教師津田昇平は1999年（平成11）に「若先生の箱庭—心の安らぎを求めて—」⁵というホームページを開設し、その中に〈相談室〉と〈お取次〉のコーナーを設定することで、インターネットを通じて相談を受けたり、「取次」を行ったりするようになった。その利用状況は以下の通りである。

今までに〈相談室〉で受けた相談者はおよそ300人ほど、〈お取次〉は400～500人ぐらいという。2000年始めには、〈相談室〉と〈お取次〉では7対3ぐらいの割合で相談が多かったが、2001年3月頃に半々となり、現在では3対7と〈お取次〉が多くなっている。そして、メールでの取次から教会へ参拝し、お結界での取次を受けたり、毎日天地金乃神様に祈りながら生活する者、これらを信者として数えるならば、2001年夏の神様のお知らせ以降およそ30人ぐらい増え、1999年9月のホームページ開設以来、合計50人（2002年6月現在）を越えるにいたっている。さらに、家でご祈念するぐらいの人は、100人を超えていると津田は述べている（川端亮・兼子一 2002：167）（括弧内原文）。

当時より 10 年経った現在においても、インターネットを通じて「取次」をする事例はほかに見られておらず、また、桃山もインターネットを通じて「取次」をする教会があまりないと述べる。その意味で、尼崎教会の試みは先端的である。当時インターネットの普及がまだ十分でない状況もあるが、上の数字から、尼崎教会のホームページの利用者、及びホームページを通じて「取次」を受ける人は桃山教会に比べれば少なく、参拝者を寄せ集める効果が限られていることが考えられる。

2、「願いの宮」の展開過程

ここでは、「願いの宮」はいかに成立し、現在に至るのかを概観しておきたい。1881 年（明治 14）頃、桃山教会の「信心の祖」とされる井上げんは夫の三代目井上又兵衛（井上家当主は代々「又兵衛」の名を継ぐしきたりであった）の病気平癒を願い、難波村の近藤与三郎（藤守）の広前に参拝したことを皮切りに、井上家は代々金光教教師を務め、教会成立から現在に至るまで百年近くの歴史を持っている。現役の宮司桃山きよ志は七代目の教会長であり、血統でいうと五代目の子孫である。

表 5-2-1 桃山教会歴代教会長

信心の祖	井上げん（1836.4.3～1921.8.23） 1881 年（明治 14）頃、難波村界限でより糸製造業を営んでいた三代目井上又兵衛の妻で、三代又兵衛の胃腸病の平癒を願い、難波村の近藤与三郎（藤守）の広前に参拝。
初代教会長	井上定次郎（1889.8.20～1964.8.20） 四代井上又兵衛の子。三代井上又兵衛とげんの孫。1913 年（大正 2）金光教教師拝命。1919 年（大正 8）大阪・難波教会で修行した四代井上又兵衛と定次郎により桃山駅前に桃山教会が開教。1924 年（大正 13）より、父・又兵衛に教会長を譲り、教団のご用にあたる。
二代教会長	四代井上又兵衛（1866.10.5～1944.5.31） 1892 年（明治 25）、28 歳で難波教会に入り、近藤与三郎（藤守）帰幽後も手代わり

	として晩年まで難波の結界奉仕にあたる。1924年（大正13）より、二代教会長となる。
三代教会長	井上定次郎（1889.8.20～1964.8.20） 1942年（昭和17）、再び三代教会長に。
四代教会長	井上恵一（1918.10.13～1966.10.18） 井上定次郎の子。1944年（昭和19）金光教教師拝命。わずか2年の在任期間であった。
五代教会長	井上禮子（1924.2.14～2001.7.27） 井上恵一の妻。1954年（昭和29）金光教教師拝命。夫・恵一の帰幽にあたり、五代教会長に。
六代教会長	井上嘉廣（1947.7.5～） 井上恵一と禮子の子。1968年（昭和43）金光教教師拝命。1999年（平成11）、開教80年記念祭を機に教会長を息子・清志に譲る。同時に、布教組織「桃下会（とうかかい）」初代会長に就任し、以来、主として結界奉仕以外のご用にあたる。
七代教会長	井上清志（1974.7.5～） 井上嘉廣の子。1997年（平成9）金光教教師拝命。1999年（平成11）七代教会長に就任。

（「道を切り開く世代」編集委員会 2004：16）より筆者作成

各時期の特徴により、「願いの宮」の発展過程を戦前までの繁栄期、戦後の停滞期、桃山就任後の復興期の三つに分けて考察する。

2-1、戦前までの繁栄期

開教から戦前までは、桃山教会の繁栄期とする。戦前の桃山教会は桃山駅⁶前（現 JR 桃谷駅前）で開かれ、1929年（昭和4）およそ六百メートル離れる現在地に移転した。当時の風景（写真 5-2-1）について桃山はこう語っている。

戦前の桃山教会というのは、敷地がこの駐車場の前（道ぎりぎりのところ）までで、二階建てで、銅板の屋根が葺いてあって、信奉者数も千人を超え、大祭には道に出店が並んだと言われています（『道を切り開く世代』編集委員会 2004：21）。

また、桃山によると、戦前桃山教会に勤める神職は多い時に 11 人にもいたということで、当時よほど繁栄していたことが窺える。



写真 5-2-1 戦前の風景（『道を切り開く世代』より）



写真 5-2-2 戦後の様子（『道を切り開く世代』より）

2-2、戦後の停滞期

戦後の再建から桃山が教会長に就任するまでは教会の停滞期とする。戦後、桃山教会は再び造営され、写真 5-2-2 に左横は玄関、手前は集会室で、その上に大きな金光教の看板が掲げられている。2001 年（平成 13）現在の教会が新築されるまで約 60 年間使用されてきた。その間に教会は再建されたが、戦前の繁栄を取り戻せず、1999 年（平成 11）桃山が教会長に就任した頃の状況については、「一人も来ない日が続いた」と語った。また、当時教会及び金光教の衰退を痛感した記述もある。

それ（戦前の桃山教会）が戦争で焼けたんです。教会の建物は焼けて、又兵衛は疎開先の金光で寿命で亡くなり、信者さんの家も焼けて、全国へ散り散りになってるでしょ（「道を切り開く世代」編集委員会 2004：21）。

思っているのは、うちの教会が大きくなったらええとかそういうことじゃなくて、金光教全体が大きくなってほしい。そのためには、一個一個の教会がご比礼を頂く以外にないと思いつている。衰退していく現状を見た時、今やらないといつやるねんというのがありますね（「道を切り開く世代」編集委員会 2004：18）。

このように桃山は自分が「道を切り開く世代」と自覚しながら、教会の復興を目指し、いろいろな試行錯誤を行い始めた。

2-3、桃山就任後の復興期

1999 年（平成 11）桃山の教会長就任を皮切りに、桃山教会は復興期を迎えた。1999 年（平成 11）から 2004 年（平成 16）までは第一期で、2005 年（平成 17）からは第二期とする。

第一期においては、桃山は若き教会長として注目され、金光教の同人誌『凡愚』第 13 号（2002 年 10 月）及び桃山教会誌『道を切り開く世代』の発行により、金光教内部で影響を広げたと考えられる。またこの時期、参拝者も少しずつ増えてきた。その様子については、桃山はこう述べた。

この二年で約五十人くらいの人が増えて、五月二十五日（平成十五年）の春の大祭も

見知らぬ人が三人参っておられた。で、今日（平成十五年六月五日）までの十日間にまた新しい人が三人参って来ました（「道を切り開く世代」編集委員会 2004：8）

この時期参拝者が増え始めたが、まだ少人数に留まっていることが窺える。

2005年（平成17）から第二期に入り、桃山がインターネットを利用し、桃山教会の情報を発信し始めた。結果としては、2006年（平成18）から年200人以上、多い年には500人の新規参拝者が増えてきた。またそれに伴い、桃山教会は「願いの宮」の名で、悩み相談、祈願成就や巫女体験⁷の場として新聞、雑誌、テレビに取り上げられるようになり、更に広く知られるようになった。

表 5-2-2 主なマスメディア登場記録

年月	マスメディア
2007年1月	船井幸雄グループ月刊誌『Funai★Media』
2007年5月	『朝日中学生ウイークリー』
2007年11月	マキノ出版・美容健康雑誌『ゆほびか』
2009年1月	バイリンガル雑誌『ひらがなタイムズ』
2010年3月	J:COM チャンネル関西エリア番組『8時です!生放送!!』
2010年12月	関西テレビ『よ〜いドン!』
2011年6月	『朝日新聞』
2011年6月	朝日放送番組『おはよう朝日です』

3、桃山きよ志の取り組み

それでは、教会復興の担い手として、宮司の桃山きよ志はいかなる取り組みをしてきたのか考察する。

桃山きよ志は1999年（平成11）七代教会長に就任して以来の五年間、朝6時から夕方6時まで結界における座行に入った。その時から、いかにして戦前の繁栄を取り戻すか

を考え、動き始めた。桃山の取り組みは大きく分けて二つの部分がある。

一つは、内部での改革。桃山教会を「祈りやすい」且つ「入りやすい」所にするように、それまでの習慣や作法に拘らずに、大胆に改革を進めたのである。例えば、①「願いの宮」という新しい教会名をつける。②祭典の祭詞は教団から配られる文例ではなく、桃山教会独自のものを使う。③参拝者のニーズに応じ、柔軟に祭祀を行う。例としては、3年前から執り行い始めたペット祈願祭が挙げられる。④巫女体験や雅楽教室などの項目も積極的に取り入れる。こうして、参拝者と教会との距離を縮ませ、より多くの参拝者を引きつけようと様々な工夫を凝らしたのである。

もう一つは、外部への発信。2005年（平成17）、桃山は携帯電話用のブログを開き、それを見て富山県から一人の参拝者が訪れた。そのことが外部発信の始まりとなった。続いて、桃山はミクシィで、「願いの宮」コミュニティを開設した。現在の会員は800人を超えている。コミュニティ会員の増加にしたがい、現地に訪れる参拝者も急増した。またその後、桃山はインターネットを利用し、ブログとホームページを開いた。2011年（平成23）から、フェイスブックにも加入し、引き続き積極的に発信している。

このような桃山の取り組みにより、就任後参拝者が増え続けてきたのである。特に、インターネットを利用し発信したところ、「願いの宮」はまずインターネットというヴァーチャルな世界から流行り出し、そのまま現実世界にも反映し、現地に急増した参拝者をもたらした。

4、現地とインターネットにおける祈願とおかげ

では、「願いの宮」の参拝者はいかに増え、また何を願い、どういうおかげをもらったかを分析する。ここで区別をするため、現地で祈願する参拝者を「現地祈願者」、ネットを通じて祈願する人は「ネット祈願者」と呼ぶ。現地祈願者が「願いの宮」に訪れる際に記入した祈願書は2006年（平成18）からの6年間分で、合計4079枚（写真5-4-1 祈願書、一枚に複数の名前が記入される場合があるため、延べ4138人）がある⁸。また、ホームページの「おかげの感想板」⁹にネット祈願者がどういうおかげ¹⁰をもらったかというおかげ情報が2006年（平成18）から2011年（平成23）まで合計848件記載されている。本章

では、これらの祈願書とおかげ情報を資料として、対照的に分析を行う。



写真 5-4-1 祈願書



写真 5-4-2 おかげ絵馬¹¹

4-1、現地の場合

①祈願書数の経年変化

まず、祈願書数の経年変化を次頁の図 5-4-1 にまとめた。図 5-4-1 が示すように、2006年（平成 18）から祈願書数が急増し、2008年（平成 20）にピークに達している。その後はだんだんと落ち着き、2011年（平成 23）の祈願書数は再び増えてきた。つまり、2005年（平成 17）桃山がインターネットから発信して以来、現地祈願者の増加が顕著である。2008年（平成 20）ピークに達した後、2年連続の減少を経たが、2011年（平成 23）から再び現れた現地祈願者の増加は、前年度から「願いの宮」がテレビに取り上げられたことの影響があると考えられる。

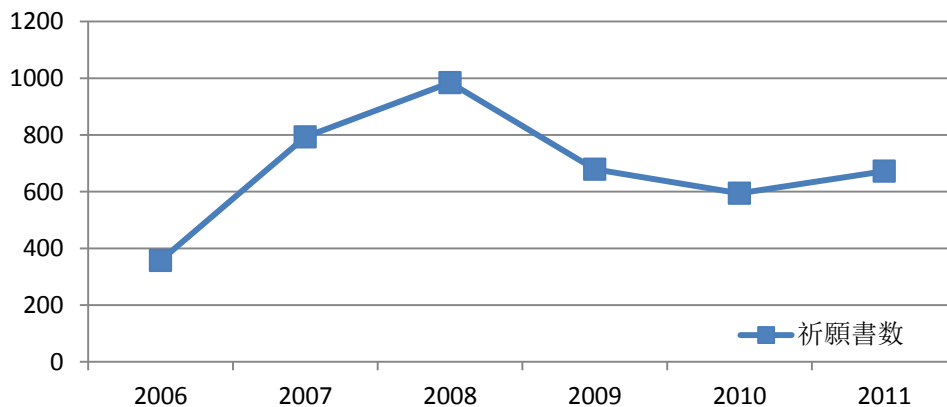


図 5-4-1 祈願書数の推移図（祈願書より筆者作成）

②現地祈願者の男女比と年齢層

続いて、現地祈願者の男女比と年齢層を見よう。「おかげの感想板」に年齢が記載されていないため、祈願書だけを分析することができる。性別は祈願書に書かれていないが、4138人の祈願者の内、名前と祈願内容により女性と判断するのは3217人があり、全体の77.8%を占める。女性祈願者が圧倒的に多いことが「願いの宮」の一つの特徴と言える。

また、年齢が記されたのは4059人あり、最年少は1歳で、最高年齢は90歳である。全体的な平均年齢は38.58歳で、女性と男性の平均年齢はそれぞれ38.73歳と38.05歳である。鈴木により報告された広島県府中市にある首無地蔵の場合は、同じく女性のほうが多いが、信仰者の体験談をまとめた『礼賛記』を分析した上で、信仰者の年齢は「男が20歳から87歳までの分布で平均62.25歳、女が17歳から81歳までで平均57.25歳となっていた」（鈴木 1992a : 17）とあった。首無地蔵の事例と比べれば、比較的に若年層参拝者が中心である特徴が見られる。

さらに、各年の年齢分布は図5-4-2にまとめた。明らかに2011年（平成23）の参拝者の平均年齢は高くなっている。2012年（平成24）5月、筆者が桃山にインタビューする際、桃山は参拝者の増加について「テレビに出た後、年配の方が多く訪れた」と語った。

「願いの宮」の参拝者は若年層を中心としているが、テレビ放送により、年配層に影響を広めたと言える。

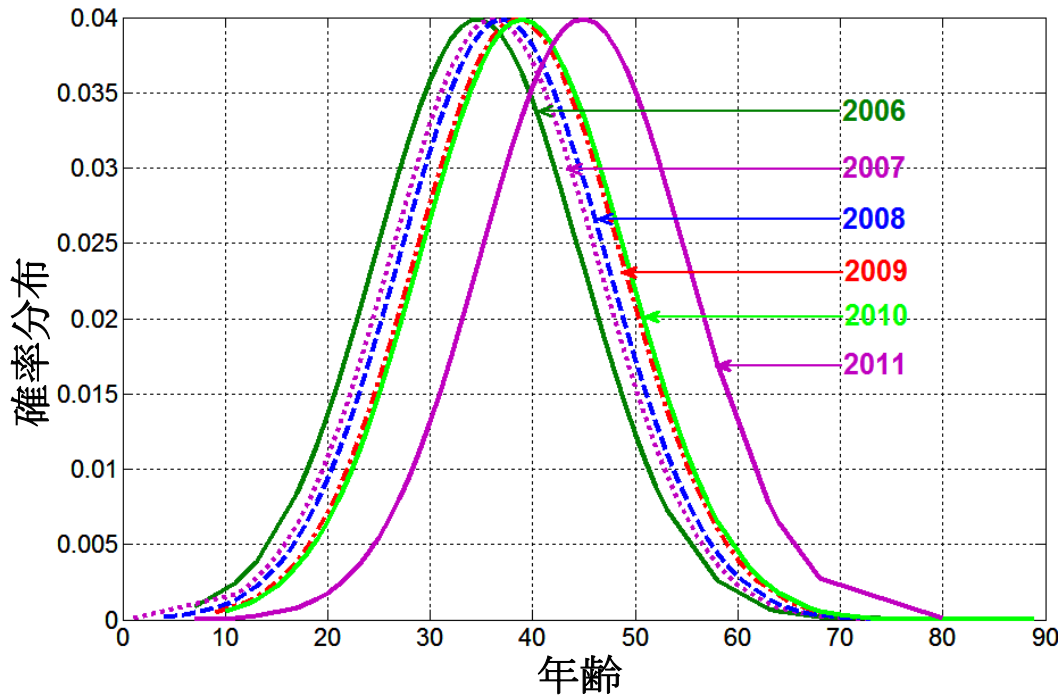


図 5-4-2 参拝者の年齢分布 (祈願書より筆者作成)

③現地祈願者の地域分布

さらに、祈願書を通し、現地祈願者の地域分布を分析しよう。4138 人の内、出身地が確認できるのは 4076 人があり、これらの参拝者がほぼ日本全国に行き渡ることが分かった。

図 5-4-3 が示しているように、7 割以上の参拝者が近畿地方出身で、そのうち大阪府出身者が全体の半分くらいで、大阪市出身の参拝者が 3 割近く占めている。2 番に多い関東地方の参拝者は 1 割も超えていない。ゆえに、「願いの宮」の影響圏が大阪市及び大阪府を中心とする近畿地方と考えられ、地元に着くという流行神の特徴が窺える。

この数字を首無地蔵と比べてみれば、信仰者の体験談をまとめた『礼賛記』からその信仰圏は「広島県居住者が全体の 57.8% を占め、その内の 89.6% (全体の 51.8%) が旧備後国で占められ」(鈴木 1982 : 405)、また岡山県東南部にある横樋観音の場合、参拝ノートから「参拝者の居住範囲は岡山県内だけで 88.2% を、さらにいえば観音像の鎮座している岡山市内だけで 59.7% を占めている」(鈴木 1992b : 148) と鈴木が述べ、割合でいうと差があるにしても、信仰対象所在の市あるいは県の出身者、つまり地元の人メインであることが共通している。

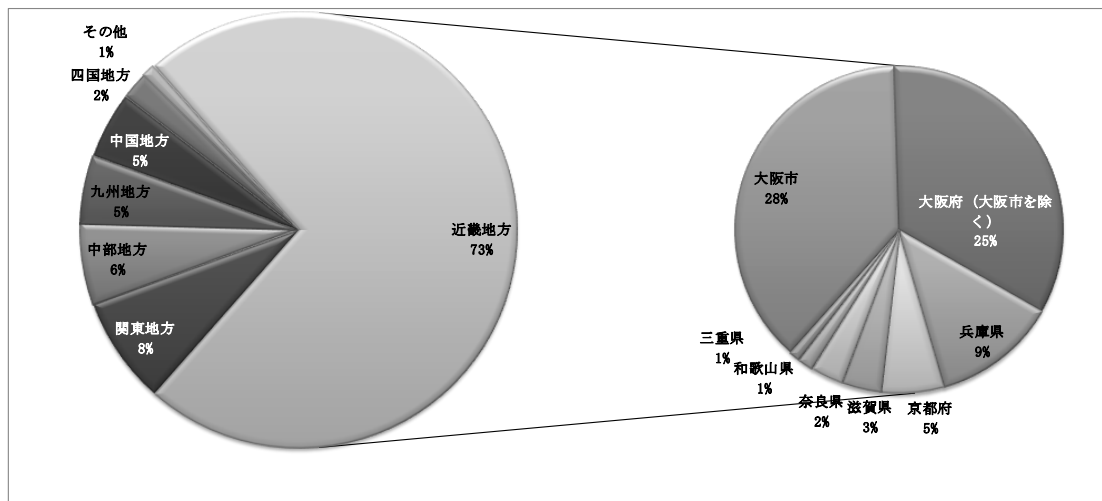


図 5-4-3 現地祈願者の地域分布 (祈願書より筆者作成)

④現地祈願の内容

それでは、現地祈願者は「願いの宮」に何を祈るか。祈願書から見ると、様々な祈願があり、そのうち「健康・病気回復」、「仕事・商売」、「恋愛・結婚」、「金銭・経済」、「人間関係」や「合格成就」などに関する祈願内容が特に多く、そのほか、「幸せ」、「平穩」、「安心」、「楽しい」、「楽」などの抽象的な祈願内容も多く見られる。また、祈願対象は「自分」が一番多いが、「家族」、「知人・友人」、「ペット」なども対象になっている。全体的に特定の祈願内容に偏ることがないため、「願いの宮」の神はある特定の分野の機能神ではなく、万能の神とされていることが窺える。

4-2、インターネットの場合

①おかげ情報数の経年変化

図 5-4-4 にインターネットにおけるおかげ情報数の経年変化をまとめた。その増減の傾向は現地とほぼ一致しており、2006年(平成18)からおかげ情報数が急増し、2008年(平成20)にピークに達した後減り始め、2011年(平成23)に再び増加した。また、現地の状況とも共通しているが、一回目の増加はインターネットからの発信、二回目の増加は前年度から「願いの宮」がテレビに取り上げられたことの影響以外、フェイスブックの開設なども増加の原因と考えられる。

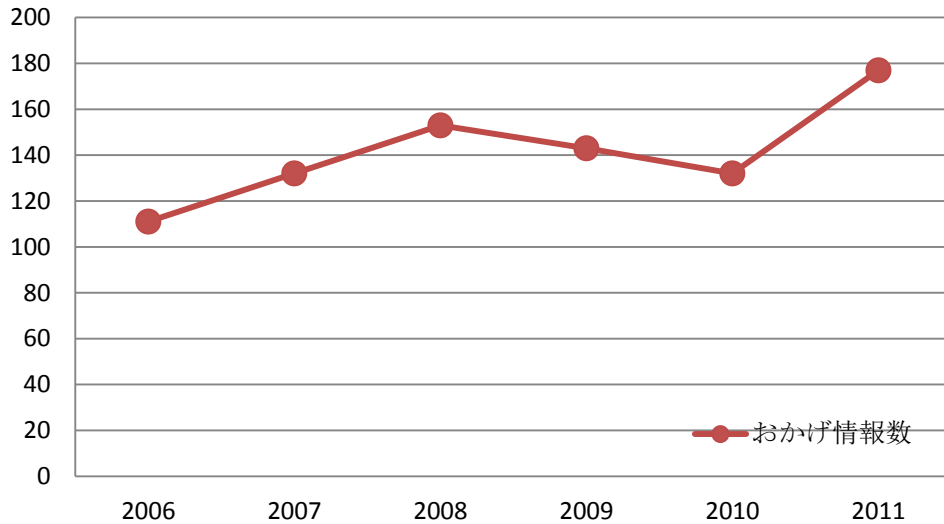


図 5-4-4 おかげ情報数の推移図（「おかげの感想板」より筆者作成）

② ネット祈願者の地域分布

「おかげの感想板」よりネット祈願者の地域分布を図 5-4-5 にまとめた。現地祈願者と同じように、大阪府及び近畿地方の出身者が一番多いが、ただ全体的に占める割合が現地参拝者に比べればずっと低い。そのうち近畿地方の出身者が 3 割近くを占め、大阪府の出身者が 2 割に届かず、2 番目に多い関東地方と大差がない。つまり、インターネットの場合になると、「願いの宮」は地域性が保たれているにしても、現地ほど強くないことが分かる。

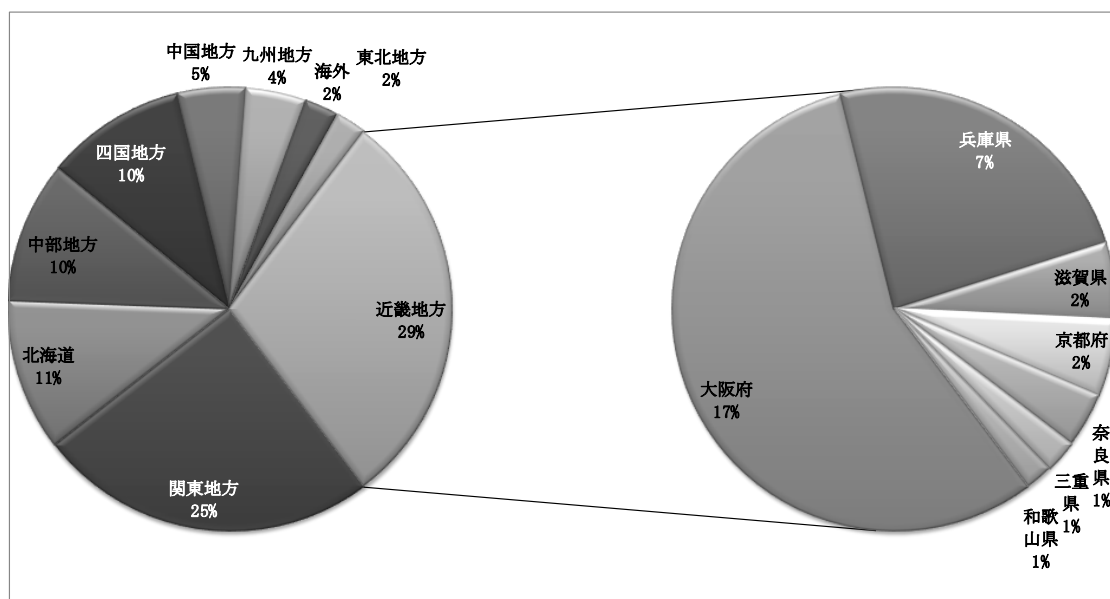


図 5-4-5 ネット祈願者の地域分布（「おかげの感想板」より筆者作成）

③おかげの内容

それでは、ネット祈願者の書き込みによりどういうおかげをもらったかを考察する。「おかげの感想板」の2011年(平成23)掲載分を項目ごとに集計し、下記のようにまとめた。2011年(平成23)のおかげ情報は全部で177件があり、その内、ただお礼を表すものとはっきり示していないものを除き、自分がもらった「おかげ」の内容を具体的に書いているのは137件ある。病氣治癒や退院に関するおかげが一番多く見られるが、全体的に多岐にわたっている。ここで一つ看過できないのは、177件の内、はっきりと「願いが叶った」ことが読み取れるものは67件に上ることである。つまり、祈願者にとって何が叶ったかは別にして、「願いが叶った」こと自体が一番大きな「おかげ」である。その前数年のおかげ情報にも、やはり同じような傾向が見られる。こうしてみれば、「願いの宮」の神は願いを叶えてくれる神であり、まさに「願いの神」と言えよう。

病氣治癒・退院	32	家族関係円満	3	通夜無事	1
仕事・就職	17	カウンセリング順調	2	友人が安定した	1
無事・安全	13	よい天候	2	犬がもらわれた	1
合格	10	紛失物回帰	2	ガソリン満タン	1
メンタル	7	縁切り	2	子供の交友	1
悩み解消	5	学業上達	2	費用の支払い解決	1
人間関係円満	5	家事が完成した	1	ほしいものゲット	1
恋愛・結婚	5	父から連絡がきた	1	スキーに行けた	1
復縁	4	犯人逮捕	1	新年会ができた	1
検査順調	4	目標達成	1	ペットの帰宅	1
子宝・安産	3	イベント参加	1		
金銭・経済	3	教室継続達成	1		

5、インターネット時代の流行神

世界銀行の統計によると、日本では1990年代からインターネットが普及し始め、当初の利用者は約2.5万人であった。10年後の2000年（平成12）になって利用者数は3770万に上り、さらに10年後の2010年（平成22）には9895万を超え、平均で1.3人に1人はインターネット利用者になっている¹²。もはやインターネットは現代人の生活においては不可欠になっている。

インターネットの普及は、あらゆる分野に大きな影響を及ぼした。もちろん宗教も例外ではない。早くも1996年（平成8）東京都港区愛宕神社の松岡神職は神社のホームページを開設し、ヴァーチャル参拝を実現させ、それを皮切りにインターネット上には様々なヴァーチャル参拝が現れてきた。また、多くの神社や寺院はインターネットを通じて宗教情報を発信し、現在もはや情報氾濫といっても過言ではない。一方、宗教学者もインターネットと宗教との関係に注目している。まず挙げられるのは、1998年（平成10）に、宗教状況について正確な情報を提供するために開設された宗教情報リサーチセンター（RIRC : Religious Information Research Center）がある。また、インターネットによる宗教の変容や宗教団体の発信情報に注目する先行研究が多く蓄積された¹³。ところが、インターネットの普及により、信者と宗教団体との間に交流の仕方が変わり、さらにインターネットを利用して宗教情報を発信することは新たな布教手段となりうるにしても、結局それで信者あるいは参拝者の増加に至ったのかという疑問が残った。井上順孝は、2005年（平成17）前後の時点で、「宗教団体の公式サイトの数や、それらにアクセスする訪問者数は、現実の団体数・信者数に比べてあまり多くなく、教団体制や布教活動の面で大きなインパクトを与えているとまでは現時点ではいえない」（黒崎 2005 : 39）と述べ、インターネットが布教の面で果たした役割に関して慎重な姿勢を見せている。ここ数年の『宗教年鑑』の統計より、各教団の教勢の低迷乃至縮小が持続していることは明らかで、現在においても、決してそのような状況が変わったとは言えない。

しかし、このような状況の中で、インターネット上で発信することで流行り出した既存の宗教団体として、金光教桃山教会「願いの宮」は稀な例と考えられる。「願いの宮」は現

実の世界とインターネットの世界にまたがり、そこにインターネット上のヴァーチャルな「願いの宮」と現実にあるリアルな「願いの宮」が対照的に存在する。黒崎浩行が「このような従来からの『参拝のヴァーチャル化』は、実際に寺社へ参拝しないで済むようになるものではない。むしろ逆に、参拝という『アクチュアル化』への方向を定め、それを促すものとして機能している。このことは交通機関の発達や、新しい情報通信基盤の確率による綿密な情報の提供によって強化されている」（黒崎 2008：116）と指摘したように、インターネット上の「願いの宮」に対するヴァーチャル参拝が増加すれば、現実の「願いの宮」にも現地参拝が増加する効果がもたらされる。その逆の場合、現地参拝の増加により、インターネットにおいて人気が高まり、ヴァーチャル参拝が流行り出すようになることも十分あり得る。要するに、ヴァーチャル参拝と現地参拝は互いに推し進め、「願いの宮」の展開を促したのである。

考察

さて、インターネットの発展を基盤として流行り出した「願いの宮」はいかなる特徴が見られるか。「願いの宮」は既存の神社仏閣が急速に流行り出した流行神の一事例として考えられるが、その伝播過程においては、インターネット時代ならではの特徴がいくつかまとめられる。

①参拝者（祈願者）増加の契機。これまで鈴木に取り上げられた首無地藏などの場合、新聞やテレビという従来のマスメディアの報道が参拝者増加の契機となった（鈴木 1992a：43）のに対して、「願いの宮」の場合、テレビの報道により参拝者の増加を促したことも確認できたが、マスメディアに取り上げられる前にすでにインターネット上の発信により、参拝者を増やすことに成功した。特に、ミクシィのような SNS（ソーシャルネットワークサービス）が参拝者の増加に大きな役割を果たしたと考えられる。

②祈願方法。「願いの宮」は、現地に行き祈願することもできれば、インターネットで祈願し、宮司に取次してもらうことも可能になっている。そのようなやり方は金光教においても稀な例である。実際に神仏の所に行き、祈願したり、おかげをもらったりすることが

一般に見られるが、「願いの宮」の場合、祈願者は神と直接関わらなくてもおかげがもらえるため、祈願方法が多様になっている。

③霊験譚。流行神を起こさせる場合、必ず神や仏の新しい霊験を創作する宗教者が介在していると宮田は論じた（宮田 1972 : 28）。「願いの宮」の場合も多くの「霊験譚」が見られる。これらの「霊験譚」は祈願者の祈願成就の体験が中心で、祭神の天地金乃神の顕現などに関する記述は一向見られなかった。祈願者は既存の金光教教義に触れず、「願いの宮」の神を願望実現の神として仕上げられていることが窺える。

このように、現地祈願にしろ、ネット祈願にしろ、祈願者が「現世利益」を求める志向は普遍的に見られる。しかし、現代人の信仰における新たな傾向も「願いの宮」により示唆された。一つは、特定の宗教団体の体制に縛られないことである。桃山は参拝者については、「彼らは自分が金光教の信者と思っていないし、私も彼らが金光教の信者と思っていない」と述べ、参拝者と特定の宗教団体との相互関係が極めて疎遠で、自由であると思われる、もはや「信者」という言葉はほとんどの参拝者に当てはまらなくなっている。もう一つは、熱狂さの希薄である。特に、不可思議な体験による入信という行為はなかなか見られず、その背後に神の霊威や霊力に対する意識が低くなってきたことが推察できる。「願いの宮」の場合は、宮田により定義された狂熱な信仰から生ずる流行神に齟齬するが、祈願する対象及び現世利益をもたらす対象とされ、急速に信仰を集めることが明らかである。むしろ、その狂熱さの希薄は現代、特にインターネットの世界における流行神に対する信仰の実態と考えられる。

いずれにせよ、「願いの宮」はインターネットを通じて祈願者を拡大し、祈願者はインターネットを通じて気軽で、便利なおかげのもらえる宗教を手に入れる。「願いの宮」の流行は現代人のニーズにうまく応えた結果と言えよう。次章は、同じくインターネットから発信した中国の事例に焦点を当て、現代人の信仰を注目し続ける。

¹ 「一般には、神仏の前を敬つてという言葉。金光大神は自宅の上の間の床に神をまつり、その前に座って参拝者を取次いだ。神は、まつっている所にだけ鎮座しているのではなく、世界中が広前であると説いた」（金光教本部教庁 1983 : (付録) 26)。

² 金光教においては、入信が明確に定義されてないため、信者であるか否か判断しにくい。

金光教教団は信者と判断する人の数を毎年申告するが、本稿では、信者という呼び方を避け、金光教桃山教会「願いの宮」で参拝や祈願などの行動を取る人を「参拝者」や「祈願者」と呼ぶ。

³ 「神に向かって右側に設けられた座。金光大神は、この座にあって取次の業を行った。本部広前および各地の広前で、この形式は継承されて、今日におよんでいる」(金光教本部教序 1983 : (付録) 16)。

⁴ その前の祈願メールは桃山のパソコンの破損により計算が不可能になる。

⁵ <http://hakoniwa.jp/hakoniwa/win.html> 閲覧日 2012年7月31日

⁶ 桃谷駅とは JR 西日本大阪環状線の駅である。1895年桃山駅が開業し、1905年桃谷駅に改称した。

⁷ 「願いの宮」では、巫女のヘアメイク、着付け、所作などを体験できる。女性に限り、年齢不問。一回の体験時間は約2時間。

⁸ 2006年から「願いの宮」では祈願者に祈願書を記入してもらうことになったゆえ、その前の祈願内容を残す記録がなかった。

⁹ 「おかげの感想板」とは祈願書者がもらったおかげを人に伝え、分けようとする目的の掲示板である。

¹⁰ 「ご利益」の意。「おかげ」とは金光教の用語である。

¹¹ 祈願者が祈願成就の際、絵馬の裏側にお礼を書き、柵にかける。

¹² <http://data.worldbank.org/?display=graph> 閲覧日 2012年7月31日

¹³ 例えば、池上良正・中牧弘允(編)『情報時代は宗教を変えるか—伝統宗教からオウム真理教まで—』(弘文堂、1996年)、田村貴紀「インターネットの宗教情報：その可能性と危険性」『宗教と社会』第3号(1997)、土佐昌樹『インターネットと宗教—カルト・原理主義・サイバー宗教の現在』(岩波書店、1998)、生駒孝彰『インターネットの中の神々—21世紀の宗教空間』(平凡社、1999)、井上順孝(編)『インターネット時代の宗教』(新書館、2000)、『IT時代の宗教を考える』(法蔵館、2003)、黒崎浩行「日本宗教のインターネット利用の比較分析：神社ウェブサイトの場合」『國學院大學日本文化研究所紀要』第83号(1999)、「日本宗教におけるインターネット利用の社会的文脈」『國學院大學日本文化研究所紀要』第85号(2000)、「ヴァーチャル参拝のゆくえ」『現代宗教 2008 特集：メディアが生み出す神々』(2008)などの研究成果があげられる。

第六章 ヴァーチャルな神々——中国の「受験の神」

本章においては、中国の「受験の神」を事例として取り上げよう。中国では、インターネットの普及により、そのユーザー数は 2012 年の時点で 5.38 億にも上るとい¹。日本と同じように、インターネットはあらゆる分野に大きな影響を及ぼし、宗教の分野では、2009 年、「春哥」の出現を皮切りに、「範進」、「考神」など「受験の神」としてインターネットというバーチャルな世界から次々と現れ、人々の祈願対象とされると同時に、マスメディアからも注目を集めている。これらの「受験の神」に関しては、新たな社会現象として中国の学者が関心を寄せているが、その流行の過程とメカニズムに言及する先行研究はまだ見当たらない。本章では、先行研究によって指摘された現実の流行神と比較をしながら、「受験の神」の展開過程や特徴を明らかにし、現代中国における流行神の特徴と信仰の傾向を考察する。

1、中国の受験事情について

「受験の神」を説明する前に、まず中国の受験事情を説明しておこう。長い科挙の歴史が続いた中国では、日本と同様に「受験戦争」と称されるものが存在している。「望子成竜」という言葉があるように、子供の立身出世は常に親の願望であり、それを実現するには、受験を通してよい大学に行かせることは社会の常識とされている。そのため、小学校から高校の入試までは無論のこと、特に 6 月上旬に行われる大学の全国統一入試は（全国普通高等学校招生全国统一考試²、通称「高考」）による熾烈な争いが毎年繰り広げられ、全国的な関心事になっている。2004 年 6 月 29 日の『世界週報』の記事には、「この国で驚くべきことは、受験生の親の関心度は日本のそれをはるかにしのぐということである。統一入試が行われる 3 ヶ月ほど前になると、大衆紙などの家庭欄では、親の心構えが特集となって掲載され始める。受験生を中心にした家庭環境づくり、心のケア、記憶力を増進させる料理のレシピ、集中力を強化する漢方薬の紹介などなど、至れり尽くせりの指南である」

との記述があり、社会総動員で受験を支援する態勢を示している。

しかし、大学受験は過ぎても、試験は終わらない。大学生向けの「英語四級」と「英語六級」³の試験は多くの学生にとっては苦戦である。現在、「英語四級」で425点以上を取得できないと学位を授与しない大学が多い。それに、期末試験も油断ができない。2010年2月27の『揚子晩報』（資料6-1-1）の報道によれば、ある大学では、クラスの2割の学生が期末試験に落ち、追試を受けなければいけないという。

言うまでもなく、受験合格のために人が神仏に祈願するのは自然なことである。中国では、学業成就で有名なのは、文昌帝君という道教の神を祀る「文昌閣」、「文昌宮」、「文昌祠」などの廟宇⁴、聖人とされる孔子を祀る「孔廟」、及び知恵を司る文殊菩薩が鎮座する寺院が挙げられる。2009年から、インターネットの世界においても、「受験の神」と称される流行神が誕生し、ブームが急速に広がっていった。

資料6-1-1 『揚子晩報』2010年2月27日（記事一部）

見出し：学校が始まる前、「考神」拜みに忙しい補考生

一个班 1/5 学生要补考, 高考状元也有两科不及格而挂了科

临开学, 高校挂科生忙“拜考神”

考试前“拜春哥”已经OUT啦,“春哥”的地位正在被“考神”替代! 南京大部分高校本学期开学时间在3月初,记者发现,近来在大学生活跃论坛上,早早返校的挂科学生疯狂拜起了“考神”,祈祷补考顺利过关。他们须在开学前完成所有补考科目,假如再次挂科,花钱重修在所难免。

右图:网友创作的“考神”漫画形象。



■现象 校内网上齐拜“考神”求过关

“考神”,全称为“考试必过神”,原是学校网上虚拟人物。随着“挂科了没?”这句话成为南京各所高校学生见面的问候语,补考前在“考神”公共主页上发帖“拜考神”,也成为大学生的一种另类时尚。

早在开学之前,南京某高校大二学生曹雪已经在校内上狠狠拜过考神了。“开学就要补考高数,保佑我吧!”2月26日中午补考高数前,曹雪还是飞奔向宿舍,又在考神的公共主页上虔诚地留言:“下午要补考了,写你懂的。然后心满意足上了考场。”

像曹雪这样在考试之前狂拜考神的绝对不在少数。记者翻看校内网“考神”公共主页上的“群众

留言”,诸如“我错了,我错了……让我今天早上高数补考过吧。”“C语言回学校就要补考啊,写哥保佑我过啊。”“明天物理补考,你懂的”

一类的“虔诚话语”以几何级数的频率增长着。祈祷补考通过的科目也是五花八门,C语言、大学物理、线性代数、机械工程等等。在满足了自己的思想寄托之后,像曹雪这一类的学生甚至觉得自己会因“考神”的“保佑”而顺利过关。

而对于学生的虔诚膜拜,考神的“回应”也是各式各样。“祝所有准老师们都能顺利过关”,“写哥保佑你通过”,而针对一位补考睡过头的可怜虫,“考神”也是爱莫能助地光秃头了一下,“补考都能睡过啊,强……哥不懂了。”当然这

“考神”只是主页的管理员而已。

除了上网“拜考神”,挂科考生还想想方设法避免挂科真相被家人知晓。按照惯例,各高校会在寒假期间用匿名方式告知考生期末成绩。南京某高校的王卫(化名)整个寒假差不多都守在家里的信箱前。因为不用看成绩单就知道肯定会挂掉的“高数”,王卫从放假回家的那一刻就开始担忧。只有抢先拿到成绩单,才能瞒过爸妈,不让他们知道挂科的事实。每天中午拿着信封,成了王卫在假期里每天的必修课。为了能过一个安稳的寒假,王卫的办法就是每天帮家里拿报纸,只有这样才能先于爸妈看到成绩单。

2、「受験の神」とされる神々——「春哥」、「考神」、「範進」とは

まず、「受験の神」とされる神々について説明する。最初に現れたのは「春哥」という「受験の神」で、女性歌手李宇春を原型として作られた。2005年8月、21歳の李宇春は、湖南テレビの歌唱コンテスト「超級女声（スーパーガール）」で、グランプリ優勝した。その後、ポップス歌手として活発な活動を続けている。2008年から、彼女に因んで、「春哥」（日本語の意味は「春兄」）及び「春哥を信じれば試験に落ちない」（原文：信春哥、不挂科）などの文句がネット上で流行り出し、2009年からウェブサイト「豆瓣網」⁵では、「春哥廟」と称するある祈願サイトが現れ、現時点まで7千件以上の祈願が掲載されている。

次に登場したのは「考神」⁶である。2009年から中国最大のSNS「人人網」⁷において、「考神」のサイトが現れた。現在書かれている祈願数は32万件を超えている。サイトの管理者は「考神」と名乗り、祈願者を励ます文句を多く書き込んだ。「考神」の影響で、もともと李長生の漫画作品『考神』⁸をめぐる交流の場とされた百度傘下のサイト「考神吧」⁹も2010年1月から祈願サイトと転じ、現在2万件以上の祈願が掲載されている。

その後、「人人網」においては、「範進」のサイトが開設された。「範進」とは清の時代に吳敬梓によって書かれた長編小説『儒林外史』に出てくる人物である。範進は貧乏な書生で、54歳になって、ようやく「秀才」の入試に合格した。その後、省府の試験で、「举人」に合格した。義理の父の胡屠戸が「文曲星の生まれ変わりだ」と媚び諂ったが、結局範進は極度の興奮のため、気が狂ってしまったのである。2010年から「範進」のサイトが現れ、試験合格の神として崇められ、すぐに人気を集めた。現時点まで4千件以上の祈願が書かれている。

最後に出現したのは、「文殊菩薩」と「普賢菩薩」である。2012年から、ポータルサイト「搜狐」¹⁰では、「文殊菩薩」と「普賢菩薩」に祈願するサイトも現れた。5月から2ヶ月も経たない間に、計5万件以上の祈願が掲載され、その人気ぶりが従来の祈願サイトを超過してしまったのである。これらの祈願サイトの状況を表6-2-1にまとめた。

表 6-2-1 主な祈願サイトの概況

サイト	祈願対象	祈願開始 年月	総祈願数 (2012年まで)	祈願内容	「神」と名乗 る管理者
豆瓣網	春哥	2009-12	7千件以上	受験関係他全般	なし
人人網	考神	2009-12	32万件以上	主に受験関係	あり
百度	考神	2010-01	2万件以上	主に受験関係	なし
人人網	範進	2010-06	4千件以上	主に受験関係	あり
搜狐	文殊、普賢	2012-05	5万件以上	主に大学受験関係	なし

3、ブームの展開とマスメディアの報道

ここでは、「受験の神」ブームの展開過程を概観し、また新聞、雑誌やテレビなどのマスメディアの報道を通し、社会の反応を見ていきたい。

第1期：「受験の神」ブームは「春哥」の創作から始まった。中国国内の新聞各紙はほとんど「春哥」を取り上げていない。雑誌記事の中に「春哥」の展開過程を詳細に説明したのは2009年20号の『新世紀週刊』に掲載された「春哥教簡史」である。

この文章の説明によると、「春哥」の発端は、李宇春（写真6-3-1）があるテレビ番組に出演した際、テレビの字幕に出た観客からの「春哥（李宇春）こそ男の中の男」（原文：春哥純爺們、鐵血真漢子）といった内容の応援メールだという。どういう心境でこのようなメールを送ったか明確ではないが、この言葉がすぐにインターネットで流行り出した。その後「春哥」をめぐる様々な言葉が生まれてきて、例えば、「春哥を信じれば永久に生きる」（原文：信春哥、得永生）、「春哥を信じれば試験に落ちない」（原文：信春哥、不挂科）などがある。それだけではなく、李宇春の合成写真と李宇春を主人公とする笑話もインターネットに出回っている。これらの言葉、合成写真と笑話を創作し、伝播させる人からなる集団が「春哥教」と呼ばれ、彼らのいたずら行動に対し、李宇春のファンが非常に怒り、更に李宇春の所属事務所が2009年6月に正式な抗議文を発表した。故に、「春哥」関係の

サイトが使用禁止されたり、削除されたりするようになり、またマスメディアも「春哥」に関して慎重な態度を取っている。

結局、「春哥」という言葉が広く知られるようになった。その人物像は次第に李宇春から離れ、「勇武の男性」として定着した。2009年12月に、「豆瓣網」において、「春哥廟」と称するある祈願サイトが現れた。このサイトはもう李宇春関係のものを一切掲載せず、祈願者が架空の「春哥」に向かって祈りを捧げる場所となっている。



写真 6-3-1 李宇春¹¹

第2期：2010年2月から、新学期の始まりに伴い、新たな「受験の神」が注目されるようになった。2010年2月27日の『揚子晩報』（資料6-1-1）は「学校が始まる前、『考神』拝みに忙しい補考生¹²」（原文：临开学、高考挂科生忙拜“考神”）という見出しで、「人人網」で流行り出した「考神」を報道し、「考神」を拝むことが「春哥」を拝むことの進化版だと記述した。この記事は素早く各サイトに転載された。同日、中国中央テレビ(CCTV)のニュースチャンネルとチャイルドチャンネルに「補考前の『考神』拝みが流行中」（原文：補考前膜拜“考神”成另类时尚）というニュースが流れた。この時期、祈願の対象は「人人網」の「考神」で、それに拝む人は主に大学の試験に落ち、追試待ちの学生である。



図 6-3-1 「考神」の画像¹³



図 6-3-2 「考神」のマーク¹⁴

第3期：2010年の6月、大学受験の時期が近づき、「受験の神」が再び話題となった。この時期、新しく「受験の神」とされた「範進」が多くの新聞やテレビに取り上げられた。2010年6月3日の『情報時報』（資料6-3-1）によると、「範進」が「受験の神」とされたきっかけは2010年5月11日に「百度」に現れたあるスレッドで、その内容は「範進、中国の受験の神、中国の受験の師匠、伝説の中の文曲星！試験の前に受験の神を拝むと、試験の際文曲星が助けてくれるという」（原文：範進、中国考神、中国考试宗师、传说中的文曲星！传说考试前拜考神，在考场上就会得到文曲星暗中相助！）である。そのスレッドの下に毎日祈願のコメントが書かれている。また、2010年6月7日の『東莞時報』（資料6-3-2）によると、上のスレッドが現れた後、「人人網」にも「範進」のサイトが現れたという。多くの合格祈願が書かれているほか、「人人網」の「考神」と同じように、数が少ないが、受験生の祈願に対して、「範進」と名乗る管理者が「守ってあげるよ」というような返事を書いている。

また、この時「人人網」において「考神」をフォローする人は45万人を超えている。「範進」とともに、「受験の神」として崇められながら全国の新新聞やテレビに取り上げられ、しかも祈願者は大学の補考生から大学入試の受験生へ、さらに大学院入試など様々な試験の受験生まで広がっていった。表6-3-1と表6-3-2には主なマスメディアの報道をまとめた。

見出し：大学受験生「範進」を「受験の神」とし、ネットで拝む

网事焦点 2010年6月3日 星期二 A25

高考生网拜 范进获封“考神”

高考临近网络“拜神帖”激增,考生称为求个心安

“范进”走红 逾千万考生争烧香

范进走红网络上,成了一道“拜神帖”。不少考生“拜”范进,祈求保佑,祈求金榜题名。范进走红网络上,成了一道“拜神帖”。不少考生“拜”范进,祈求保佑,祈求金榜题名。

15万条留言祈祷考好

范进走红网络上,成了一道“拜神帖”。不少考生“拜”范进,祈求保佑,祈求金榜题名。范进走红网络上,成了一道“拜神帖”。不少考生“拜”范进,祈求保佑,祈求金榜题名。

专家分析 心理暗示减压 试试也无妨

范进走红网络上,成了一道“拜神帖”。不少考生“拜”范进,祈求保佑,祈求金榜题名。范进走红网络上,成了一道“拜神帖”。不少考生“拜”范进,祈求保佑,祈求金榜题名。

見出し：普段は線香を挙げず、試験前の「範進」拝み

A108 网事 2010/06/07 星期一 责编: 冯文杰 美编: 杨智志 校对: 张利军 Email: 38265481@qq.com 东莞时报

平时不烧香 临考拜“范进”

“范进”被考生封为“考神”,45万人上网拜“考神”,请求保佑考上大学

本报记者 吴金华

今天就是高考。十二年苦寒,有人头悬梁,有人凿壁偷光,只为拼搏这一战。网络江湖传遍,考好了,金榜题名,志得意满;考砸了,山穷水尽,黯然神伤。如此天壤之别,“范进”之名,学子怎能不紧张?紧张了,怎么办?范进考神是模范。

近日,网友、考生、家长出于调侃,或为了释放考前压力,或为了实现美梦的愿望,将中国古代著名举人的名字范进封为“考神”,网络上兴起了一股“拜神帖”热。某网站的一则“拜神帖”引来45万考生围观。

考生今年奔“春哥”拜“范进”

“考神”是“考试必过神”的简称,是网络上的虚拟人物。它在网络上广泛流传,源于2009年底的一则“考试必过神”的帖子,内容和“保春哥”不挂科“相仿”。

5月11日,某网站上的“拜神帖”以范进为尊,这则帖子的内容称:“范进,中国考神,中国考试宗师,传说中的文曲星!传说考试拜神,在考场上她会帮你作弊,让你在考试中脱颖而出。你不但会帮你作弊,还会帮你作弊。你不但会帮你作弊,还会帮你作弊。”

此外,人人网上出现了“考神”“范进”两大网络虚拟人物公众主页。“考神”为大学生量身定做,其宗旨为“考而不挂是为神”,目前,其好友已超245万;“范进”则提倡“考高考低考来考,想想托福四六级,接受各种崇拜”。“范进”在两天前更新状态:“高考一点都不可怕,就算考一年了,考的会是会的东西。要知道大学的考试,只靠两天,考还来不及的东西。”

“为了大家考生减压。”

范进走红网络上,成了一道“拜神帖”。不少考生“拜”范进,祈求保佑,祈求金榜题名。范进走红网络上,成了一道“拜神帖”。不少考生“拜”范进,祈求保佑,祈求金榜题名。



范进名片

范进是《儒林外史》中那个上了科举,屡试屡败的穷酸秀才。多年应试不中,中年之时终于中了举人,喜不自禁以至于疯迷心窍,得了疯心症。被以各种方法的老丈人一声不响地救回,恢复了神志,走上了大富大贵,风光无限的仕途。

表 6-3-1 主なマスメディアの報道 (①新聞)

日付	紙名	見出し
2010-6-1	『重慶晨報』	大学受験が来た ネットで一番人気なのは? 「考神」
2010-6-2	『新聞晩報』	意外に「範進」が「受験の神」になった
2010-6-3	『成都晩報』	試験前何で遊ぶ? 「受験の神」の「範進」を拝む
2010-6-3	『信息時報』	大学受験生「範進」を「受験の神」とし、ネットで拝む
2010-6-7	『東莞時報』	普段は線香を上げず、試験前「範進」を拝む
2010-6-7	『重慶日報』	「範進」は「受験の神」とされ、大学受験生はネットで拝む
2010-6-8	『新聞晩報』	受験生は高得点をネットで「受験の神」に願う
2010-6-9	『北京晩報』	試験後、ネットで「受験の神」に感謝 管理者は殆ど 20 代

表 6-3-2 主なマスメディアの報道 (②テレビ)

日付	局名	項目
2010-6-4	浙江テレビ	「範進」がネットで「受験の神」になった
2010-6-4	安徽テレビ	大学受験が近づき、「考神」がネットで人気
2010-6-4	遼寧テレビ	大学受験が近づき、「考神」がネットで人気
2010-6-4	湖北テレビ	大学受験が近づき、「考神」がネットで人気
2010-6-5	北京テレビ	大学受験が近づき、「考神」がネットで現れ
2010-6-6	江西テレビ	大学受験生はネットで「受験の神」を拝む 意見様々
2010-6-10	江西テレビ	大学入試が終わったら「考神」を拝む

第4期：2010年は「受験の神」ブームのピークであった。2011年に入り、「受験の神」はしばしば取り上げられるが、新しい「神」の出現もなく、また全体的に新聞記事の数が前年度より減少した。新たな傾向としては、まず、微博（ウェイボー、中国語版ツイッター）における「受験の神」の伝播が顕著になったことが挙げられる。2011年1月16日の『中国青年報』は「大学院受験生急増 微博で『受験の神』を送信」という見出しで、大

学院受験生が互いに「受験の神」の画像、マークやメッセージを送信し、相手を励ますことを報道した。「受験の神」が微博を通して、受験生の積極的な送信により更に広がっていくことが窺える。もう一つの傾向は、「受験の神」の祈願者は受験生だけではなく、受験生の親にまで広がっていったことである。2011年6月2日の『武漢晨報』では、「ネットで『受験の神』を拝むのは、受験生以外に受験生の母親が一番多い」という記述があった。

第5期：2012年からネット上の「受験の神」は依然として祈願者に拝まれているが、新聞とテレビの報道がほぼ見られなくなった。今年の5月からポータルサイト「搜狐」に大学受験のための「高考祈福台」と称する祈願サイトが現れた。祈願対象は図6-3-3の「文殊菩薩」と「普賢菩薩」で、現時点まで5万件以上の祈願が掲載されている。2012年5月28日の『河南商報』と2012年6月5日の『中国民族報』（資料6-3-3）は「大学受験近くの『仏頼み』」という見出しで、この「受験の神」を取り上げ、「当サイトの統計により、親が子供のために書いた祈願が80%近く占める」と述べた。それ以外の報道記事は見当たらず、インターネット上の「受験の神」をめぐる報道記事はそれ以降あまり見られなくなった。



図6-3-3 文殊菩薩と普賢菩薩の画像¹⁵

見出し：大学受験近くの「仏頼み」

高考来临“抱佛脚”

□ 本报记者 周芳

6月7日，今年的高考大幕即将拉开。

每年的高考都牵动着无数家长的心，他们对子女的期望和祝福通过各种方式表达，在生活上关心，学习上倾尽全力，很多还要为自己的子女上一道保险——祈求神灵的保佑。于是，每逢高考来临前夕，一些佛教名山、寺庙香火旺盛，很多家长或是自己或是带着子女去烧“学业有成”香、拜佛祖菩萨、求保佑升学的挂饰……旁人在欣赏这道风景的同时，不禁发出“可怜天下父母心”的感叹。

网上拜佛蔚然成风

近年来，每当高考来临前夕，除了庙宇中香火旺盛外，网上拜神求佛也成一景，各个祈福平台上，高考“信徒”众多。

“祈求文殊菩萨保佑女儿心智大开，在今年的高考中鱼中鱼，超常发挥，考上理想的大学。”5月25日，湖南省长沙市的李女士郑重地在某大型门户网站的高考祈福台上

许下心愿。

记者在国内某知名门户网站的教育高考专题页看到，一个专门的网上高考祈福台赫然在上。两尊金光闪闪的菩萨像分居网页左右，一尊是佛教中传说掌管智慧的文殊菩萨，一尊是掌管信心的普贤菩萨。看来，菩萨也有升学“主管”，这真是让记者补了一把“宗教常识”。

在这个网页上，网友点击菩萨旁边的祈福按钮，可以选择地区，填写姓名和心愿，进行网上祈福。网站的统计数据显示，短短几天的时间里，就有数千人在网上祈福，其中有近80%是家长为儿女祈福。

在祈福列表中，有来自河南、黑龙江、上海、山东、江苏、广西壮族自治区、四川等多地家长的祈福心愿，大多是希望神灵保佑子女高考顺利、为子女增强信心之类。

内蒙古自治区的张女士向文殊菩萨祈福：“求文殊菩萨赐给我女儿智慧、灵气和好运气，保佑我女儿高考成绩出色！取得580分以上的好

成绩！”

“愿菩萨保佑我的儿子今年高考顺利，能考上985重点高校，我和全家给菩萨磕头了！”河南省郑州市的李女士虔诚许愿。

记者又登录北京潭柘寺、沈阳青岩禅寺、武汉归元寺等寺院的网站以及一些佛教网站，在这些网站的祈福专题中，都有一些家长和考生专门为高考留下的祈福话语。

家长和学生：看法各异，褒贬不一

对于家长和考生临考前的拜佛祈福行为，记者采访了一些家有儿女的家长朋友，大家对此看法各异，褒贬不一。

孩子正上初中二年级的赵女士认为：“为了高考求神问佛没有必要，那么多人考试，个个都灵验吗？本来孩子不紧张，往往是家长声势浩大，反而给孩子带来压力。”

家有上高中二年级的孩子的李先生则提出了不赞成意见，认为此举不过是家长和考生寻求一些心理

安慰。“家长带着孩子去依山傍水的清净之地调节一下紧张情绪，感悟一下禅道的超脱，这也是放松的独特方法，大家也不会真的把宝压在菩萨身上。”李先生说。

记者同时还采访了中国人民大学10名在校大学生，在当年高考前夕，他们当中有3人由家人陪同或是家人单独去寺庙拜过佛。

一位大三的胡姓同学说，高考前因为太紧张，她自己提出出来让家人陪着去寺庙烧香求签，希望能够增加一份自信。“其实我自己也清楚用处不大，权当放松减压吧。”胡同学笑着说。

另外7位同学虽然没有直接或是间接参与，但也都认为，高考前求神拜佛只是为了求得一种心理安慰。

“考大学可能是我们农村学生唯一的出路，因此高考对于个人和家庭来说都是至关重要的。我在高考前虽然没有去烧香拜佛，但我认为这也不是什么封建迷信，其实这就是在佛像前许下一个美好的愿望，感觉心里会踏实一点。”一位大三的马姓同学如是认为。

而一位李姓同学则认为，高考前烧香可能涉及一个人的信仰问题。从佛教信仰方面来说，这种“临时抱佛脚”的行为并不是真正的信仰，这也是现代人对于佛、道教的一种误解。同时，高考来临“抱佛脚”，使得考生把重点不是放在复习而是放在求好运上，这样会助长投机取巧的心理。



国内某知名门户网站专设的高考祈福平台截图(截至6月3日)。

以上、マスメディアの報道を通し、「受験の神」ブームの展開過程を概観してきた。総じて言えば、「受験の神」ブームは李宇春に対するいたずら行動から始まり、「春哥」という「神」が生まれ、後に「春哥」に祈願するサイトが整ってきた。それに続き、「考神」、「範進」、及び「文殊菩薩」、「普賢菩薩」という一連の「受験の神」が登場した。祈願者は大学の補考生から大学院受験生、大学受験生、様々な試験の受験生、更に受験生の親まで広がっていった。新聞やテレビは2009年からこれらの「受験の神」に注目し、報道していたが、2010年のピークを経た後、報道が減少してきた。しかも報道記事は毎年の6月と3月前後に集中し、他の月にはあまり見られなかった。

マスメディアはこれらの「受験の神」に対するスタンスにおいて共通している。「受験の神」を拝むことで、ストレスを解消し、安心感を生み出す効果はあるが、目標を実現するには、「神」より自分を信じ、地道に努力することを呼びかけている。また、親が「受験の

神」を拝めば、子供がプレッシャーを感じることもあるため、慎重でなければならないと主張している。

4、祈願内容分析

ここでは、「受験の神」とされた「春哥」と「考神」を事例に、祈願件数、祈願行為や祈願内容を具体的分析を行う。

4-1、「春哥」の場合

「豆瓣網」においては、2009年12月前後から「春哥」に関する祈願サイトが次々と現れたが、ほとんど流行に至らず、書かれた祈願数はせいぜい数十件しか見られなかった。その中で、「春哥廟」と称するサイトは唯一莫大な人気を集めるサイトとなり、2009年12月4日に第一件の祈願が現れてから2012年12月31日まで全部で7574件が掲載され、平均的に一日7件くらいである。以下、このサイトを対象に考察を行なっていきたい。

(1)祈願件数

まず、2009年12月4日から2012年12月31日まで月毎の祈願件数を図6-4-1にまとめた。図6-4-1が示しているように、2009年12月の祈願件数が一番多く、その後全体的に減少している傾向であるが、6月と12月になれば再び増加を示す。その原因は、大学の期末試験、大学英語四級・六級の検定試験や大学入試などは6月と12月に集中しているためと考えられる。2011年の後半から、毎月の祈願数は更に減り、現在は月十数件から数十件の祈願数で安定している。

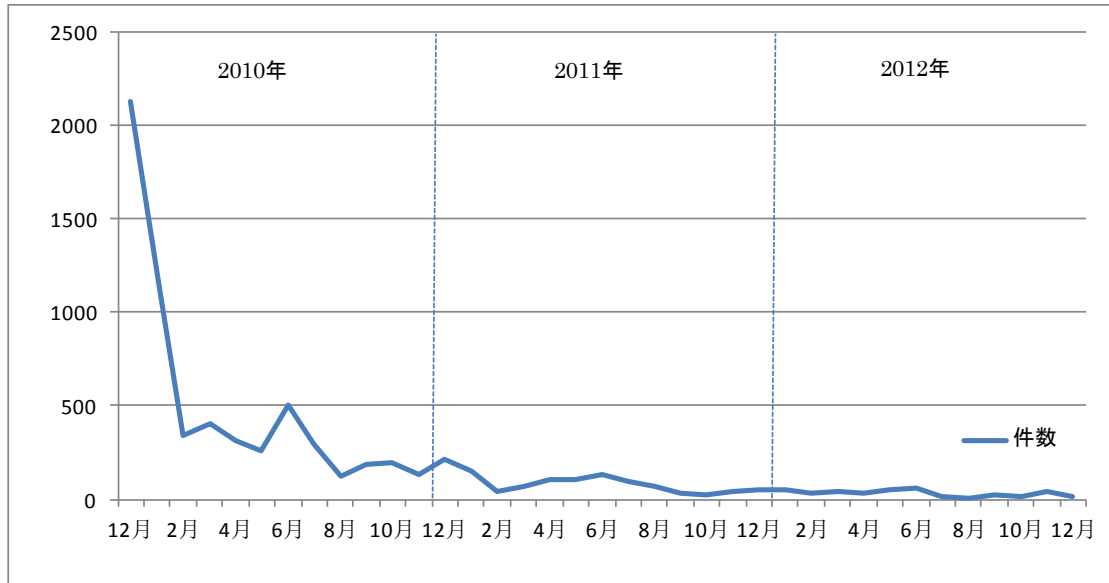


図 6-4-1 祈願件数の推移 (全 7574 件)

(2) 祈願行為

次に、祈願行為については、サイトで祈願する場合は、普通願い事をサイトに記入し、保存すれば祈願行為が完成するが、「春哥」に対して、線香を供えるという特別な行為が見られた。祈願者は「iii」のようなマークを書き込み、線香を供えることを象徴する。「iii」の線香マークを使用した祈願は全体の 2 割前後を占め、このような祈願方法はほかの「受験の神」に見られない「春哥」特有なものである。

さらに、ほかの祈願サイトと共通する「还愿 (お礼参り)」という行為も見られた。つまり、願い事が成就したら、それをサイトに書き込み、「春哥」にお礼を言うことである。7574 件の祈願の内、「还愿 (お礼参り) に来た」と書いたのは 302 件があり、また「叶えてくれたら还愿 (お礼参り) に来る」と書いたのは 72 件があった。インターネット上の神に対しても、「还愿 (お礼参り)」はある程度共有されているルールと考えられる。

(3) 祈願内容

最後に、具体的な祈願内容を分析しよう。7574 件の祈願の内、「哥/GE/Ge/ge/春哥/哥哥 (「兄ちゃん」、「春兄」)」¹⁶という言葉は全部で 8,982 回使用され、祈願者が「春哥」に対し親近感を持っていたことが窺える。また、「你懂的/你懂得/你懂 (あなたなら分かる)」¹⁷という言葉も頻繁に使われることも一つの特徴と考えられ、全部で 5,086 回が確認できた。

中には、願い事を示さず、「你懂的/你懂得/你懂（あなたなら分かる）」だけを書き込む場合も多かった。さらに、自分のための自利の祈願がほとんどであり、恋人、友人や親戚のための利他の祈願は少数に留まっていた。

祈願件数が多いため、ROST WordParser¹⁸という中国語分詞分析ソフトを使い、語彙の出現頻度を分析することにより、祈願内容を考察する。図 6-4-2 では祈願内容に一番頻出する 30 の語彙とその出現頻度をまとめた。全体的に「考試（試験）」に関する祈願が一番多く、「工作（仕事）」、「生意（商売）」、「工資（給料）」といった仕事関係、「叔叔（おじさん）」¹⁹、「男人（男/彼氏）」といった恋愛関係や「身体（身体）」といった健康関係の祈願も多く見られ、内容は試験関係をメインに多岐にわたっている。さらに「考試（試験）」の次に、「四级（四級）」、「六级（六級）」に関する祈願が多く現れることから、主な祈願者は大学生であると考えられる。

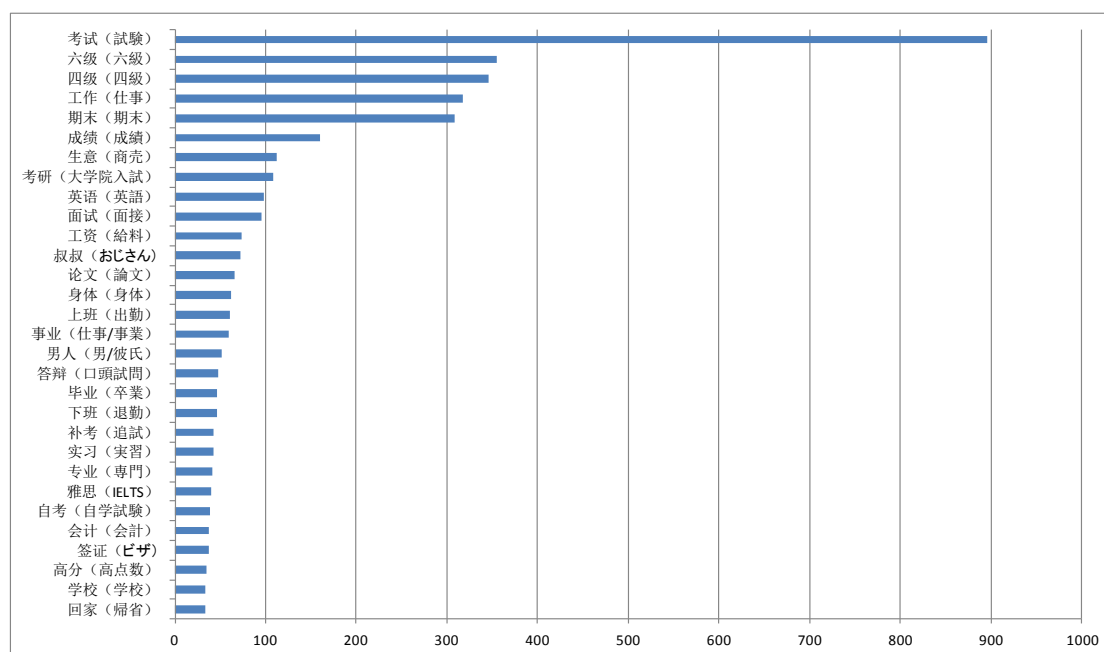


図 6-4-2 祈願内容に関する語彙の出現頻度（前 30）

4-2、「考神」の場合

続いて、「春哥」と比較しながら「考神」を考察する。2010年2月27日の『揚子晩報』によれば、「考神」の始まりは、2009年「天涯」というサイトの電子掲示板に掲載された「考試必過神」のスレッドに遡るといえるが、後に注目されたのは「人人網」における「考

神」と「百度」における「考神吧」のサイトであり、いずれも膨大な数の祈願が見られる。その中、「考神吧」はすでに2006年7月から立ち上げられたが、当時李長生の漫画『考神』をめぐるコメントを書き合うサイトとしてしか注目されていなかった。しかし、2010年1月になって初めて「考神」に対する祈願が続々と現れ、漫画『考神』の画像（図6-3-1）も「考神」の代表的な神像とされた。特に、2010年6月1日にその画像を掲げ、上に「もうすぐ来る試験のことで悩んでいるの。考神を拝めば試験合格。拝まなければ必ず落ちる。誠意があれば効果がある」（原文：你还在为将要到来的考试犯愁嘛？拜一拜考神，保你必过，如若不拜，考试必败。心诚则灵）と書き込んだあるスレッドが一番人気を集め、そのコメントとして2012年12月31日までは7966件の祈願が掲載され、現在まで増え続けている。ここではこれらの祈願を代表例として、「考神」の特徴を考察する。

(1) 祈願件数

まず、2010年6月1日から2012年12月31日まで月毎の祈願件数を図6-4-3にまとめた。「春哥」と同様に、成立当月の祈願件数が一番多く、その後減少する傾向があるが、6月と12月になれば再び祈願件数が増加してくる。「春哥」が段々と廃れていくのに対して、「考神」が2012年にまで大学入試の時期になれば大勢の祈願者が集まり、人気が衰えていないことが明らかである。

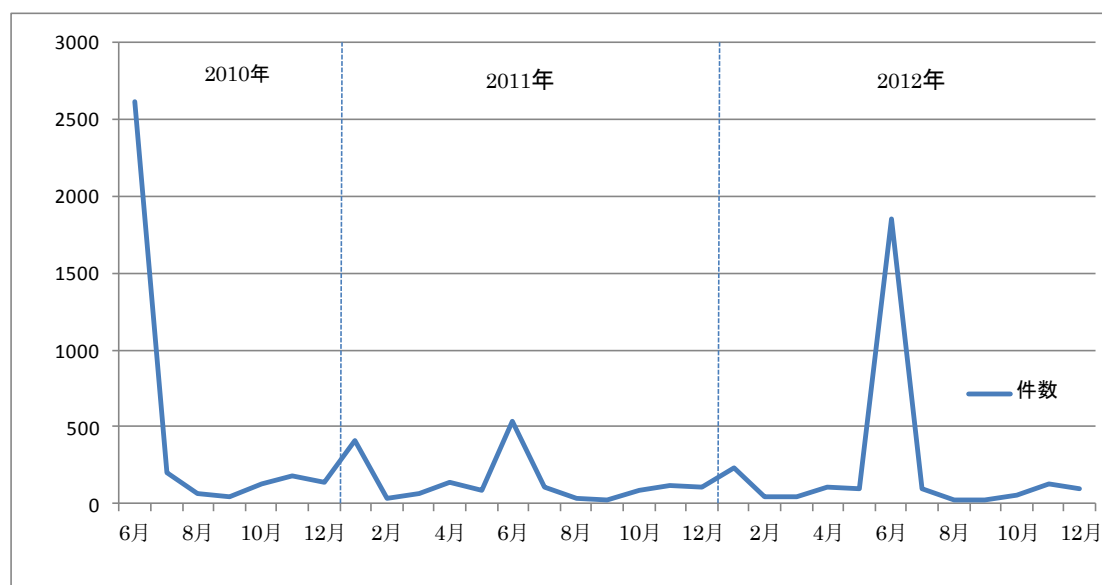


図 6-4-3 祈願件数の推移（全 7966 件）

(2) 祈願行為

次に、「考神」に対して特別な祈願行為があるか否かを考える。「春哥」に祈願する際、「iii」のような線香マークの使用が一つの特徴と言えるが、「考神」の場合、線香マークがほとんど見られず、他に共通のマークも使用されていない。「考神」の特徴は、「考神」の画像に対する意識の共有である。つまり、「春哥」を表し、それを「春哥」と見なす画像が存在していないのに対して、図 6-3-1 の「考神」の画像は祈願者に受け入れられ、定着していることが窺える。

また、「考神」の場合も「还愿（お礼参り）」の行為も見られたが、7966 件の祈願の中、「还愿（お礼参り）に来た」と書いたのは 18 件、「叶えてくれたら还愿（お礼参り）に来る」と書いたのは 45 件しかなく、「春哥」に比べれば非常に少ないことが分かる。

(3) 祈願内容

最後に、前節と同様に語彙の出現頻度を分析し、祈願内容を考察する。それを図 6-4-4 にまとめた。図 6-4-2 とは異なり、これらの祈願はほぼ全部試験に関するものである。特に、「中考（高校入試）」や「高考（高校入試）」に関する祈願が多いことから、主な祈願者は中学生や高校生であると推測できる。様々な試験や科目、さらにカンニングの成功を祈る学生の姿が浮彫りされる。また、「四级（四級）」と「六级（六級）」といった項目より、祈願者の中に大学生も入っていると窺える。それに、「女儿（娘）」と「儿子（息子）」のための祈願が数多く見られ、「受験の神」の祈願者は受験生の親にまで広がっていったという新聞記事の内容を裏付ける結果となっている。

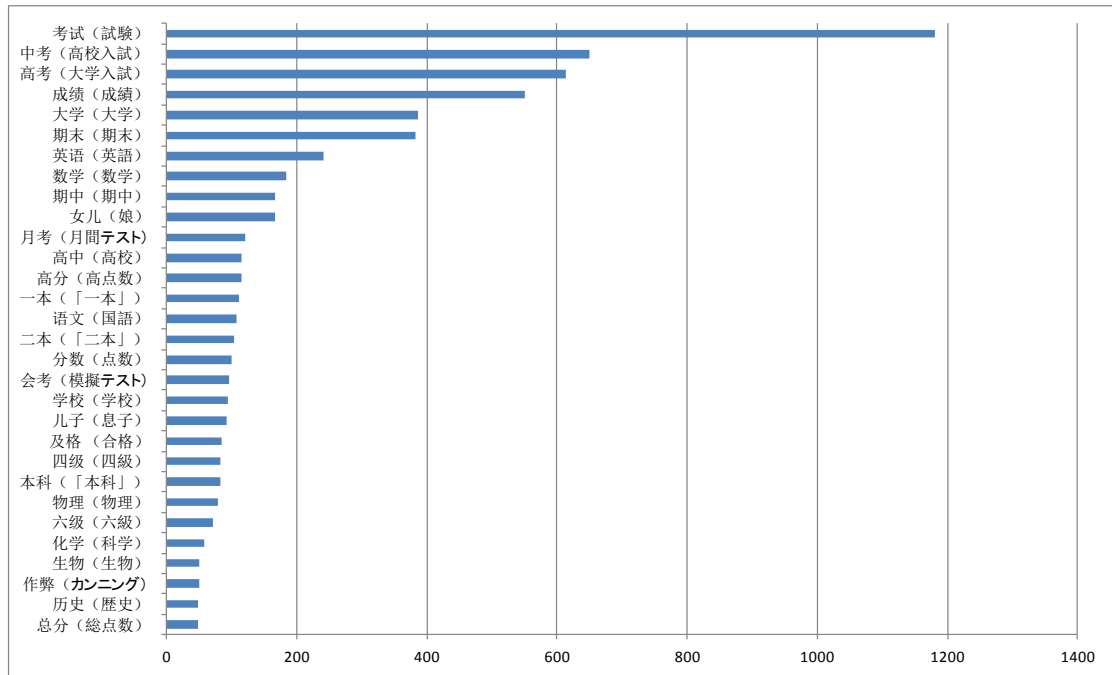


図 6-4-4 祈願内容に関する語彙の出現頻度 (前 30) ²⁰

総じて言えば、「春哥」は「考神」より祈願内容が多様であるが、両方とも試験をめぐる祈願がメインである。しかし、「春哥」には英語四級と英語六級の祈願が多く、「考神」には高校入試と大学入試の祈願が多いことから、「春哥」と「考神」が司る試験の種類は重なる部分もあるものの、大いに異なると推測される。また、「春哥」の祈願者は主に大学生であるのに対して、「考神」の祈願者は中学生と高校生を中心に、大学生と受験生の親も入っている。つまり、「受験の神」とされる「春哥」と「考神」は祈願内容と祈願者においては明らか相違していることが分かる。

考察

以上、現代中国における「受験の神」の流行過程をまとめ、「春哥」と「考神」に対する祈願の件数、行為、内容をめぐって考察を行った。大学生を中心とする人が試験に向かう際に、インターネットの中の「受験の神」を拝み、祈願することはまさに「困った時の神頼み」(中国語: 临时抱佛脚) である。この「受験の神」ブームに現れた数多くの祈願から、中国において「神」と「宗教」に対する膨大なニーズが潜んでいることが窺える。

従来の流行神と比較すると、中国の「受験の神」には以下の特徴が見られる。①急速なやはりと大規模な祈願者。どの祈願サイトも開設された後すぐに大規模な祈願者により、数多くの祈願が書き込まれ、急速に流行り出した。その後、急速に人気が減り、廃れてしまった祈願サイトもあれば、現在まで多くの祈願者を抱えるサイトもある。②祈願対象は抽象的なもの。祈願対象は図で現れた場合があるが、インターネットというバーチャルな世界に限り、目に見える現物の形で現れていない。③自発的で、宗教者が無関与。これらの祈願サイトは宗教者と関与せず、いずれも祈願者の自発的な祈願行為である。

この「受験の神」の出現は中国の宗教復興（秀村研二 [1993]、金勳 [2002]、清水勝彦 [2010]）を背景に、人々の宗教的需要の増加を基盤としている。80年代以降生まれた新たな宗教的需要の一つとしては、「難しい大学受験に合格するための祈願」が黄強により挙げられた（黄 2010: 44）。もちろん、大学受験だけではなく、「難しい各種受験に合格するための祈願」は大きな宗教的需要に違いない。その一番の需要者である大学受験生と大学生をはじめとする若い年齢層は、熟知しているインターネットと自身の宗教的需要を結びつける主力になっている。今後は、中国の宗教復興の事情を意識しつつ、インターネットにおける宗教の新たな動向に注目し、日本の事例との対照を課題とする。

¹ 中国インターネット情報センター(CNNIC) <http://www.cnnic.net.cn/hlwfzyj/jcsj/> 閲覧日 2012年12月31日

² 毎年6月7日から全国一斉に行われる。試験科目と実施期間は地方により異なる。文化大革命が原因で中断された大学の全国統一入試は1977年に再開した。2012年6月7日の『中国教育報』と2012年8月12日の『光明日報』によれば、1977年当時の全国平均合格率（定員数/受験生人数）は5%であったが、1999年から各大学の定員数が大幅に増加することにより、全国平均合格率が年々増えてきて、2011年この数値は72.3%になった。また、合格率が80%を超えている省は11箇所もある。中でも2011年吉林省の合格率は92%にも達し、このような地域ではもはや不合格が存在しなくなった一方、専門学校と普通大学の価値が下がり、重点大学や名門校をめぐる競争がより激しくなっているのは現状である。

³ 略称 CET-4 (College English Test Band 4)、CET-6 (College English Test Band 6)。毎年の6月と12月に2回行われる。英語能力を検定する全国試験として、主な受験者は各大学の学生である。満点は710点で、「英語六級」のほうがレベルが高い。「英語四級」で425点以上を取得できないと、「英語六級」を受ける資格がない。

⁴ 中国各地にあるが、四川省綿陽市梓潼県の七曲山にある「大廟」が本山とされる。

⁵ 豆瓣網(<http://www.douban.com>) : 書籍、映画、音楽の評論を特徴とするサイト。利用者は評論を发表或し、他人の評論を検索したり、閲覧したりすることができる。

⁶ 中国語において、「考神」という言葉は「人人網」と「考神吧」における「考神」のみを

指す場合もあれば、「春哥」、「範進」なども含めて統括的に「受験の神」を指す場合もある。筆者は具体的な意味を判断し、それぞれ「考神」と「受験の神」と呼び、使い分ける。

7 人人網 (<http://www.renren.com>) : フェスブックに似る SNS。

8 漫画『考神』は李長生のオンラインアルバム (<http://xiangce.baidu.com/u/2902739948>) で公開され、現在第 7 巻まで掲載されている。閲覧日 2012 年 12 月 31 日

9 百度 (<http://www.baidu.com>) : 中国最大級の検索サービスサイト。

10 搜狐 (<http://www.sohu.com>) : 中国最大級のポータルサイト。

11 百度百科「李宇春」 <http://baike.baidu.com/view/3202.htm> 閲覧日 2013 年 1 月 23 日

12 補考生とは追試を受ける学生を指す。補考期間は大学によって違い、統一されていない。

13 百度「考神吧」 <http://tieba.baidu.com/f?kw=%BF%BC%C9%F1#> 閲覧日 2012 年 12 月 31 日

14 同上。

15 搜狐「高考祈福台」 <http://qifu.in.sohu.com/> 閲覧日 2012 年 12 月 31 日

16 GE/Ge/ge : 「哥」の中国語発音表記。

17 你懂的/你懂得/你懂 (あなたなら分かる) : この言葉の由来は不明であるが、現在インターネットで遮断された政治的用語などを指す場合によく使われる。

18 武漢大学瀋陽博士が開発した中国語分詞分析ソフト ROST WordParser 5.5 を利用した。

19 叔叔 (おじさん) : この場合、叔叔 (おじさん) を恋人と指すことが多い。

20 「一本」、「二本」、「本科」 : 「本科」とは、「専科」(日本の専門学校に近い) に対し、四年制か五年制の大学を指す。全国一斉の大学入試が終わった後、点数により優先的に新入生を採択する大学は「一本」の大学と呼ぶ。いわば中国教育部に直属する大学や国、省(日本でいう県)の重点大学がそれに当たる。「二本」の大学(普通大学と一部の私立大学)と「三本」の大学(私立大学が多い)の新入生採択はその次順番に行う。

終章

本論文においては、『郷土の伝承』に見られる信仰の諸相を考察した上で、「奥州仙臺七福神」を始めとする5つの事例を取り上げ、その発生、展開過程などを具体的に分析した。ここでは、先行研究に指摘された流行現象の特質と対照とすることによって、これらの事例に見られる新たな特徴、流行を促す要素及び現代人の宗教意識をまとめていきたい。

1、現代の「流行神」

1-1、流行現象としての「流行神」

これまでの先行研究で最初にして最大のものと言える宮田登の論考には、流行神の「通時性」が繰り返し強調されている。つまり、流行神は、日本史の流れの中で時代と地域を問わずに現れるものである。そうだとすると、現代においても、流行神が存在するのは当然なことである。宮田は主に近世の流行神を中心に考察を行なうことで、流行神を定義し、宗教者の関与や神仏の靈験譚の流布などの特徴を指摘したが、すべての事例がそのような条件を満たしているわけではない。例えば、宮田は現代の流行神の一例として、1998年に建てられた「ハマの大魔神社」を取り上げている（宮田 1999：4-5）。この「ハマの大魔神」は横浜ベイスターズの投手佐々木主浩の右手の像を祀っていて、建立後あっという間参詣者が殺到し、またわずか数ヶ月で衰えてしまった。その流行過程においては、宗教者の関与も神仏の靈験譚の流布も見られず、その代わりに、メディアの報道が一番大きな推進力となっていたのである。宮田の研究においては、現代の事例を統合的に考察していなかったが、「ハマの大魔神」のような事例の指摘は、現代の流行神研究の可能性を示すことに重要な意味があると考えられる。

また、宮田により流行神の必須条件とされている「はやりすたり」の構造は、流行現象の特質ともされている。池内はそれを「浮動性」とまとめ、「これまでの研究者も多くはこれを流行の本質的な特徴と考え、この特性をそなえた現象のみを流行の範疇に入る現象と

して認めてきたようである」(池内 1968 : 317) と述べ、また、鈴木裕久と川本が示した流行現象の「短命性」と「一時性」もこの「はやりすたり」の構造と共通している。「短命性」と「一次性」とは、流行現象が普及している内に必然的に減衰していき、あるいは習慣として定着してしまうということである。習慣として定着する場合は、流行の特質である「新奇性」や「最近のものである」という特徴を失い、もはや流行ではなくなってしまう。流行神の場合も同様であり、流行を過ぎた後に姿を消してしまうこともあれば、習慣として残されていくこともある。その意味で、宮田のこの指摘は極めて肯定すべきである。

しかし、すでに鈴木岩弓によって批判されたように、宮田の定義はすべて流行の完了したものに限定され、現在流行中の流行神を対象とする研究は成立し得ないことになる。そこで鈴木は現在進行している流行神に目を向け、流行神を「ことさら霊威ある存在と観念され、以前よりも、あるいは同時代の他の神仏よりも、熱狂的な多くの人々から信仰対象として選択されている神仏」と定義し、また宗教施設の拡大など流行神を判断する具体的な指標を提示した。要するに、流行現象に見られる一連の現象に注目したのである。鈴木がこの視点は、流行を集団行動や集合現象として捉える南(1957)や斎藤(1959)の定義に共通性を見出すことができる。

こうして、社会学の立場からの流行研究を踏まえれば、宮田と鈴木岩弓の理論は決して矛盾しているわけではなく、むしろ両者を統合的に考えたほうがより流行神の本質に近づくことができる。つまり、流行神は流行現象の一種として、必ず集団行動による何らかの現象が伴っている。例えば、参詣者の増加や観光バスの殺到、更にインターネットの世界に敷衍すれば、インターネット上の祈願者やグッズの購入者の増加などの現象を挙げることができる。だが、現在流行中の神仏であっても、必ずいつかすたれてしまう。なぜならば、たとえ消滅せずに生き残っても、流行は常に最新のものでなければいけないため、流行神はある時点を過ぎたら、日常的な習慣となり、流行神でなくなってしまうからである。

1-2、流行の特質から見る「流行神」

こうして流行研究の理論を踏まえ、本論で取り上げた「奥州仙臺七福神」、貧乏神神社、仙台幸子、「願いの宮」及び中国の「受験の神」などの事例は鈴木裕久と川本が示した流行

の特質を備えているかどうかについて考察したい。

これらの事例はいずれも新しく発生したものであり、その後参拝者または祈願者、あるいはそれに相当するご利益体験者の急増により普及していった。まず、流行現象の最大公約数的特質の「最新のもの」（新奇性）、「短命性」（一時性）と「瑣末性」は備えられていると考えられる。具体的に言えば、「最新のもの」（新奇性）という点はマスコミに報道されることから窺うことができる。マスコミはこれらの神仏をこれまでにない新奇あるいは珍奇なものとして捉え、その話題性を売り物にすることにより視聴者の目を惹きつけようとしている。「短命性」（一時性）は、参拝者か祈願者、あるいはご利益体験者の人数変化に見ることができる。例えば、「願いの宮」の事例では調査した時点で、まだ参詣者が増え続けている時期であったが、ほかの事例はいずれもピークを過ぎ、参詣者（購入者や祈願者）の減少傾向が出てきた。その内、仙台幸子のようにほぼ完全に購入者がなくなってしまった場合もあれば、「奥州仙臺七福神」のように参詣者、特にツアー客がある程度安定している場合もある。「瑣末性」については、これらの神仏は参詣者（購入者や祈願者）を多く引きつけたものの、伝統宗教に取って代わるまでの新興宗教に至らなかったため、「瑣末性」を備えていると言えよう。

ほかに、鈴木裕久は流行の特質として、「効用からの独立」と「機能的選択肢の存在」を指摘している。筆者はこのうち「効用からの独立」という点に疑問を感じている。例えば、金色のネクタイは、数年前鳩山前総理大臣の愛用がきっかけに百貨店で特設コーナーが設けられたほど大人気になった。その際金色のネクタイは、ネクタイ本来の効用ではなく、有名人が着用したことで流行り出したため、「効用からの独立」と言うことができるが、それに対して、近年流行の PC メガネが、PC やスマホなどから発せられるブルーライトから眼を守ると言われるため使用者が急増し、まさに「効用による流行」であると考えることができる。仙台幸子や貧乏神神社の場合も同様、マスコミにより大いに喧伝された金銭をもたらすご利益を求めると予想され、それは「効用からの独立」ではなく、「効用による流行」であろう。また、「機能的選択肢の存在」という特質は、流行神に当てはまる。特に日本は数多くの神仏が存在し、時と場合によって自由に選ぶことが可能な社会的・

文化的背景があり、その内多くの人により選択されたものが流行神となる。本論で取り上げた事例もそれであり、それと同じようなご利益が求められる神仏、つまり選択肢が多く存在していることが確実に言える。それに、川本が指摘した「社会的・文化的背景を反映する」と「一定の規模を持つ」という点も本論に挙げた事例に見られた。特にインターネットに関連する場合、インターネット上の布教や祈願など現代ならではの特徴が見られ、まさに社会的・文化的背景を反映しているに違いない。「一定の規模を持つ」ことは鈴木岩弓の研究においても実証されたが、仙台幸子や「願いの宮」の場合においても購入者数や参詣者（祈願者）数が確定でき、流行の規模を把握することができた。

総じて言えば、本論に挙げた事例は、「効用からの独立」という点を除き、鈴木裕久と川本が指摘した流行の特質とされるものが確認できた。このような「最新のもの」（新奇性）、「短命性」（一時性）と「瑣末性」などの特徴は把握しやすく、流行神を限定する際の指標になると考えられる。

1-3、現代の「流行神」の様相

さて、本論で考察を行った事例は、現代の「流行神」として、いかなる特徴が見られたのかをまとめていきたい。

①新しい推進力。これまでのクチコミに取って代わり、マスコミが神仏を流行らせる重要な役割を果たしている。程度の違いはあるものの、本論で取り上げた事例はすべてマスコミに取り上げられたことがあり、中には貧乏神神社のように長期間にわたって報道され続けたものもあれば、仙台幸子のように短期間で盛んに報道されただけのものもある。「願いの宮」の場合、マスコミに取り上げられたとたんに、参詣者が急増し、マスコミの宣伝効果が非常に顕著であった。また、新しいマスコミとして考えられるが、インターネットも強大な発信力を持ち、特にミクシィや **FACEBOOK** といった **SNS** の利用により参拝者が増えてきたことは実証された。ほかに、ツーリズム産業の発展に伴い、旅行会社は神仏仏閣などをツアーに取り入れ、旅行企画を売り込もうとしたため、結果として参詣者を増加させることになった。このように、マスコミ、インターネットやツーリズムが神仏を流行らせる新しい推進力となったのである。

②宗教との接し方の変化。インターネットの発達人は人と宗教との接し方に変化をもたらした。例えば従来の場合、信仰者と神仏との関わり方は「参詣」を通じてなされていたが、仙台幸子の場合は鎮座地がないため、「参詣」のような行動がされていなかった。「願いの宮」もインターネットで祈願し、宮司に取次してもらうことも可能になったため、祈願者は宮を訪れ神と直接関わらなくてもおかげがもらえるようになった。さらに、中国の「受験の神」の場合、祈願対象は図で現れた場合があるが、インターネットというバーチャルな世界に限ると、目に見える現物の形で現れていない。こうしてインターネットを通して、これまでになかった祈願の仕方が実現されるようになったのである。

③俗人による運営。鈴木岩弓により報告された首無地藏などの事例においては、宗教者ではなく、俗人だけの緩やかな組織によって運営されている点が指摘された（鈴木岩弓 1992 : 45）。「奥州仙臺七福神」と「願いの宮」を除き、すべて俗人による運営であり、しかも宗教者がいっさい関与していなかったことが特徴と言える。しかし、俗人ではあるが、仙台幸子の娘の峰ハチヨや貧乏神神社の経営者の櫻井夫婦は、従来の民間宗教者と同じように、神仏の「靈験」を知らしめる役割を果たしてきた。

④宗教性の希薄。流行神を起こさせる場合、必ず神や仏の新しい靈験を創作する宗教者が介在していると宮田は論じた（宮田 1972 : 28）が、筆者が事例として挙げたこれらの事例には神仏の顕現など不可思議な話はほとんど見られず、神の靈威や靈力に対する意識が低くなってきたことが推察できる。その反面、祈願成就の体験談が多く出回り、ご利益への関心だけが極めて高いことが明らかである。また、講のような宗教集団に至らず、たとえ金光教桃山教会「願いの宮」といった特定の宗教と関わる場合でも、その参詣者は金光教教団との相互関係が極めて疎遠で、自由であると思われる。そのような宗教性の希薄は、現代特にインターネットの世界における流行神に対する信仰の実態と考えられる。

このように流行神は社会背景の変化に伴い、さまざまな面において新しい様相を呈している。次項では、流行神の発生と伝播を促すために大きな役割を果たしたマスコミ、インターネット及びツーリズムがいかに関わっているのかを具体的に分析したい。

2、マスコミの作用

2-1、流行らせる・流行させない

言うまでもなく、マスコミは常に新しい行動なり、思考なりに関する情報を世に提供している。その強大な宣伝力で流行神の成立と普及を促す効果は、すでにくつかりの事例により証明された。流行とマスコミの関連性に関して、川本はマスコミが「流行の成立をうながす作用」と「流行の普及を促進さす作用」があると指摘した（川本 1981：202-208）。流行神の場合は、ご利益体験談の流布もマスコミと緊密に関わり、例えば仙台幸子がマスコミに頻繁に取り上げられた際に、ご利益体験談も数多く出回ったが、マスコミの報道が下火になったとたん、ご利益体験談も直ちに減ってしまい、やがて現れなくなった。川本は「流行の成立をうながす作用」と「流行の普及を促進さす作用」のほかに、「流行を衰退させる作用」があると述べている。すなわち「マス・メディアが、次から次へと新しいものを提示することによって、新しい環境をつくり、以前のものに欲求不満を生じさせ、その解消に向けて、新しい様式を消費することを人々に要求するからである。それは、既存の様式を廃棄させることを意味するのである」と論じている（川本 1981：208）。仙台幸子はまさにそうであり、マスコミに報道されなくなったことに伴い、ご利益体験談も現れなくなったというのは、マスコミもグッズ購入者ももはやそこへ注目せず、「仙台幸子」という様式を廃棄してしまったことを意味する。その際、マスコミは「流行を衰退させる作用」として働いたのである。

2-2、マスコミの取捨選択

また宗教を題材とする際、何を報道するか否かはマスコミの取捨選択によるということがいえる。その取捨選択が明らかに示されたのは貧乏神神社の例である。マスコミは貧乏神神社を珍奇な神社、金銭をもたらさずご利益のある神社として捉え、盛んに報道することにより、貧乏神神社は多くの参拝者を引き寄せた。しかし、病気治癒のご利益があると訴える人が多いものの、マスコミは櫻井の「気」と「天の大神」の理論や病気治癒のご利益にほとんど報じていない。つまり、マスメディアは貧乏神神社の珍奇性と金銭をもたらさ

ご利益に関しては積極的に報道するのに対して、「気」のパワーという宗教的民間医療に関する部分は切捨てる姿勢をとってきた。「願いの宮」の場合も似たような状況が見られた。

「願いの宮」はテレビに取り上げられたが、その中では決して金光教というラベルを見せなかった。テレビ側は新宗教に関する報道規制があるからかもしれないが、このように「ご利益」の部分だけ拾い上げ、新宗教や宗教的民間医療の部分は捨てることにより、流行らせるものと流行らせないものを選別したのだと言える。

3、インターネットの活用——通販と祈願

1990年から世界範囲でインターネットが普及し始め、宗教の分野にも大きな影響をもたらした。まず、挙げられるのは、各宗教団体がホームページを開設し、宗教情報を発信し、新しい布教や伝道の手段が実現されたことである。ところが、「2000年になったという段階では、日本では、宗教団体の大半が、この新しいツールを積極的に導入・利用する姿勢を見せているとは言い難い面がある」（井上 2000：9）と井上が述べ、現在においても、決してそのような状況が変わったとは言えないし、またインターネットを通じた布教や伝道の効果は非常に限られていると指摘されている（黒崎 2005）。もう一つの変化は、インターネットを通して信者との交流やヴァーチャル参拝が実現され、人と宗教の接し方が多様になったことである。例えば、金光教尼崎教会がインターネットを通じて「取次」をする事例は、2002年に川端亮・兼子一により報告された。しかし、その利用者は少人数にとどまり、大きなインパクトを与えていないと言える。

宗教との接し方については、これまであまり言及されてないご利益グッズの販売やインターネット上の祈願が仙台幸子、「願いの宮」及び中国の「受験の神」などの事例において確認できた。仙台幸子の場合、グッズ購入者はインターネットからグッズを購入し、そのグッズを通して、「幸運の女神」とされる仙台幸子に幸運をあやかり、ご利益をもらう仕組みである。「願いの宮」と中国の「受験の神」の場合、祈願者はインターネットで願い事を記入することで祈願が完成し、それはインターネット時代ならではの祈願方法であるといえる。しかも、そのいずれも数多くのグッズ購入者や祈願者を引きつけたことに成功した。こうして、仕掛ける側はインターネットを通じて購入者や祈願者の拡大を実現し、

一方購入者や祈願者はインターネットを通じて気軽に、便利にご利益のもらえる宗教を手に入れる。インターネットにおける宗教に、新たに展開する可能性が提示されたということができよう。

4、ツーリズムの働き

4-1、宗教の商品化

1980年代半ば以降、ツーリズムは世界最大の産業になったと言われ(山中 2012:3)、そうした状況を背景に、ツーリズムは宗教の領域にも浸透していった。本論で考察を行った「奥州仙臺七福神」と貧乏神神社は、観光会社により商品化されていく過程の中で流行り出したことが証明され、ツーリズムと緊密に関わっていることは明らかである。ツーリズムにおける宗教の商品化については、板井(2012)と松井(2012)はそれぞれ伊勢神宮と長崎の教会群の商品化過程に注目した。しかしそれらの古くから威信のある宗教施設と違い、貧乏神神社は新たに生まれた参詣地であり、比較的新しい「聖地」である。観光産業によってこの「聖地」を旅行商品として取り入れ、商品として売り込もうとする過程は、巡礼ツーリズムと同様に、『外部』からやってきた産業セクターの主導によるものであった(岡田 2013:99)。同時に神社経営者の櫻井夫婦による初期の営業活動という「内部」からの働きかけは、無名であった貧乏神神社の名を知らしめたと同時に、観光産業とつながせる重要な意味があったのである。

4-2、宗教と娯楽

貧乏神神社を取り入れるツアーコースには、貧乏神神社のほかに、温泉やグルメなどを取り入れる「食べ歩き」や「温泉と食べ放題」のコースが数多く組まれた。ツアー客は貧乏神神社で祈りや願掛けをした後、美食や美景などの娯楽も楽しんでくるのである。要するに、ツアー客は「聖」としての宗教的な行動を執り行う同時に、「俗」としての娯楽も求めている。その点は、佐藤(2004)による四国巡礼の研究においても見られ、また安藤(2009)が指摘した近世の御開帳の娯楽性も、宗教と娯楽が矛盾なく共存していることを示した。実際、貧乏神神社や「願いの宮」の場合、そこへの参詣自体は一種の娯楽ともなりうると

考えられる。そこへ向かう参詣者は、当然熱狂的な信仰者もいるが、ご利益と共にエンタテインメントやリラックスなどを求めるために訪れる人も少数ではない。現代において、このように宗教と娯楽が切っても切れない関係を保っていることは、現代人の信仰そのものということができるであろう。

5、現代人の宗教意識

最後に、現代の「流行神」と発生と伝播の背後に、現代人のどのような宗教意識が存在しているのか考えていきたい。

①社会不安とご利益への追求。宮田は流行神が流行する背景に、社会的緊張ないし社会不安の存在を指摘し、「社会経済的に逼迫している変革期に、より多く流行神が集中する」（宮田 2006 : 211）と述べた。1970年代からの七福神の流行は、新聞紙などのマスコミは屢々これを経済的な不況という社会背景と結び付けている。当時の社会状況を振り返れば、1973年にオイル・ショックが発生し、日本はこれまでの高度経済成長が終焉を迎え、世界規模で不況に陥ったのである。NHK放送世論調査所（1984）は、1973頃から、これまでの脱宗教的な傾向が逆転し、日本人は再び宗教に近づきつつあることを指摘し、これを宗教回帰現象と名付けた。また、オイル・ショックを契機に、「物の豊さ」から「心の豊さ」へと人々の生活態度に変化が生じたことを指摘している。その後の日本は、好況と不況が繰り返し、現在も決して明るい経済状況とは言えない。当然いつの時代でも、金銭は欲しがられるものであるが、今のような社会状況を背景に、経済低迷による社会不安は仙台幸子や貧乏神のような金銭をもたらすとされる神仏の流行に拍車をかけた。宮田は著作の中で、繰り返し民衆のご利益への執着を強調してきた。時代が変わり、神仏との接し方が変化しても、このご利益への執着は時代を問わず不変なものである。マスコミもこのような人の心理に答えるように、もっぱら神仏のご利益だけを盛大に喧伝する傾向がある。

②その都度的関わり。森岡清美（1981）は現代人と宗教との関わりかたを「一時的な関わり」、「表面的な関わり」、「功利的な関わり」と「開放的な関わり」とまとめた。つまり、現代人は、その必要が生じた時だけ宗教と接触し、その接触は表面的、皮相的でご利益中心である。また、宗教的サービスは信者に限らず開放的に提供されている。そのような関

わり方は、鈴木岩弓が提示した「檀家を持たない寺院」にも反映されている。「檀家を持たない寺院」とは「檀家を持つ寺院」に対し、「個人の信仰に基づいた自由な選択によりなされるものに限定される点が異なっており、さらにそこでの関わりはある程度明確な目的を持つものに限られる傾向がある」寺院とされ、「その都度的関わり」が持たれている（鈴木1987：60、75）。本論で取り上げた事例は、購入者（参詣者・祈願者）は、流行神と「その都度的関わり」で関係を維持している。例えば、貧乏神神社と「願いの宮」は、いずれも氏子に相当するものが存在しておらず、そこに訪れる人は明確な目的を持ち、その目的が達成すれば、「その都度的関わり」が終了し、関係性が消滅してしまう。貧乏神神社の祭主によると、ほんの少数の「常連さん」を除けば、訪れている参詣者はほとんど顔見知りではない人である。「願いの宮」も全く同様である。このように購入者（参詣者・祈願者）と神仏は実は緩やかな関係に結ばれ、その関係自体が解消されやすい。ただ、七福神の社寺は、「檀家を持つ寺院」と「檀家を持たない寺院」との両方の性格を持つ場合もあり、その点は看過することはできないだろう。

③消費される宗教。これまで「聖地」あるいは「聖なる旅」を商品とする事例が報告されてきたが、そのような古くから威信のある宗教施設だけではなく、貧乏神神社のような新しい「聖地」も、観光業者に商品として取り入れられ、売り込まれていることが見られた。貧乏神神社、観光業者と参詣者の関係は、まさに「売り手」、「百貨店」と「買い手」に例えられる。観光業者は「売り手」として貧乏神神社から宗教的サービスを買取り（実質金銭の流通がないが）、その商品をほかの美景や美食と一緒に取り入れ、「盛り合わせ」にして「買い手」としてのツアー参詣者に売り込み、ツアー参加者は「百貨店」と経由して宗教的サービスを消費する。仙台幸子の場合は、「百貨店」の関与がないが、経営者は「売り手」として、グッズに付加されているご利益を商品に「買い手」に販売する。「買い手」とっては、宗教サービスは金銭で買えるものとなり、今所有しているものに飽きれば、また別のものを買えばよいわけである。そのような消費される宗教としての性格は、伝統的宗教から離れた「瑣末性」のある流行神のほうが、より顕著に示していると言えるだろう。

宗教は時代とともに変化し、その変化を敏感に感知し、反映するのが流行神であろう。現代の流行神は、人の需要に応じて発生し、また、様々な要素によって拡大し、伝播していく。今後、新しい流行神はいかなる風貌で登場するのか、引き続き注目していきたい。

引用・参考文献一覧（五十音順）

序章

池内一、1968、「流行」、八木冕編、『心理学Ⅱ』、培風館

伊藤唯真、1979、「崇り神・流行神」、櫻井徳太郎編『講座日本の民俗 7』、有精堂

榎陽介・大嶋善孝、1985、「はやりがみ」、『日本宗教事典』、弘文堂

小田島建己、2013、「新川の「長命水」——爆ぜなかった擬「流行神」」、『東北民俗』第
47 輯、東北民俗の会

川本勝、1981、『流行の社会心理』、勁草書房

菊地健策、1980、「流行神」、櫻井徳太郎編『民間信仰事典』、東京堂

斎藤定良、1959、「流行」、戸川行男他編、『現代社会心理学 4 大衆現象の心理』、中山書
店

繁田信一、2011、「流行神と平安京の庶民たち—王朝民俗学の可能性（特集 歴史学と民俗
学）」、『歴史と民俗』(27)、平凡社

鈴木岩弓、1995、「庶民信仰の形成—『首無地蔵』に見る地蔵顕現の意味—」（1982）、『「宗
教現象の地平」—人間・思想・文化—』、岩田書院

鈴木岩弓、1992a、『「流行神」の形成とその展開に関する実証的研究—中国地方の事例を
中心に—』（研究成果報告書）、島根大学教育学部

鈴木岩弓、1992b、『「流行神」の誕生と靈威譚—横樋観音の場合—』、『島根大学教育学部
紀要』第 26 卷、島根大学

鈴木岩弓、1995、『「首無地蔵」信仰の展開構造』、『宗教研究』第 69 卷 3 輯、日本宗教学
会

鈴木裕久、1977、「流行」、池内一編『社会心理学 3 集合現象』、東京大学出版会

藤竹暁、1969、『廢用の理論』、誠文堂新光社

松岡静雄、1938、『日本固有民族信仰』、刀江書院

南博、1957、『体系社会心理学』、光文社

- 宮田登、1972a、『近世の流行神』、『日本人の行動と思想 17』、評論社
- 宮田登、1972b、「流行神」、大塚民俗学会編『日本民俗事典』、弘文堂
- 宮田登、1977、『民俗宗教論の課題』、未来社
- 宮田登、2006、『はやり神と民衆宗教』、『宮田登 日本を語る 3』、吉川弘文館
- 宮本常一、1940、「はやり出す神」、『民族文化』第8号、山岡書店
- 村田典生、2010、「流行り出す神仏--その構造と思想」、『京都民俗』(27)、京都民俗学談話会
- 村田典生、2011、「「縁結び」に見る民間信仰の現代的流行：流行神の展開とその要因の考察」、『鷹陵史学』37、仏教大学
- 村田典生、2012、「流行神の展開過程：近世山科妙見を事例として」、『佛教大学大学院紀要』文学研究科篇第40号、佛教大学大学院
- 柳田國男、1997、「石神問答」(1910)、『柳田國男全集 1』、筑摩書房

第一章

- 岩崎敏夫、1982、『東北民間信仰の研究』(上巻)、名著出版
- 岩崎敏夫、1983、『東北民間信仰の研究』(上巻)、名著出版
- 蔵王町史編さん委員会編、1993、『蔵王町史 民俗生活編』、蔵王町
- 仙台市史編さん委員会、1998、『仙台市史 特別編 6 民俗』、仙台市
- 竹内利美、1974、『宮城』、『日本の民俗 4』、第一法規出版
- 二瓶美佳、2005、「安産祈願～宮城県刈田郡蔵王町平沢の安産達磨を中心に～」、『東北民俗学研究』第8号、東北学院大学民俗学OB会
- 根白石史編纂委員会、1957、『宮城縣根白石村史』、宮城縣根白石村役場
- 宮城県教育会、1931(1981)、『郷土の伝承』、セイトウ社
- 宮田登、1972a、『近世の流行神』、『日本人の行動と思想 17』、評論社

第二章

伊藤唯真、1998、「七福神もうで」、宮田登編『七福神信仰事典』、戎光祥出版
奥州仙臺七福神霊場会、2003、『奥州仙臺七福神物語』、奥州仙臺七福神霊場会
喜田貞吉、1980、『喜田貞吉著作集 11 信仰と民俗』、平凡社
白木利幸、1995、『七福神巡拝』、朱鷺書房
中村元 [ほか] 編、2002、『岩波仏教辞典』、岩波書店
工藤寛正、みわ明、2002、『全国七福神めぐり—七難をさけて七福を得る』、東京堂出版
宮田登編、1998、『七福神信仰事典』、戎光祥出版
宮田登、1972、『近世の流行神』、評論社
吉岡一男、1993、『仙台の守本尊信仰』、宝文堂

第三章

Gisbert Rinschede, 1992, 'Forms of religious tourism', *Annals of Tourism Research*, 19(1), pp. 51-67

岡本亮輔、2011、「場所の再表象：宗教ツーリズム論からみたパワースポット」、『哲学・思想論集』(37)、筑波大学哲学・思想学系

門田岳久、2013、『巡礼ツーリズムの民族誌：消費される宗教経験』、森話社

小池靖、2005、「ヒーリング」、井上順孝編『現代宗教事典』、弘文堂

財津直美、2012、「災禍転福貧乏神神社の信仰と儀礼」、『西郊民俗』(222)、西郊民俗談話会

櫻井鉄扇、2007、『「世直し不動」さまのお出ましじゃ…』、いいだ編集工房

佐藤久光、2004、『遍路巡礼の社会学』、人文書院

星野英紀、山中弘、岡本亮輔編、2012、『聖地巡礼ツーリズム』、弘文堂

山中弘編、2012、『宗教とツーリズム：聖なるものの変容と持続』、世界思想社

第四章

大島建彦、2008、「仙台の『福の神』」、『疫神と福神』、三弥井書店

大沢忍、1994、『不思議な福の神「仙台四郎」の解明－その実在と世界の分析』、近代文藝社、

菊田定郷、1974、「四郎（白痴）」、『仙台人名大辞書』、歴史図書社

栗野邦夫、1993、『不況を吹き飛ばすという福の神 仙台四郎のなぞ』、星雲社

清水大慈、1999、「社会的弱者の聖化の研究－仙台四郎伝承の発生と展開を中心として－」、
『日本民俗学』217号、日本民俗学会

鈴木綾、2009、「キャラが文化をつくるとき－仙台幸子にみる地域文化の構築過程」、『東北文学の世界』17号、盛岡大学文学部日本文学科

鈴木岩弓、1995、「庶民信仰の形成－『首無地蔵』に見る地蔵顕現の意味－」（1982）、『「宗教現象の地平」－人間・思想・文化－』、岩田書院

鈴木岩弓、1992a、『「流行神」の形成とその展開に関する実証的研究－中国地方の事例を中心に－』（研究成果報告書）、島根大学教育学部

鈴木岩弓、1992b、『「流行神」の誕生と霊威譚－横樋観音の場合－』、『島根大学教育学部紀要』第26巻、島根大学

鈴木岩弓、1995、『「首無地蔵」信仰の展開構造』、『宗教研究』第69巻3輯、日本宗教学会

仙台なつかしクラブ編、2005、『明治の福の神仙台四郎+平成の幸運の女神仙台幸子』（巻号）、仙台なつかしクラブ

峰ハチヨ、2006、『仙台幸子伝説 さちぼん』、ビジネス社

宮田登、1972a、『近世の流行神』、『日本人の行動と思想 17』、評論社

宮田登、1972b、「流行神」、大塚民俗学会編『日本民俗事典』、弘文堂

宮田登編、1998、『七福神信仰事典』、戎光祥出版

宮本袈裟雄、1987、『福神信仰』、『民衆宗教史叢書 第二十巻』、雄山閣

ウェブサイト

仙台幸子オフィシャルサイト

<http://www.sm.rim.or.jp/~mine-46/> (旧)

<http://sendaisachiko.jimdo.com/> (新)

仙台の「ミッキーズトイ」サイト

<http://www.mickeys-toy.com/index.html>

京都の「喫茶みわく」サイト

http://blog.livedoor.jp/miwaku389/archives/cat_50003287.html

第五章

井上順孝・孝本貢・対馬路人・中牧弘允・西山茂、1996、『新宗教教団・人物事典』、弘文堂

井上順孝、2003、『IT時代の宗教を考える』、法蔵館

井上順孝責任編集、2000、国際宗教研究所編『インターネット時代の宗教』、新書館

川端亮・兼子一、2002、「IT化された宗教実践—ある金光教教師の挑戦—」、宗教社会学の会編『新世紀の宗教—「聖なるもの」の現代的諸相—』、創元社

黒崎浩行、2005、「インターネットと宗教」、井上順孝編『現代宗教事典』、弘文堂

黒崎浩行、2008、「ヴァーチャル参拝のゆくえ」、国際宗教研究所編『現代宗教 2008 特集：メディアが生み出す神々』、秋山書店

金光教本部教庁、1983、『金光教経典』、金光教本部教庁

鈴木岩弓、1995、「庶民信仰の形成—『首無地蔵』に見る地蔵顕現の意味—」(1982)、『「宗教現象の地平」—人間・思想・文化—』、岩田書院

鈴木岩弓、1992a、『「流行神」の形成とその展開に関する実証的研究—中国地方の事例を中心に—』(研究成果報告書)、島根大学教育学部

鈴木岩弓、1992b、『「流行神」の誕生と靈威譚—横樋観音の場合—』、『島根大学教育学部紀要』第26巻、島根大学

宮田登、1972、『近世の流行神』、『日本人の行動と思想 17』、評論社

ウェブサイト

「願いの宮」公式サイト <http://negainomiya.com/>

第六章

金 勲、2002、「現代中国社会における『宗教ブーム』に関する一考察」、『大阪経済法科大学論集』(82)、大阪経済法科大学経法学会

黄 強、2006、「中国における民間宗教信仰の復興--福建省廈門市海滄区の青礁慈濟宮を中心として」、『アリーナ』(3)、風媒社

黄 強、2008、「中国上海市における仏教の復興」、『貿易風：中部大学国際関係学部論集』(3)、中部大学国際関係学部

黄 強、2010、「市場経済化する宗教—中国上海市における道教の変遷と復興—」、『貿易風』(5)、中部大学国際関係学部

黄緑萍、2011a、「仙台幸子に関する比較研究—流行神の視点で—」、『論集』第38号、印度学宗教学会

黄緑萍、2011b、「インターネット時代の流行神—『願いの宮』を事例に—」、『東北宗教学』第7号、東北大学宗教学研究室

清水勝彦、2010、「『復興元年』を迎えた中国宗教（アジアのキリスト教と信教の自由—現代中国のキリスト教の現状と展望）」、『キリスト教文化学会年報』(56)、キリスト教文化学会

秀村研二、1993、「現代中国農村における宗教復興」、『明星大学研究紀要。日本文化学部・言語文化学科』(1)、明星大学日本文化学部言語文学科

温敏哲、2009、「春哥教簡史」、『新世纪周刊』第20期

祈願サイト

豆瓣網「春哥」<http://www.douban.com/group/topic/8892057/>

人人網「考神」<http://page.renren.com/600002903?from=opensearch>

百度「考神吧」<http://tieba.baidu.com/f?kw=%BF%BC%C9%F1>

人人網「範進」<http://page.renren.com/600010353?from=opensearch>

搜狐「高考祈福台」<http://qifu.in.sohu.com/>

終章

安藤優一郎、2009、『大江戸お寺繁昌記』、平凡社

板井正斉、2012、「観光再生と伊勢神宮 — ホスト側の「伊勢神宮らしさ」」、山中弘編『宗教とツーリズム：聖なるものの変容と持続』、世界思想社

井上順孝責任編集、2000、国際宗教研究所編『インターネット時代の宗教』、新書館

井上順孝、2005、『現代宗教事典』、弘文堂

池内一、1968、「流行」、八木冕編、『心理学Ⅱ』、培風館

門田岳久、2013、『巡礼ツーリズムの民族誌：消費される宗教経験』、森話社

川端亮・兼子一、2002、「IT化された宗教実践—ある金光教教師の挑戦—」、宗教社会学の会編『新世紀の宗教—「聖なるもの」の現代的諸相—』、創元社

川本勝、1981、『流行の社会心理』、勁草書房

黒崎浩行、2005、「インターネットと宗教」、井上順孝編『現代宗教事典』、弘文堂

斎藤定良、1959、「流行」、戸川行男他編、『現代社会心理学 4 大衆現象の心理』、中山書店

佐藤久光、2004、『遍路巡礼の社会学』、人文書院

島田裕巳、1996、「メディアとの関わり」、清水雅人編『新宗教時代 5』、大蔵出版

鈴木岩弓、1987、「<檀家を持たない寺院>に対する「祈り」の諸相—摩尼寺の事例を参考に」、『山陰地域研究』第3号、島根大学山陰地域研究総合センター

鈴木岩弓、1992、『「流行神」の形成とその展開に関する実証的研究—中国地方の事例を中心に—』（研究成果報告書）、島根大学教育学部

鈴木裕久、1977、「流行」、池内一編『社会心理学 3 集合現象』、東京大学出版会

鈴木裕久、1979、「流行の"送り手"の意見：調査報告」、『東京大学新聞研究所紀要』27、

東京大学

中島純一、2013、『メディアと流行の心理』、金子書房

NHK 放送世論調査所編、1984、『日本人の宗教意識』、日本放送出版協会

松井圭介、2012、「ヘリテージ化される聖地と場所の商品化」、山中弘編『宗教とツーリズム：聖なるものの変容と持続』、世界思想社

南博、1957、『体系社会心理学』、光文社

宮田登、1972、『近世の流行神』、『日本人の行動と思想 17』、評論社

宮田登、1999、『都市とフォークロア』、御茶の水書房

宮田登、2006、『はやり神と民衆宗教』、『宮田登日本を語る 3』、吉川弘文館

森岡清美、1981、「現代社会の人間と宗教」、『現代人と宗教』、有斐閣